

第107図 興道寺廢寺遺構分布図 (縮尺 1/500)

### 三重弧文軒平瓦 (26、99、100、218、241、242、312)

瓦当厚は4 cm内外。段顎は見られない。瓦当弧線は型押しで厚く平坦に作る。凹線は浅く鋭い箱型、U字状を呈する。平瓦部広端凸面(凸面顎部)には方形区画の中に1単位4枚の花弁を配する型押し文を連続的に配する。この型押し文の剥離面には平行叩きの痕跡が残る。平瓦部凹面には強い縦ナデにより布目をナデ消すものとそのまま布目を残すものが混在する。焼成は総じて甘く、乳白色、赤褐色を呈する。出土点数は8点(未報告資料含む)。出土地点は塔基壇西辺、金堂基壇東辺、中門基壇付近である。

### 軒瓦Ⅱ型式

#### 素弁十葉蓮華文軒丸瓦 (25、90~94、161、162、176、177、236~239、341、380)

瓦当径17 cm前後。この型式は瓦当文様の精粗差からⅡ1型式とⅡ2型式とに細分した。Ⅱ型式は基本的に瓦当を比較的薄く作り、鋭い蓮子を1+8に配する中房と、蓮弁子葉が消失し、肉厚がⅠ型式からさらに扁平となり、幅も狭くなる十葉の蓮弁からなる。瓦当外縁は無文の直立縁で、瓦当外縁の剥離痕跡から見て、瓦当側面に丸瓦部広端凹面を嵌め込むことで丸瓦部広端面を瓦当外縁としたものと考えられる。中房径は4.5 cm前後であるが、Ⅱ2型式に中房の崩れが見られる。間弁はT字楔形を呈し、Ⅱ2型式の萎縮化が進む。Ⅱ1型式、Ⅱ2型式ともに特徴的な範傷が見られ、Ⅱ1型式には木製範の消耗により蓮弁、間弁厚が極端に薄くなるものや範木目が明瞭に浮き出るのが散見できるとともに蓮弁と間弁との間に1箇所明瞭な傷を持つものが見られる。また、Ⅱ2型式には中房蓮子の1つが失われるもの、蓮弁に明瞭な傷を持つものが見られる。外区内縁に内斜面を持つ資料が見られるが、本型式の範疇に含まれる。

Ⅱ型式の資料は堅緻に焼き締まり、灰色を呈するものが多い。出土点数24点(未報告資料含む)と軒丸瓦の主体を占める。出土地点は塔基壇西辺、金堂基壇東辺に集中する。

#### 三重弧文軒平瓦 (27、44~48、101、102、243~248)

瓦当厚は3 cm前後。直線顎を持つ。瓦当弧文の断面形状から、やや丸みを帯びた鋭い山形状の弧線と浅いU字状を呈する凹線を持つものと、鋭く収める弧線と極めて浅い箱型となる凹線を持つものとに細分できる。軒丸瓦Ⅱ型式と同様、Ⅱ1型式、Ⅱ2型式とに細分、それぞれ軒丸瓦Ⅱ1型式、Ⅱ2型式と対応するものと考えられる。Ⅱ1型式は弧文断面が丸みを帯び、溝がやや深い、Ⅱ2型式の弧文断面は先端が鋭く、溝も浅くなる。

焼成は焼き締まるものと生焼け状を呈するものが混在する。凸面に小斜格子、縄目叩き目のナデ消し痕をわずかに残すものが見られる。出土点数17点(未報告資料含む)。出土地点は塔基壇西辺、金堂基壇東辺に集中する。

### 軒瓦Ⅲ型式

#### 素弁九葉蓮華文軒丸瓦 (95、125、178、240、287)

瓦当厚は厚く作る。蓮子を1+5に配する中房と、肉厚がやや厚く、幅はさほど広くない九葉の蓮弁からなる。間弁はT字楔形であるが、鋭さが失われる。外区内縁に13個の珠文が配され、外縁内斜面には線鋸歯文が巡る。丸瓦先端を未加工のまま瓦当外区の裏面に当てて接合する。焼成が甘く、脆弱なものが多い。出土点数8点(未報告資料含む)と量的には決して多くない。ただし、一連の調査で出土した瓦当側面と接合したと思われる丸瓦広端部については大半が本型式に含まれると思われる。出土地点は塔基壇西辺、金堂基壇東辺に偏る。

#### 偏行唐草文軒平瓦 (28、103、163、179、223、224、249~254、303、371)

瓦当厚5 cm前後。凸面は瓦当面から7~8 cmで段顎となる。瓦当の上外区に珠文を配する。内区には唐草文主葉が内区の左右界線に接続し、支葉は上下界線から派生する文様を配する。凸面に小縄目叩きをナ



整形であるが、彫り込み線は比較的細い。叩き目の方向は端面に対してやや斜向する。平瓦のみに見られる叩き目である。

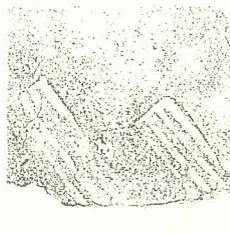
**正格子Ⅲ** 正格子Ⅲは縦0.4~0.5 cm、横0.8~1.0 cmを1単位とする長方形の格子目である。格子目は小さく、彫り込み線は太い。正格子Ⅲを残す瓦は比較的多い。叩き目の方向は端面に対してやや斜向する。平瓦のみに見られる叩き目である。

**斜格子Ⅰ** 斜格子Ⅰは縦1.4~1.6 cm、横1.9~2.1 cmを1単位とする均整のとれた菱形の格子目である。彫り込み線は細く、斜格子目を大きく作る。平瓦に見られる叩き目である。

**斜格子Ⅱ** 斜格子Ⅱは菱形の斜格子目で、縦0.7~0.9 cm、横1.3~1.5 cmを1単位とする。格子目が小さくなり、彫り込み線はやや太くなる。平瓦に見られる叩き目である。



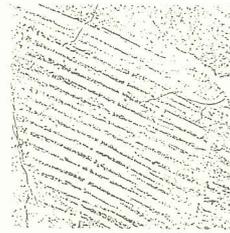
平行Ⅰ a (228)



平行Ⅰ 原体 (180)



平行Ⅰ b (229)



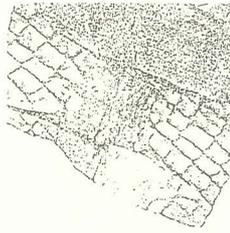
平行Ⅰ c (270)



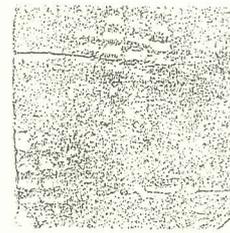
平行Ⅰ d (53)



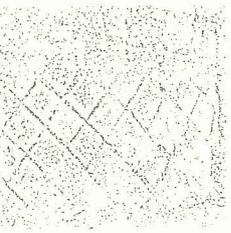
正格子Ⅰ (72)



正格子Ⅱ (297)



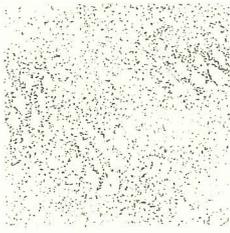
正格子Ⅲ (296)



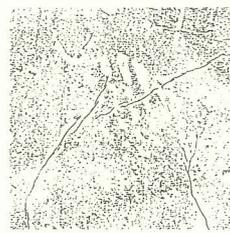
斜格子Ⅰ (21)



斜格子Ⅱ (274)



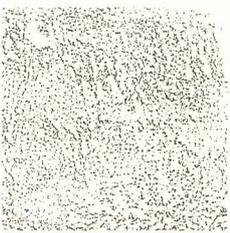
斜格子Ⅲ a (307)



斜格子Ⅲ b (426)



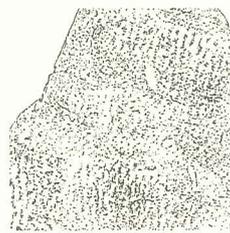
縄目Ⅰ a (115)



縄目Ⅰ b (248)



縄目Ⅱ a (249)



縄目Ⅱ b (165)

第108図 興道寺廃寺出土瓦凸面叩き目分類図 (縮尺 1/3)

**斜格子Ⅲ** 斜格子Ⅲは叩き目の粗密差からⅢ a、Ⅲ bに細分した。斜格子Ⅲ aは縦0.6～0.7 cm、横1.2 cmであるが、やや形の崩れた菱形を呈する。斜格子Ⅲ bは磨耗のためⅢ aよりもさらに叩き目が崩れる。縦0.3～0.4 cm、横1.1～1.2 cmである。粗雑な叩き締めによって叩き目が広がったものも見られる。また、ナデ消した際に叩き目が潰れた可能性も考えられる。平瓦に見られる叩き目である。

**縄目Ⅰ** 縄目Ⅰは同一原体であるが、叩き目をそのまま残すⅠ aとナデ消すものⅠ bとに細分した。原体の幅は5.7 cm前後で、縄目の幅は0.2 cm。1単位16条の縄を原体に巻き付けている。端面に沿って叩き締める。縄目Ⅰ bはナデによって縄目痕が潰れ、細かい叩き目状を呈するが、縄目幅がⅠ aの原体と一致する。量的には叩き目にナデ消しを施すものが多い。軒平瓦Ⅱ型式(243・244・247・248)、平瓦に見られる叩き目である。

**縄目Ⅱ** 縄目Ⅱは同一原体であるが、平瓦に見られるものをⅡ a、丸瓦に見られるものをⅡ bとに細分した。基本的には叩き目をナデ消すためはつきりと確認できないが、縄目の幅は0.1～0.2 cm前後である。平瓦には端面に沿って叩き締めるが、端面に対して斜向するもの(249)も見られる。丸瓦には平行叩きと同様不定方向に叩きを施す。丸瓦、軒平瓦Ⅲ型式(249・251・253)、平瓦に見られる叩き目である。

丸瓦、平瓦について、叩き目を含めた製作技法などから次のとおり分類し、軒瓦との対応関係を示す。

#### **丸瓦Ⅰ型式(凸面平行叩きナデ消し丸瓦)**

凸面全体にわたって1単位4本の平行叩き(平行Ⅰ d)を施した後、叩き目を薄くナデ消す。叩きは傾向としては弧状に施すが、千鳥足状に施すもの、端面に平行するものも若干見られ、一定しない。凹面には布目を残す。側縁部は凹面を面取りするものと未調整とするものが混在する。焼成は総じて良く、灰色、青灰色を呈する。丸瓦全体の中でも一定量を占める。

#### **平瓦Ⅰ a型式(凸面平行叩き平瓦)**

凸面の全体または過半に1単位4本の平行叩き(平行Ⅰ a～Ⅰ c)を端面、側面に対して斜方向に連続的に施す。叩き目をナデ消すものは見られない。凹面は強い縦ナデにより布目をナデ消すものと、布目をそのまま残すものとが混在し、後者には薄く模骨痕を残す。側縁部は総じて未調整であるが、側縁部の厚みを落とすため凸面、凹面ともに幅の広い削りを施すものも見られる。褐色を呈するものが多い。

#### **平瓦Ⅰ b型式(凸面正格子・斜格子叩き平瓦)**

凸面は総じてナデ調整するが、広端部、狭端部に正格子(正格子Ⅰ、Ⅱ)、斜格子(斜格子Ⅰ、Ⅱ)の叩き目が残る。叩き目の1単位は大きい。凹面の布目をそのまま残すものが大半を占めるが、縦方向に布目を強くナデ消すものも散見できる。布目をナデ消すものは総じて側縁凹面を面取りする。褐色、黒褐色を呈するものが多い。出土量は僅少。なお、凸面に強いナデを施すため叩き目が消失、あるいは短軸方向に削り状の強いナデを施すもの、凹面には強い縦ナデにより布目をナデ消す平瓦が若干存在するが、本型式の中に含める。

#### **丸瓦Ⅱ型式(凸面叩き目ナデ消し丸瓦)**

凸面に叩きを施したものと思われるが、強いナデにより叩き目が消失する。凹面に布目を残す。側縁凹面を面取りするものが多いが、未調整とするもの、側縁凸面にも削りを施すものが見られる。丸瓦の中でも量的主体を占める。

#### **平瓦Ⅱ a型式(凸面小正格子・小斜格子叩きナデ消し平瓦)**

凸面は総じてナデ調整するが、広端部、狭端部に正格子(正格子Ⅲ)、斜格子(斜格子Ⅲ)の叩き目を薄く留める。叩き目の1単位は小さく、強いナデによって叩き目の大半が潰れる。凹面は布目、模骨痕を顕著に残し、布目のナデ消しは見られない。焼成は良く、灰色、褐色を呈する。出土量は僅少。

#### 平瓦Ⅱb型式（凸面縄目叩き・縄目叩きナデ消し平瓦）

凸面には縄目叩きを施すが、縄目をそのまま残すものは少なく（縄目Ⅰ）、総じて強くナデ消され、叩き目を薄く留める（縄目Ⅱ）。叩き目の単位はやや大きい。凹面には布目、模骨痕を顕著に残す。焼成は甘く、褐色を呈する。出土量は僅少。

#### 平瓦Ⅱc型式（凸面叩き目ナデ消し平瓦）

丸瓦Ⅱ型式と同様、凸面全体を横方向に強いナデを施し、叩き目が消失する。凹面に布目、模骨痕を顕著に残す。側縁調整は未調整とするものが多い。焼成は総じて良く、灰色、青灰色を呈するが、焼成が甘いものも混在する。平瓦全体の中でも量的主体を占める。

#### 丸瓦Ⅲ型式（凸面縄目叩きナデ消し丸瓦）

凸面に不定方向の縄目叩きを施した後、叩き目を薄くナデ消す。叩き目の1単位は小さくなる。凹面には布目を残す。側縁凹面は面取りするものが多い。出土量は少ない。焼成は総じて甘く、褐色、黒褐色を呈する。

#### 平瓦Ⅲ型式（凸面縄目叩きナデ消し平瓦）

丸瓦Ⅲ型式と同様、凸面に縄目叩きを施した後、薄くナデ消す。凹面には布目、模骨痕を残す。側縁部は未調整とする。焼成は不良で褐色、黒褐色を呈する。

平瓦Ⅰa型式は平行叩きをそのまま残し、凹面の布目をナデ消すことが特徴的で、平瓦部凸面の剥離面に平行叩きを残し、凹面の布目ナデ消しを施す三重弧文軒平瓦（Ⅰ型式）と並行するものと考えられる。平行Ⅰaから平行Ⅰcへの原体の磨耗進行は比較的短期間の幅に収まるものと思われる。凸面に平行叩きを施し、薄くナデ消す丸瓦Ⅰ型式、また凹面に布目ナデ消しを施す平瓦Ⅰb型式についても同時期と思われる。

丸瓦Ⅱ型式、平瓦Ⅱc型式は、ともに凸面に強いナデを施し叩き目を消すことが顕著で、平瓦凹面には全て布目、模骨痕を未調整のまま残している。量的主体を占め、軒瓦Ⅱ型式と並行するものと思われる。三重弧文軒平瓦（Ⅱ型式）には凸面にかすかに単位が小さい斜格子叩きの痕跡を留めるもの（未凶化）、縄目叩きを比較的好く残すものが存在し、平瓦Ⅱa、Ⅱb型式はこれらの三重弧文軒平瓦と対比できる。平瓦Ⅱ3型式はこれらの叩き目が完全にナデ消されたものと理解できよう。

丸瓦Ⅲ型式、平瓦Ⅲ型式ともに凸面には縄目叩き（縄目Ⅱ）の後、弱いナデを施し、凹面は布目をそのまま残す。偏行唐草文軒平瓦（Ⅲ型式）凸面に見られる縄目叩きと対比できるものと思われ、軒瓦Ⅲ型式と並行するものと思われる。

以上のとおり、丸瓦、平瓦Ⅰ～Ⅲ型式はそのまま軒瓦Ⅰ～Ⅲ型式と対比でき、その新旧は軒瓦と同様の流れにあるものと考えられる。軒瓦を含めて見れば、Ⅰ型式の瓦は寺院建立初期の短期間に集中的に製作されたものと考えられることに対して、Ⅱ型式の瓦は量的主体を占めることから比較的長期間製作されたものと思われる。Ⅲ型式の瓦は軒平瓦を除いて決して量的には多くないことから、寺院補修用瓦として短期間に製作されたものと推測される。

若干ではあるが、熨斗瓦、隅落とし平瓦が出土している。隅落とし平瓦を見れば、平瓦Ⅰ型式に含まれる調整を持つ。

興道寺廃寺に瓦を供給した瓦窯については確認されていない。興道寺廃寺出土瓦の胎土を肉眼観察する限りでは当地域の土器胎土の同様、石英、雲母の混入が顕著であり、近郊に瓦窯の存在を求めるとなれば花崗岩分布域である耳川左岸中下流域、三方五湖周辺が候補となる。古墳時代後期の須恵器窯、興道寺窯が所在する小支尾根の東側斜面、高善庵遺跡から8世紀代の須恵器、瓦が採集されており、昭和8（1937）

年にこの地から出土したことを墨書する瓦が現在に伝わるなど、付近に瓦窯が存在する可能性が高まっている。高善庵遺跡については近年、試掘調査を実施したが、瓦窯を確認されていない（本書第3章参照）。

### 第3項 興道寺廃寺出土土器

出土した遺物には寺院創建以前の段階である古墳時代後期の須恵器、土師器、製塩土器が金堂、中門付近に比較的多くみられ、基壇版築土層内にも混入する。複合遺跡である興道寺遺跡の範囲に含まれることから、古墳時代後期集落が寺院建立に際して整理されたことが窺える。

また、今回の調査では塔基壇西辺瓦溜まり上層と中門基壇南辺から、いわゆる畿内産（系）土師器と称される内面に放射状暗文を、外面にミガキを施した土師器杯（36・403）が出土している。畿内産（系）土師器は興道寺遺跡の既往の発掘調査においても出土している。これらの土器は8世紀前葉に相当するとみられ、寺院創建時における畿内との繋がりを示唆するものと考えられる。

仏具や祭祀的な性格を持つような遺物も数点出土している。鉄鉢形鉢（35）や環状のつまみを有する須恵器蓋（361）である。須恵器皿（362）や内面にタール状の付着物が残る土師器碗（348）が仏前供養の灯明具に使われた可能性も考えられるが、年代的には興道寺廃寺に直接伴うものとは考えられない。器種不明とした須恵器136・153については言及することが難しいが、一般的にはあまり見られない形状であることから、祭祀的な意味合いを持つ遺物としても捉えることができる。また、中門基壇には須恵器壺（395～398）が集中して出土し、中には内面から穿孔を施した壺（398）も存在する。この中門基壇西辺から和銅開珎、萬年通寶、神功開寶の3種の銭貨も出土し、平成19年2月10日に開催された美浜町歴史シンポジウム「古代銭貨の謎に迫る」において、これらの銭貨が祭祀に伴い意図的に埋納された可能性が指摘された（榎村2007）。中門において何らかの祭祀的な活動が行われていた可能性が示唆される。

金堂基壇東辺瓦溜まり下層からは9世紀前葉頃の須恵器杯B蓋（221）・杯B（222）が出土し、同様に塔基壇周辺の瓦溜まり下層においても10世紀代の須恵器皿（362）が出土している。塔周辺の瓦溜まりから10世紀後半の時期と思われる土師器碗（156・366・367）が、金堂西辺瓦溜まり、中門基壇からは10世紀後半から11世紀代の時期と思われる底部に糸切りを施す土師器皿（302・404・405）が出土することから、少なくとも9世紀前半までは寺院として機能し、遅くとも10世紀後半には廃絶していたものと推測される。

その後の興道寺廃寺については、塔、金堂を切る溝、土坑から中世の所産と思われる土師器皿（40）、土師質甕（9）が出土していることから、13世紀以後には興道寺廃寺基壇遺構は埋没し、比較的現況に近い状態になっていたものと考えられる。

今回の興道寺廃寺の調査では製塩土器片が大量に出土した点も注目される。若狭地方の型式編年に当てはめるとすれば、器壁がやや厚く、丸底・深碗状を呈する浜禰ⅡB式の範疇に含まれるものが多く、今回は大半を図化し得なかったが器壁の薄い浜禰ⅡA式と思われる製塩土器も出土している。しかし、完形に近い状態で出土した製塩土器（10）のような従来の型式には当てはまらない製塩土器が出土している。この製塩土器については共伴する遺物の年代から6世紀後葉、浜禰ⅡB式に並行する時期と思われる。これに類似する器形の製塩土器が過去の興道寺遺跡の調査においても出土している（鯨本2003）。土器の法量からも煎熬用製塩土器とは考え難く、内陸部での焼き塩を目的としたものと推測される。例えば、興道寺廃寺南方、第4次調査1トレンチで検出された小穴7は製塩土器（138）を伴う焼土や灰が堆積する焼土坑であり、興道寺遺跡内で焼き塩が行われていた可能性が高い。寺院建立氏族、あるいは寺院建立に繋がった小首長層が6世紀後葉から律令期にかけて継続的に製塩に関与していたものと考えられる。

近年、若狭地方の製塩土器編年については再検討の必要性が喚起されている（美浜町教育委員会2006）。今回の調査では丸底・深碗状となる製塩土器が多く、平底となる器形は出土していないが、興道寺遺跡の

過去の調査では、丸底・深碗状の製塩土器とともに大型平底の船岡式製塩土器に類するものが8世紀前半の土坑から共伴している（松葉 2006、美浜町教育委員会 2006）。今回出土した製塩土器には律令期に降るものも存在すると思われ、海岸部と内陸部で異なる器形が並行し、異なる用途で使用されていたことも考えられる。

#### 第4項 興道寺廃寺出土銭貨

中門基壇に伴う銭貨は奈良時代に鑄造された和同開珎、萬年通寶、神功開寶の3種、計14枚である。この出土銭貨については、平成19年2月10日に開催された美浜町歴史シンポジウム「古代銭貨の謎に迫る」において出土銭貨が持つ性格、中門基壇から銭貨が出土した意義について、考古学、文献史学の両面から検討された。松葉はこれらの銭貨が中門基壇の改修に伴い、意図的に使用されたものと報告した（松葉 2007）。榎村寛之氏は文献史料に見られる西大寺西塔における萬年通寶、神功開寶の埋納事例、賀茂神社鳥居における和同開珎、萬年通寶、神功開寶の3種の出土事例を取り上げ、興道寺廃寺中門出土銭貨を地鎮に伴うものと推測した（榎村 2007）。

銭貨は中門基壇に伴うもの以外、これまでの調査で全く出土していないことから、中門で見られた地鎮行為が興道寺廃寺で普遍的に行なわれたものとは考えにくく、中門再建に伴って限定的に行なわれたものと考えられる。

#### 第5項 興道寺廃寺の年代と前後の時代

興道寺廃寺建立前夜、6世紀後半から7世紀前半の遺跡動向を見ると、小字淵ノ上、観音、狐塚付近にまとまった広がりを持つ微高地上に6世紀前葉から7世紀初頭（TK43～TK209 型式並行期）までの堅穴住居址を中心とする集落が展開し、小字砂河原、中町、土井ノ上付近に見られる標高差1m前後の低地帯を挟んで、西側、小字塚原、御前塚、内町付近に見られる段丘西縁微高地上に6世紀前半から続く興道寺古墳群が7世紀初頭（TK209 型式並行期）まで造営される。

その後、7世紀第2四半期に入ると東側微高地集落は断絶し、また西側微高地における古墳造営も停止する。興道寺窯の閉窯とも連動した動向である。この時期以後、周辺の遺跡動向は低調となり、直接的に興道寺廃寺建立の時期までは繋がらない。ただし、耳川流域左岸においては海岸部、松原遺跡で7世紀中葉をピークとする土器製塩が行われており、土器製塩集団の存在から見れば寺院建立集団となり得る在地豪族が存在した可能性は高い。前段階からの集落構成集団の衰退、あるいは新興小首長の台頭を想定するよりも、寺院建立に際して集落構成集団が移動し、土器製塩、寺院造営を進めたものと考えた方が合理的である。いずれ興道寺廃寺建立の母体集団の存在を示す7世紀中後葉段階の集落遺跡が確認されるものと思われる。

このように古墳時代後期段階には段丘東縁微高地に集落が、西縁微高地に群集墳が展開し、その後、前段階の集落を整理し、7世紀後葉には小字観音、淵ノ上付近に興道寺廃寺が建立されたという変遷を素描することができる。

興道寺廃寺出土遺物の年代から寺院建立、改修、廃絶時期を考える。興道寺廃寺創建と直接的に結びつく最古型式の軒瓦Ⅰ型式については、山田寺建立再開期における軒瓦文様の各地への拡散の流れの中で捉えられる軒瓦であるとして、天武・持統朝の仏教政策とも連動して7世紀第4四半期の寺院造営の着手を想定し、水野氏がかつて想定した7世紀中葉までは遡らないものとする。量的主体を占め、興道寺廃寺中心伽藍整備期に伴うと思われる軒瓦Ⅱ型式が瓦当文様の萎縮化から軒瓦Ⅰ型式より後出するものと思われるものの、さほど大きな時期差は考えにくいことから、伽藍整備の時期を8世紀初頭に想定する。興道寺廃寺北方集落の展開と時期的には連動する。

軒平瓦Ⅲ型式が金堂基壇の改修に用いられ、また金堂基壇東辺瓦溜まり下層からまとまって出土していることから、この軒瓦の文様構成が8世紀中葉に畿内から間接的に持ち込まれたものとして8世紀後半に金堂改修期を考えることができる。金堂改修に連動した動きは中門において認められる。中門では基壇自体が再構築された状況が確認され、瓦の出土量が総じて低調であることから再建中門に屋根瓦が葺かれた可能性は低いものと考えられる。基壇再建に伴う地鎮として使用された可能性が高い銭貨3種の内、神功開寶の初鋳年代から少し遅れた年代を中門再建期にあて、金堂改修期、中門再建期は実年代で770年、780年頃の年代が与えられるものとする。

寺院の廃絶については、既に小林が基壇瓦溜まり出土土器の年代から9世紀後半以後の衰退、10世紀以後の廃絶を示唆したが、寺院北方集落の消長を見ても9世紀以後の集落動向が極めて低調となり、土器の出土量が圧倒的に減少することから、9世紀中葉には既に寺院としての機能が失われたものと考えられる。

中世文書に見られる天台宗寺院、興道寺の実態については芝田寿朗氏の論考に詳しい。文書で確認される興道寺集落内の寺院の初見としては文永二(1265)年、『若狭国惣田数帳』(東寺百合文書)の「天台宗四王院 興道寺十二町」の記載であり、天台宗四王院の年代から平安時代初期に天台宗興道寺が創建された可能性を示唆している。正中二(1325)年、『承鎮法親王附属状』(三千院文書)の「若狭国興道寺」の記載に基づき、中世寺院、天台宗興道寺の成立を認め、天文六(1537)年、『梶井門跡目録』(三千院文書)、「一 若狭国興道寺証文之事 当時守護押領」との記述からこの時期には寺院の存続が困難となり、中世末には廃絶したものと推測する(芝田2006、美浜町教育委員会2006)。

興道寺廃寺と天台系中世寺院、興道寺との連続性は明らかではないが、少なくとも興道寺廃寺の一連の調査では中世寺院への移行は認められず、10世紀以後には廃絶し、塔基壇面において確認されている13世紀後半の溝の存在から考えて、古代寺院の存在は薄れつつあったものと考えられる。興道寺廃寺の衰退とは別の動きの中で天台宗興道寺が成立しているものと捉えられる。芝田氏はその所在を現存する浄土真宗、妙寿寺付近に想定しているが、分布調査における採集土器の年代から考えて、興道寺廃寺律令集落が平安以後に興道寺廃寺南方へと中心が移動している可能性が高く、天台宗興道寺の成立と連動する動きを示していることも考えられる。

## 第6項 興道寺廃寺と興道寺遺跡律令集落

興道寺遺跡は基本的には今回の調査対象から外れているため、概述するに留める。

興道寺廃寺北～北西方、興道寺遺跡北縁部において8世紀前半の竪穴建物跡5棟、掘立柱建物跡4棟、柵列、土坑、小穴が検出されている。土井ノ上1区で確認された建物配置を見ると、竪穴建物と掘立柱建物が対となる2～3棟からなる建物小群を構成するものと考えられる。建物方位は磁北を意識し、寺院施設の方角とほぼ一致することから寺院と北方集落との同時性が窺える。出土遺物には須恵器杯、高杯、甕、壺、土師器杯、皿、盤、甕、製塩土器、丸瓦、平瓦、あるいは鞆羽口、鉄滓、鉄釘、紡錘車といった小鍛冶関連遺物が見られ、須恵器食膳具、土師器煮炊具、製塩土器が量的に多く、8世紀前半に伴う土器が主体をなす。

一方、興道寺廃寺南方では第4次調査1トレンチ、2トレンチにおいて8世紀前半から9世紀にかけての須恵器、土師器などの土器を伴う土坑、小穴が密に分布する状況が確認され、出土遺物については畿内産(系)土師器、赤彩土師器の杯、皿、盤、あるいは製塩土器の出土が興道寺廃寺北方集落と比べて多いことが特徴的である。第4次調査1トレンチにおいて検出された焼土、炭を多量に伴う遺構は集落内での土器製塩工程の一端を示しているものと考えられる。

興道寺廃寺の北方集落では興道寺廃寺と連動した消長を示しており、興道寺廃寺に伴う集落、雑舎群として考えることも可能である。ただし、遺跡の出土遺物を特徴付ける製塩土器、畿内産(系)、赤彩の土師



写真10 興道寺遺跡竪穴建物1



写真11 興道寺遺跡竪穴建物2



写真12 興道寺遺跡竪穴建物2竈

器食膳具の存在から付近に官衙関連施設が存在した可能性も検討されている（美浜町教育委員会 2006）。

### 第7項 興道寺廃寺造営集団と三方郡衙

6世紀段階の耳川流域の小首長層（獅子塚古墳、興道寺古墳群被葬者層）の後裔集団が想定されるが、従前から指摘されるような耳別氏という具体的な寺院建立氏族に関しては不明である。

古代三方郡内の古代寺院の動向としては、若狭町臥龍院境内において古代に遡る丸瓦、平瓦、埴が出土している（田辺 2006）。これらの瓦を伴う寺院がどの段階まで遡るのかは判然としないが、臥龍院の南方には「郡厨」「郡」「津」と記された墨書土器が出土し、三方郡衙として位置付けられる城縄手遺跡や、旧三方湖周辺に所在し、官衙色豊かな遺物が出土する角谷遺跡、田名遺跡など、付近に寺院建立を可能とした有力氏族が存在したことも想定される。

三方郡衙そのものに関する調査事例はない。城縄手遺跡所在説が有力であるのは、郡に関わる墨書土器が出土していること、古代寺院の存在が推測されている臥龍院、あるいは気山津推定地に近接することを根拠としている（田辺 2006）。このことについては歴史シンポジウム「興道寺廃寺の謎に迫る」において興道寺廃寺周辺に初期郡衙の所在を求める三方郡衙耳川流域所在説が久保智康氏らによって新たに提起されている（美浜町教育委員会 2006）。その根拠を整理すると、① 興道寺廃寺が白鳳期まで遡り、七堂伽藍を備えた三方郡唯一の古代寺院であること、② 興道寺廃寺建立の前段階、古墳時代後期の耳川流域と三方湖周辺地域とを比較して、古墳造営と土器製塩において優位性が認められるのは耳川流域であること、③ 城縄手遺跡所在説の根拠となっている出土墨書須恵器の年代が9世紀以後に降ること、④ 各地の調査事例から郡衙が移動する事例が多いこと、⑤ 郡領氏族が小地域の手工業生産を掌握する事例が多いこと、⑥ 興道寺遺跡出土の土器組成が若狭国府関連遺跡と目される西縄手下遺跡などと共通し、遺跡周辺に公的機能の存在が考えられることなどである。当然、これらの見解に対しては、郡名となった三方という地名は若狭町三方に現存することから三方地域に所在を考える方が妥当であるという反論も提示されている。このシンポジウムの翌週、平成18年2月19日に開催された歴史シンポジウム「興道寺遺跡の謎に迫る」においても山中章氏らによって議論の一部が継承され、興道寺遺跡検出遺構そのものからは官衙施設を想定しにくいものの、遺跡出土の土師器食膳具の中に畿内から直接的に持ち込まれた可能性を残す一群が存在することを根拠に郡内での官衙機能の分散化が指摘されている。

いずれにせよ、両所在説ともに発掘調査による検出遺構を前提としたものではないことから今後の調査の蓄積が必要である。興道寺廃寺周辺所在説の立場に立つならば、寺院建立氏族はそのまま有力な郡領氏族であった可能性が高まる。興道寺廃寺建立氏族の性格を考える上でも今後、十分な議論、調査研究が待たれるところである。

### 第8項 興道寺廃寺の位置付けと今後の課題

興道寺廃寺の内容確認調査も第8次調査を終え、当初想定すらしなかった塔、金堂、中門の基壇を検出

するまでに至った。当初の調査目的は十分に達成されたものと思われる。反面、遺構が存在する深度が極めて浅いにも関わらず寺院構成遺構が良好に現存することから、今後、計画的な調査保存および活用を進める必要がある。これまでの調査で明らかとなった点と今後の課題を列記する。

[調査成果]

・基壇遺構について

基壇遺構1、基壇遺構2、基壇遺構3がそれぞれ塔、金堂、中門の基壇に比定される。金堂基壇では掘り込み地業、版築痕跡が明瞭に残り、基壇の東辺、西辺では8世紀後半の改修痕跡が確認された。塔基壇ではおそらく上面は削平されているものと考えられ、地山削り出しによる基壇痕跡が確認された。中門基壇は金堂基壇改修と連動した造り替えの痕跡が確認された。伽藍整備段階には方位に載る基壇が存在したのと考えられるが、基壇北辺、西辺から出土した銭貨、神功開寶の初鋳年代から若干降り、実年代で770年、780年頃の中門再建が想定される。今後の調査によって講堂、僧坊群といった寺院関連施設が確認される可能性は高い。

・出土瓦について

軒瓦を含めて多量の瓦が出土し、軒瓦の新旧、量的多寡が把握された。軒瓦Ⅰ型式は山田寺式軒瓦の範疇に含まれるもので、その導入背景に近江、越前からの影響が考えられる。軒瓦Ⅱ型式は量的主体をなし、伽藍整備段階に大量生産されたものと考えられる。また軒瓦Ⅲ型式は一定の出土量を占め、興道寺廃寺補修に用いられた一群であるものと考えられる。軒瓦のみでなく、丸瓦、平瓦に関しても叩き目、製作調整からおおよそ軒瓦と対比できる新旧関係が把握された。

・寺院の創建、改修、廃絶年代について

軒瓦の年代観から7世紀第4四半期の寺院建立、8世紀前後の伽藍整備、そして8世紀後半の寺院改修が窺える。また、基壇に付随する瓦溜まり出土土器の年代観から9世紀後半以後の寺院衰退、10世紀後半には確実に寺院が廃絶しているものと考えられる。

・興道寺遺跡律令集落の広がりについて

興道寺遺跡における既往の調査において興道寺廃寺北方における律令集落が確認されていたが、今回の調査において寺院南方にも広がりを示すことが判明した。

[今後の課題]

・伽藍、寺域の範囲について

現段階では中心伽藍域の南辺に関しては中門基壇の確認により明らかとなった。南北約70mの伽藍域を想定できるが、東西辺についての手掛かりは全く掴めていない。

・伽藍配置について

塔基壇が西側、金堂基壇が東側に位置することから、現段階では「法起寺式」あるいは「観世音寺式」伽藍配置が窺えるが、金堂南北辺が大きく削平を受けているため、伽藍配置の確定までは至っていない。

・調査対象および調査面積について

今回の調査では結果として寺院中心伽藍の一端が明らかとなったが、僧坊群、雑舎群などの関係施設は確認されていない。また、一連の調査では内容確認のトレンチ調査に終始しているため、面的調査は行なわれていない。遺跡地の地権者は細分されており、面的調査の実施には難しい面があるが、今後の史跡指定を考えた場合、広域的な内容確認は必要不可欠である。

・寺院関連遺跡について

今回の調査を通じて新たに提起された三方郡衙、耳川流域所在説を裏付ける遺構、遺物は興道寺廃寺周辺からはこれまでに全く確認されていない。同様に興道寺廃寺に瓦を供給した瓦窯也未確認である。関連遺跡を含めた史跡指定を視野に置く必要がある。

なお、美浜町では遺跡の国指定史跡化を視野に置き、調査委員会を設置し、地域住民、学識経験者の御指導、御協力を賜りながら、興道寺廃寺の継続的な調査を計画している。大方のさらなる御指導、御鞭撻をお願いしたい。

〔引用・参考文献〕

- 鯨本真由美編『興道寺遺跡 一県営ふるさと農道緊急整備事業に伴う調査一』 2003 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター  
上原真人『歴史発掘 11 瓦を読む』講談社 1997  
大森 宏「第7章 若越の文学と仏教 第2節 古代の寺院 興道寺廃寺」『福井県史通史編』1 原始・古代 1993 福井県  
大森 宏・森川昌和「福井県(若狭)」『日本土器製塩研究』 1994 青木書店  
北村圭弘「6 近江の山田寺式軒瓦」『古代瓦研究Ⅱ 一山田寺式軒瓦の成立と展開一』 2005 古代瓦研究会編  
久保智康「4 深草廃寺」『北陸の古代寺院 その源流と古瓦』1987 北陸古瓦研究会  
久保智康「北陸南西部における軒瓦の需要と伝播 一越前地方を中心として一」『古代』第97号 1993 早稲田大学考古学会  
芝田寿朗「序章 わかさ美浜の寺社の変遷 第二節 美浜の古代寺院と寺社の記録 一 美浜町の古代文化」  
『わかさ美浜町誌』第3巻 拝む・描く 2005 美浜町誌編纂委員会編  
芝田寿朗「講演Ⅳ 興道寺廃寺のその後」『歴史シンポジウム 興道寺廃寺の謎に迫る  
～古代若狭のテラとムラ～』当日資料集 2006 美浜町教育委員会  
武田久二「美浜町興道寺観音畑出土布目瓦について」『三方郡ふるさと昔話』 1976 関西電力株式会社美浜発電所  
田代 弘「講演Ⅱ 浦入遺跡から見た若狭湾岸の土器製塩」『歴史シンポジウム 興道寺遺跡の謎に迫る  
～古代若狭のムラとシオ～』当日資料集 2006 美浜町教育委員会  
田辺常博「報告Ⅰ 古代三方郡の寺院と集落そして生産遺跡」『歴史シンポジウム 興道寺廃寺の謎に迫る  
～古代若狭のテラとムラ～』当日資料集 2006 美浜町教育委員会  
独立行政法人奈良文化財研究所編『古代官衙・集落研究会 地方官衙と寺院 一郡衙周辺寺院を中心として一  
研究報告資料』 2004 独立行政法人奈良文化財研究所  
独立行政法人奈良文化財研究所編  
『地方官衙と寺院 一郡衙周辺寺院を中心として一 研究報告資料』 2005 独立行政法人奈良文化財研究所  
中原義史「11 北陸の山田寺式軒瓦」『古代瓦研究Ⅱ 一山田寺式軒瓦の成立と展開一』 2005 古代瓦研究会編  
奈良国立博物館編「関係遺跡地名表」『飛鳥白鳳の古瓦』 1970 奈良国立博物館  
林 博通「大宝寺跡」『近江の古代寺院』 1989 近江の古代寺院刊行会  
福井県編『福井県史資料編 16 下 条里復元図』111 1992  
松葉竜司編『美浜町内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 2003 美浜町教育委員会  
松葉竜司編『興道寺遺跡』 1998 美浜町教育委員会  
松葉竜司「報告Ⅰ 興道寺遺跡が語る律令集落と製塩土器」『歴史シンポジウム 興道寺遺跡の謎に迫る  
～古代若狭のムラとシオ～』当日資料集 2006 美浜町教育委員会  
松葉竜司「報告Ⅱ 興道寺廃寺第8次調査と出土銭貨」『歴史シンポジウム 古代銭貨の謎に迫る ～古代若狭の銭とマツリ～』  
当日資料集 2007 美浜町教育委員会  
水野和雄「3 興道廃寺」『北陸の古代寺院 その源流と古瓦』1987 北陸古瓦研究会  
水野和雄「興道廃寺(観音畑廃寺)のルーツ」『平成10年度ふるさとむかしよもやま話 美浜のルーツを探るレジュメ』  
1998 美浜町教育委員会  
美浜町教育委員会編『美浜町歴史シンポジウム記録集3 興道寺廃寺と興道寺遺跡 ～古代若狭のテラとムラそしてシオ～』  
2006 美浜町教育委員会  
榎村寛之「講演Ⅲ 律令国家の祭祀と銭貨」『歴史シンポジウム 古代銭貨の謎に迫る ～古代若狭の銭とマツリ～』  
当日資料集 2007 美浜町教育委員会

次敷 /Tr	遺構/層位	古墳時代後期										古 代										中 世													
		弥生土器	須惠器杯・杯蓋	須惠器高杯	須惠器甕	須惠器提瓶	須惠器壺類	土師器甕	土師器甕	土師器甕	須惠器杯・杯蓋・碗	須惠器皿	須惠器甕	須惠器壺類	須惠器鉢	土師器杯・杯蓋・碗	赤彩杯・皿・盤	土師器甕・鍋	土師器皿	軒丸瓦・丸瓦	軒平瓦・平瓦	熨斗瓦	瓦小片	綠釉陶器	土師器皿・碗	土師器羽釜	越前焼	製塩土器	須惠器・土師器不明	土錘	銅製品/錢貨	鉄製品/鉄釘	鉄製品/鉄塊	鉄製品/不明	
2-1	SK2黒褐色土	12	1	4	1	27				2								10	104								21	3							
2-1	SK1	9	2	4	1	32									1			5	3					1			60	3							
2-1	SK3																											4							
2-1	P1									5																		3							
2-1	P2									2																		1							
2-1	表土	1								7								3	9																
2-2	SB1西辺下層										1							42	88	2							2								
2-2	SB1西辺上層	2	1						9	2	2	1	1	2	12	32	1	195	1,249						1	22	2					1			
2-2	SK3	3		1												21		4	7		5						10	2							
2-2	SD1	2																	1																
2-2	SD2											1					1	3	18		7		1			2									
2-2	SD3	2								3																									
2-2	SD4									2							1	3	13		8														
2-2	P5		1																																
2-2	黒褐色土	4														11	1																		
2-2	表土	6				1			1		3			1	2	13	2	31	61		9	1													
2-3	SK1	1		8					1																			18							
2-3	表土	2	3	2	1				6	1	2	1				31		7	14								8	1							
3-2	SK1			2																															
3-2	P1																																		
3-2	表土			1																															
3-3	P3																																		
3-3	P4																																		
3-3	P6				1																														
3-3	P5				5																														
3-4	SK1																																		
3-4	SD1																																		
4-1	SK1																3																		
4-1	SK2		2													1	14																		
4-1	SK3																1																		
4-1	P2								1																										
4-1	P4																																		
4-1	P6															1	2																		
4-1	P7																2																		
4-1	P9															1																			
4-1	P10															1																			
4-1	P12								1								2																		
4-1	P13																																		
4-1	P14								1																										
4-1	P15								2								2																		
4-1	P16																																		
4-1	P18																	1																	
4-1	P19																																		
4-1	P22																																		
4-1	P24														1		1																		
4-1	P25								1							1																			
4-1	黒褐色土																																		
4-1	表土								1																										
4-2	SK1		2		1	2	3		11		2					6	3											41	4						
4-2	SK3		1		1				9		1			1	1	15												67	1						
4-2	SK4	1														1	1	1										6							
4-2	SK5		1		1		5																					28							
4-2	SK6				1		2		1																			3							
4-2	SK7		2		2				5		2	1					5											60	1						
4-2	SK8				2																							63							
4-2	P1		2						7	1																		58							
4-2	黒褐色土								7		2																	1	1						
4-2	表土								1		1						1																		
4-5	SK1		3																																
4-5	P5																																		
4-5	P6																																		
4-5	P11																																		
4-5	P12																																		
4-5	P14																																		
4-5	P15																																		
4-5	黒褐色土				1																														
4-6	P1				1																														
4-6	P2																																		
4-6	P4																																		
4-6	P6				1																														
4-6	P8		1																																

表2 興道寺麿寺第2～8次調査出土遺物集計表(1)



報告 番号	次数/Tr	遺構・層位	種 別	器 種	法量 (cm)				残存部位	製作技法・調整・施文・文様	色調・焼成	備 考
					口径	器高	底径	その他				
2	2-1	SK2	須恵器	杯H蓋	15.0	(3.2)			口縁部1/8	回転ナデ	青灰色・良好	
3	2-1	SK2	須恵器	杯H	11.8	(4.2)			口縁部1/6	回転ナデ・回転ヘラ削り	青灰色・良好	
4	2-1	SK2	須恵器	杯H	10.1	4.2			口縁部1/8	回転ナデ・回転ヘラ削り	青灰色・良好	
5	2-1	SK2	須恵器	甕					胴部片	内:同心円状当て具痕 外:平行文叩き	灰褐色・良好	
6	2-1	SK1	須恵器	甕					胴部片	内:同心円状当て具痕 外:平行文叩き	青灰色・良好	
7	2-1	SK1	須恵器	杯H蓋	14.8	(3.1)			口縁部1/6	回転ナデ	青灰色・良好	
8	2-1	SK1	須恵器	杯H	12.8	(2.4)			口縁部1/8	回転ナデ	内:青灰色 外:暗褐色 良好	
9	2-1	SK1	土師	甕	13.0	(4.4)			頸部1/5	轆轤ナデ	橙褐色・良好	
10	2-1	SK1	製塩土器		6.3	5.8			3/4	ナデ・指圧痕	橙褐色・良好	内面に白色塩化 ナトリウム付着
11	2-1	SK1	製塩土器						体部片	ナデ・指圧痕・輪積み痕	淡橙褐色・良好	
12	2-1	SK1	製塩土器						体部片	ナデ・指圧痕	淡橙褐色・良好	
29	2-2	SB1西辺 瓦溜まり下層	須恵器	甕					底部1/4	内:同心円状当て具痕 外:平行文叩き	青灰色・良好	
30	2-2	SB1西辺 瓦溜まり上層	須恵器	杯B	12.1	4.2			口縁部1/6	回転ナデ	青灰色・良好	
31	2-2	SB1西辺 瓦溜まり上層	須恵器	椀		(2.0)			高台部1/3	回転ナデ	灰白色・甘い	
32	2-2	SB1西辺 瓦溜まり上層	須恵器	杯	12.7	(5.3)			口縁部1/5	回転ナデ	灰白色・良好	
33	2-2	SB1西辺 瓦溜まり上層	須恵器	杯B蓋		(1.3)			口縁部片	回転ナデ	青灰色・良好	
34	2-2	SB1西辺 瓦溜まり上層	須恵器	杯B蓋		(0.8)			口縁部片	回転ナデ	灰白色・良好	
35	2-2	SB1西辺 瓦溜まり上層	須恵器	鉢					胴部片	回転ナデ 外:ヘラミガキ	灰白色・甘い	
36	2-2	SB1西辺 瓦溜まり上層	土師器	杯	15.8	(4.5)			口縁部1/6	ナデ 内:放射状暗文 外:ミガキ	赤褐色・良好	
37	2-2	SB1西辺 瓦溜まり上層	製塩土器						口縁部片	ナデ・輪積み痕	内:灰褐色 外:橙褐色 良好	ほぼ須恵質
38	2-2	SB1西辺 瓦溜まり上層	製塩土器						体部片	ナデ・指圧痕・輪積み痕	淡褐色・良好	
39	2-2	SB1西辺 瓦溜まり上層	鉄製品	不明			重量:296.0g				黒褐色	
40	2-2	P5	須恵器	高杯		(6.6)	9.0		脚部1/3	回転ナデ	青灰色・良好	
41	2-2	SD2	土師器	皿	6.4	1.5			口縁部1/6	ナデ	黄褐色・良好	
42	2-2	SD3	須恵器	杯H蓋	13.7	(3.0)			口縁部1/5	回転ナデ	青灰色・良好	
43	2-2	地山直上	須恵器	杯H蓋	11.8	3.9			口縁部1/4	回転ナデ・回転ヘラ削り	青灰色・良好	
126	2-3	SK1	須恵器	杯A		(2.8)	8.0		底部1/8	回転ナデ	灰白色・やや甘い	
127	2-3	SK1	土師器	甕	17.8	(7.2)			口縁部1/6	口:ナデ・内:ケズリ・外:縦ハケ	内:淡褐色 外:黒色 良好	
128	2-3	SK1	土師器	甕	24.2	(7.8)			口縁部1/10	口:ナデ・内:ケズリ・外:縦ハケ	淡橙褐色・良好	
129	2-3	SK1	土師器	甕		(7.2)			底部	内:ケズリ・外:ハケ	淡橙褐色・良好	
130	2-3	SK1	製塩土器						口縁部片	ナデ	淡褐色・良好	
131	2-3	SK1	製塩土器			(3.8)			底部片	ナデ・指圧痕	灰褐色・良好	須恵質
132	3-3	P5	須恵器	甕					胴部片	内:同心円状当て具痕 外:平行文叩き	青灰色・良好	
133	3-3	P5	須恵器	甕					胴部片	内:同心円状当て具痕 外:平行文叩き	内:青灰色 外:灰褐色 良好	
134	4-1	SK1	土師器	甕					胴部片	内:ケズリ 外:縦ハケ	淡橙褐色・良好	
135	4-1	SK2	製塩土器						口縁部片	ナデ・指圧痕・輪積み痕	白褐色・良好	
136	4-1	P4	須恵器	不明					口縁部片	回転ナデ	青灰色・良好	外面大半に自然 釉付着
137	4-1	P7	土師器	甕					胴部片	内:ケズリ 外:縦ハケ	内:橙褐色 外:暗褐色 良好	
138	4-1	P7	製塩土器						体部片	ナデ・指圧痕	淡橙褐色・良好	
139	4-1	P12	須恵器	杯B蓋		(2.3)			天井部1/8	回転ナデ・回転ヘラ切り・つまみ 貼付後ナデ	青灰色・良好	
140	4-2	SK1	須恵器	杯B蓋	10.8	1.8			天井部1/3	回転ナデ・回転ヘラ切り・つまみ 貼付後ナデ	灰白色・良好	
141	4-2	SK1	須恵器	杯B蓋	17.0	3.5			天井部ほぼ 完形	回転ナデ・回転ヘラ切り・つまみ 貼付後ナデ	灰白色・良好	
142	4-2	SK1	製塩土器						体部片	ナデ	淡橙褐色・良好	
143	4-2	SK3	須恵器	杯B蓋		(1.3)			天井部1/4	回転ナデ・回転ヘラ切り・つまみ 貼付後ナデ	青灰色・良好	
144	4-2	SK3	須恵器	甕	13.6	(3.8)			口縁部1/8	回転ナデ	灰褐色・良好	
145	4-2	SK3	製塩土器						口縁部片	ナデ・指圧痕・輪積み痕	黄褐色・良好	
146	4-2	SK7	須恵器	甕					胴部片	内:同心円状当て具痕 外:平行文叩き	青灰色・良好	

表4 興道寺廃寺第2～8次調査出土報告土器・鉄製品一覧表(1)

報告 番号	次数/Tr	遺構・層位	種別	器種	法量 (cm)				残存部位	製作技法・調整・施文・文様	色調・焼成	備考
					口径	器高	底径	その他				
147	4-2	SK7	須恵器	壺					肩部片	回転ナデ	内:青灰色 外:灰褐色 良好	
148	4-2	SK7	製塩土器						体部片	ナデ・指圧痕・輪積み痕	淡褐色・良好	
149	4-2	SK7	製塩土器						体部片	ナデ・指圧痕	淡橙褐色・良好	
150	4-2	P1	製塩土器						口縁部片	ナデ	灰褐色・良好	
151	4-6	P5	須恵器	杯H蓋					天井部片	回転ナデ・回転ヘラ切り	内:暗赤灰色 外:青褐色 良好	
152	4-6	P5	土師器	甕					肩部片	口:ナデ 内:ケズリ 外:縦ハケ	内:淡黄褐色 外:暗褐色 良好	
153	4-6	P8	須恵器	不明		(3.3)	7.5		脚部か	回転ナデ	灰褐色・良好	径6mmの透孔
154	4-7	SB1西辺 瓦溜まり下層	須恵器	杯H	12.4	3.5			体部1/3	回転ナデ	暗灰色・良好	
155	4-7	SB1西辺 瓦溜まり下層	須恵器	椀		(1.7)	5.7		底部	回転ナデ・回転ヘラ切り	淡黄褐色・良好	
156	4-7	SB1西辺 瓦溜まり下層	土師器	椀		(3.4)	6.9		1/3	回転ナデ・底部内面不定方向ナ デ・回転ヘラ切り	暗褐色 底部:黒褐色 やや甘い	
157	4-7	SB1西辺 瓦溜まり下層	製塩土器						口縁部片	ナデ・指圧痕・輪積み痕	淡橙褐色・良好	
158	4-7	SB1西辺 瓦溜まり下層	製塩土器						体部片	ナデ・指圧痕・輪積み痕	淡黄褐色・良好	
159	4-7	SB1西辺 瓦溜まり上層	須恵器	椀		(1.5)	6.8		底部	回転ナデ・底部回転糸切り	灰褐色・良好	
160	4-7	SB1西辺 瓦溜まり上層	製塩土器						口縁部片	ナデ・指圧痕・輪積み痕	淡橙褐色・良好	
192	4-8	SK1	須恵器	杯B蓋	14.2	(1.4)			口縁部1/8	回転ナデ・回転ヘラ切り後ナデ	青灰色・良好	
193	4-10	SD1	須恵器	杯B蓋		(1.3)			口縁部片	回転ナデ	青灰色・良好	
194	4-10	SD1	土師器	甕					把手のみ	内:ケズリ 外:ハケ	淡黄褐色・良好	
195	4-10	P2	土師器	皿	13.5	(3.1)			口縁部1/6	ナデ	橙褐色・良好	
199	6-1	SK3	須恵器	杯H蓋	14.7	3.6			口縁部1/4	回転ナデ・回転ヘラ削り	青灰色・良好	
200	6-1	SK3	須恵器	杯H	11.5	(3.0)			口縁部1/10	回転ナデ・回転ヘラ削り	内:青灰色 外:暗灰色 良好	
201	6-1	SK3	須恵器	甕	11.2	(3.7)			口頸部1/3	回転ナデ・波状文(口頸部上半:5 条 中位:上2条 下10条)	内:灰褐色 外:暗灰色 良好	
202	6-1	SK3	土師器	椀					口縁部片	内:ナデ 外:ハケ	淡褐色・良好	
203	6-1	SK3	土師器	甕					口縁部片	口:ナデ 内:ナデ	淡黄褐色・良好	
204	6-1	SK3	土師器	甕					口縁部片	ナデ	橙褐色・良好	
205	6-1	SK3	土師器	甕					胴部片	内:ケズリ 外:ナデ	淡黄褐色・良好	
206	6-1	SK3	土師器	甕					把手のみ	内:ケズリ・後ナデ 外:ハケ	淡橙褐色・良好	
207	6-1	SK3	土師器	甕					把手のみ	内:ケズリ 外:ハケ	淡黄褐色・良好	
208	6-1	SK3	製塩土器						体部片	ナデ	淡橙褐色・良好	
209	6-1	SK3	鉄製品	釘								長さ:(7.9) 厚さ:0.7
210	6-1	SK3	鉄製品	釘								長さ:(6.5) 厚さ:前部0.5 後部0.95
211	6-1	SK4	須恵器	杯H	13.0	(3.1)			口縁部1/8	回転ナデ・回転ヘラ削り	灰褐色・良好	
212	6-1	SK4	土師器	甕					口縁部片	口:ナデ 内:ケズリ	淡褐色・やや甘 い	
213	6-1	P2	土師器	甕	17.8	(7.8)			口縁部1/8	口:ナデ 内:ケズリ 外:縦ハケ	淡褐色・良好	
214	6-1	P3	須恵器	杯H蓋		(3.0)			天井部1/3	回転ナデ・天井部内面ナデ・回転 ヘラ切り	青灰色・良好	
215	6-1	P3	鉄製品	釘								長さ:(10.1) 厚さ:前部0.8 頭部0.7
216	6-1	P7	須恵器	杯H蓋		(3.4)			天井部1/3	回転ナデ・回転ヘラ切り後ナデ	青灰色・良好	
220	6-2	SB2東辺 瓦溜まり下層	須恵器	杯B蓋	11.0	(1.4)			口縁部1/8	回転ナデ・回転ヘラ切り	青灰色・良好	
221	6-2	SB2東辺 瓦溜まり下層	須恵器	杯B蓋	14.8	(1.8)			口縁部1/6	回転ナデ・回転ヘラ切り・つま み貼付後ナデ	灰白色・良好	
222	6-2	SB2東辺 瓦溜まり下層	須恵器	杯B		(1.7)	7.4		高台部1/3	回転ナデ・高台貼付	灰白色・良好	
302	6-3	SB2西辺 瓦溜まり下層	土師器	皿		(1.6)	6.7		底部1/8	回転ナデ・底部回転糸切り	橙褐色・良好	
342	7-2	SK1	須恵器	杯H蓋	12.4	(3.7)			口縁部1/3	回転ナデ	青灰色・良好	
343	7-2	SK1	須恵器	杯H	13.2	(2.1)			口縁部1/3	回転ナデ	灰白色・良好	
344	7-2	SK1	須恵器	杯B蓋		(1.9)			つまみ完形	回転ナデ・内面天井部ナデ・つま み貼付	青灰色・良好	
345	7-2	SK1	須恵器	杯H		(2.7)			口縁部片	回転ナデ	青灰色・良好	
346	7-2	SK1	須恵器	甕					胴部片	内:同心円状当て具痕 外:平行文叩き・一部ナデ	暗灰色・良好	
347	7-2	SK1	須恵器	甕					胴部片	内:同心円状当て具痕・ナデ消し 外:平行文叩き・一部ナデ	青灰色・良好	

表5 興道寺廃寺第2～8次調査出土報告土器・鉄製品一覧表(2)

報告 番号	次数/T <sub>r</sub>	遺構・層位	種 別	器 種	法量 (cm)				残存部位	製作技法・調整・施文・文様	色調・焼成	備 考
					口径	器高	底径	その他				
348	7-2	SK1	土師器	椀	11.1	2.8	7.5		1/2	回転ナデ・回転ヘラ切り	黄褐色・良好	内面黒色付着物
349	7-2	SK1	土師器	甕	14.8	(4.8)			口縁部1/8	口:ナデ 内:ケズリ	淡橙褐色・良好	
359	7-3	SB1北辺 瓦溜まり下層	須恵器	杯H蓋		(3.5)			天井部片	回転ナデ・回転ヘラ削り	暗灰色・良好	
360	7-3	SB1北辺 瓦溜まり下層	須恵器	高杯蓋		(3.7)			天井部1/3	回転ナデ・つまみ貼付後ナデ	青灰色・良好	
361	7-3	SB1北辺 瓦溜まり下層	須恵器	蓋	15.2	2.0			1/3	回転ナデ・天井部内面ナデ・つまみ貼付後ナデ	青灰色・良好	
362	7-3	SB1北辺 瓦溜まり下層	須恵器	皿	10.8	2.6	5.7		1/6	回転ナデ・回転ヘラ切り	淡黄褐色・やや甘い	
363	7-3	SB1北辺 瓦溜まり下層	須恵器	杯A		(1.0)	8.9		底部1/6	回転ヘラ切り後不定方向ナデ	淡黄褐色・やや甘い	
364	7-3	SB1北辺 瓦溜まり下層	須恵器	甕					胴部片	内:同心円状当て具痕 外:平行文叩き	青灰色・良好	
365	7-3	SB1北辺 瓦溜まり下層	須恵器	甕					胴部片	内:同心円状当て具痕 外:平行文叩き・一部ナデ	灰褐色・良好	
366	7-3	SB1北辺 瓦溜まり下層	土師器	椀	11.8	3.3	6.8		3/4	回転ナデ・回転ヘラ切り	淡黄褐色・やや甘い	
367	7-3	SB1北辺 瓦溜まり下層	土師器	椀		(2.7)	6.2		1/4	回転ナデ・回転ヘラ切り	淡黄褐色・甘い	
368	7-3	SB1北辺 瓦溜まり下層	製塩土器						口縁部片	ナデ・輪積み痕	灰褐色・良好	
369	7-3	SB1北辺 瓦溜まり下層	製塩土器						口縁部片	ナデ・指圧痕	淡灰褐色・良好	
393	8-3	SB3周辺下層	須恵器	杯H蓋					肩部片	回転ナデ・回転ヘラ削り	灰褐色・良好	
394	8-3	SB3周辺下層	須恵器	杯B蓋	13.0	(1.7)			口縁部1/3	回転ナデ・つまみ貼付後ナデ	青灰色・良好	
395	8-3	SB3周辺下層	須恵器	壺		(5.1)			底部1/10	回転ナデ・ナデ	灰褐色・良好	
396	8-3	SB3周辺下層	須恵器	壺		(4.0)			底部1/10	回転ナデ・回転ヘラ削り	青灰色・良好	
397	8-3	SB3周辺下層	須恵器	壺		(4.3)			底部	回転ナデ・回転ヘラ削り	青灰色・良好	
398	8-3	SB3周辺下層	須恵器	壺					肩部	回転ナデ・頸部貼付	青灰色・良好	内面から穿孔
399	8-3	SB3周辺下層	須恵器	甕					肩部	内:同心円状当て具痕 外:平行文叩き	青灰色・良好	
400	8-3	SB3周辺下層	須恵器	甕					胴部片	内:同心円状当て具痕 外:平行文叩き	内:青灰色 外:灰褐色 良好	
401	8-3	SB3周辺下層	土師器	甕					把手のみ	内:ケズリ 外:ハケ	淡黄褐色・良好	
402	8-3	SB3南辺断割	土師器	甕					把手のみ	内:ケズリ	淡褐色・良好	
403	8-3	SB3周辺下層	土師器	椀		(2.1)			口縁部片	ナデ 内:放射状暗文	橙褐色・良好	
404	8-3	SB3周辺下層	土師器	皿		(1.6)	6.2		底部1/6	回転ナデ・底部回転糸切り	橙褐色・良好	
405	8-3	SB3周辺下層	土師器	皿		(1.1)	6.2		底部1/6	回転ナデ・底部回転糸切り	淡橙褐色・良好	
406	8-3	SB3周辺下層	鉄製品	釘			長さ(6.8) 厚さ:0.85					
407	8-3	SB3周辺下層	鉄製品	釘			長さ:(7.6) 厚さ:1.1					
408	8-3	基壇構成土	須恵器	杯H蓋		(3.5)			天井部1/2	回転ナデ・回転ヘラ削り	青灰色・良好	
409	8-3	基壇構成土	須恵器	甕					胴部片	内:同心円状当て具痕・ナデ消し 外:平行文叩き	灰褐色・良好	
410	8-3	基壇構成土	須恵器	甕					胴部片	内:同心円状当て具痕・ナデ消し 外:カキ目	灰褐色・良好	

表6 興道寺廃寺第2～8次調査出土報告土器・鉄製品一覧表(3)

報告 番号	次数 /Tr	遺 構	種 別	残存部位	法 量 (mm)	凸面叩き目 本数・大きさ	凸面調整 (ナデ調整)	凹面 布目	凹面調整	端 部 側縁調整	色 調	重量
13	2-1	SK2	丸瓦	1	厚17	平行5	弱横ナデ消し	密(26)	布綴じ合わせ目	未調整	青灰色	612
14	2-1	SK2	丸瓦	9	厚20		強横ナデ	粗15		側縁凹面削り	淡灰色	488
15	2-1	SK2	丸瓦	2	厚16		強横ナデ	粗13		—	乳白色	276
16	2-1	SK2	丸瓦	7	厚14		強縦ナデ	粗15		側縁凹面削り	灰色	278
17	2-1	SK2	平瓦	2	厚27	平行4		粗22	縦強ナデ消し	—	褐色	488
18	2-1	SK2	平瓦	1	厚22	平行5			縦強ナデ消し	未調整	乳白色	642
19	2-1	SK2	平瓦	4	厚22	平行7		粗	縦強ナデ消し	未調整	乳白色	1,018
20	2-1	SK2	平瓦	4	厚17	小斜格子3-5	強横ナデ消し	粗19	模骨痕	未調整	灰色	550
21	2-1	SK2	平瓦	1	厚27	大斜格子12-13		粗		未調整	褐色	886
22	2-1	SK2	平瓦	6	厚21	大正格子9-15		粗		側縁凹面削り	褐色	626
23	2-1	SK2	平瓦	2	厚15	小斜格子4-6	強横ナデ消し	粗22		—	淡灰色	322
24	2-1	SK2	平瓦	3	厚20		強縦ナデ	密24		側縁凹面削り	灰色	606
25	2-2	SB1西辺下層	素縁十葉 蓮華文軒丸瓦	瓦当片	外縁幅18						乳白色	66
26	2-2	SB1西辺下層	三重弧文 軒平瓦(Ⅰ)	平瓦片			強横ナデ		ナデ消し	—	乳白色	226
27	2-2	SB1西辺下層	三重弧文 軒平瓦(Ⅱ)	瓦当片	瓦当厚32		強横ナデ	粗17			淡灰色	286
28	2-2	SB1西辺下層	偏行唐草文 軒平瓦	瓦当片	瓦当現存厚49						乳白色	90
44	2-2	SB1西辺下層	三重弧文 軒平瓦(Ⅱ)	瓦当, 7, 8, 9	瓦当厚30		強横ナデ	粗23		未調整	淡灰色	2,320
45	2-2	SB1西辺下層	三重弧文 軒平瓦(Ⅱ)	8	瓦当厚28		強横ナデ	粗(20)		—	乳白色	508
46	2-2	SB1西辺下層	三重弧文 軒平瓦(Ⅱ)	6, 8	瓦当厚31		強横ナデ	粗23		未調整	乳白色	742
47	2-2	SB1西辺下層	三重弧文 軒平瓦(Ⅱ)	9	瓦当厚28		強横ナデ	粗23		未調整	灰色	574
48	2-2	SB1西辺下層	三重弧文 軒平瓦(Ⅱ)	8	瓦当厚29		強横ナデ	粗21		—	乳白色	682
49	2-2	SB1西辺下層	熨斗瓦	2-9	厚18		強横ナデ	粗	縦強ナデ消し	未調整	灰色	1,358
50	2-2	SB1西辺下層	熨斗瓦	2-9	厚19		強横ナデ	粗(20)		未調整	乳白色	604
51	2-2	SB1西辺下層	隅落とし平瓦	5, 6	厚24	平行5			縦強ナデ消し	未調整	灰色	464
52	2-2	SB1西辺下層	丸瓦	1-6	厚15	平行5	弱横ナデ消し	粗18		未調整	灰色	(1,044)
53	2-2	SB1西辺下層	丸瓦	3, 6	厚12	平行5		粗15		未調整	淡褐色	376
54	2-2	SB1西辺下層	丸瓦	4	厚15	平行5	弱横ナデ消し	粗18		側縁凹面削り	乳白色	226
55	2-2	SB1西辺下層	丸瓦	9	厚15	平行5	弱横ナデ消し	粗19		未調整	灰色	230
56	2-2	SB1西辺下層	丸瓦	2, 3, 5, 6	厚17	平行5	弱横ナデ消し	粗17		未調整	乳白色	592
57	2-2	SB1西辺下層	丸瓦	1, 4, 5	厚13	小縄目	弱横ナデ消し	粗18		側縁凹面削り	灰色	508
58	2-2	SB1西辺下層	丸瓦	1, 2, 5, 6	厚13	平行6	弱横ナデ消し	粗17		未調整	灰色	636
59	2-2	SB1西辺下層	丸瓦	8, 9	厚18		弱横ナデ消し	粗18	一部ナデ消し	未調整	灰色	352
60	2-2	SB1西辺下層	丸瓦	1, 2	厚17		強ナデ	粗17	布綴じ合わせ目	未調整	乳白色	396
61	2-2	SB1西辺下層	丸瓦	9	厚22		強横ナデ	密26		未調整	乳白色	456
62	2-2	SB1西辺下層	丸瓦	8, 9	厚15		強横ナデ	粗22		未調整	灰色	404
63	2-2	SB1西辺下層	平瓦	2, 7, 8	厚22	平行5			縦強ナデ消し	未調整	淡褐色	1,100
64	2-2	SB1西辺下層	平瓦	3	厚18	平行4		粗20		未調整	乳白色	566
65	2-2	SB1西辺下層	平瓦	4, 8	厚19	平行4	強横ナデ消し	粗21		未調整	灰色	712
66	2-2	SB1西辺下層	平瓦	1	厚23	平行	強横ナデ消し	粗20		未調整	乳白色	520
67	2-2	SB1西辺下層	平瓦	1, 4	厚22	平行4	強横ナデ消し	粗22	ナデ消し	未調整	乳白色	840
68	2-2	SB1西辺下層	平瓦	7	厚20	平行4			縦強ナデ消し	未調整	青灰色	1,263
69	2-2	SB1西辺下層	平瓦	1, 2	厚23	平行/4	赤彩顔料付着		縦強ナデ消し	側縁凸面削り	乳白色	948
70	2-2	SB1西辺下層	平瓦	1	厚19	小斜格子3-5	強横ナデ消し	粗21		未調整	乳白色	304
71	2-2	SB1西辺下層	平瓦	2	厚16	小正格子7-11	強横ナデ消し	粗16		—	乳白色	276
72	2-2	SB1西辺下層	平瓦	9	厚21	小正格子7-11	強横ナデ消し	粗19		未調整	褐色	422
73	2-2	SB1西辺下層	平瓦	9	厚17		強横ナデ		縦強ナデ消し 模骨痕	未調整	淡褐色	508
74	2-2	SB1西辺下層	平瓦	4-6	厚29		強横削り状ナデ	粗21	模骨痕	未調整	淡灰色	1,530
75	2-2	SB1西辺下層	平瓦	2	厚20		強縦ナデ	粗22	縦強ナデ消し 模骨痕	未調整	乳白色	646
76	2-2	SB1西辺下層	平瓦	6	厚18		強横ナデ	粗20		未調整	乳白色	386
77	2-2	SB1西辺下層	平瓦	6	厚27		強横ナデ	粗19	模骨痕	未調整	乳白色	814
78	2-2	SB1西辺下層	平瓦	3	厚19		強縦ナデ	粗22	模骨痕	狭端凸面削り 側縁凸面削り	褐色	416
79	2-2	SB1西辺下層	平瓦	6	厚20		強横ナデ	粗24		側縁凹面削り	乳白色	460
80	2-2	SB1西辺下層	平瓦	1	厚20	大正格子8-11	弱横ナデ消し	粗15		未調整	乳白色	544
81	2-2	SB1西辺下層	平瓦	3	厚18	平行5	強縦ナデ消し	粗20	模骨痕	未調整	淡灰色	550
82	2-2	SB1西辺下層	平瓦	4	厚26	小斜格子4-5	強横ナデ消し	粗22	模骨痕	未調整	灰色	586
83	2-2	SB1西辺下層	平瓦	6	厚26		強横ナデ	粗18	模骨痕	未調整	乳白色	790
84	2-2	SB1西辺下層	平瓦	6	厚21		強横ナデ	粗19		未調整	乳白色	668
85	2-2	SB1西辺下層	平瓦	3	厚16	小斜格子5-11	強横ナデ消し	粗19		未調整	乳白色	380
86	2-2	SB1西辺下層	平瓦	1	厚17		強縦ナデ	粗20	模骨痕	未調整	褐色	638

表7 興道寺廃寺第2～8次調査出土報告瓦一覽表(1)

報告 番号	次数 /Tr	遺 構	種 別	残存部位	法 量 (mm)	凸面叩き目 本数・大きさ	凸面調整 (ナデ調整)	凹面 布目	凹面調整	端 部 側縁調整	色 調	重量
87	2-2	SB1西辺下層	平瓦	3	厚17		強横ナデ	粗18	模骨痕	未調整	灰色	476
88	2-2	SB1西辺下層	平瓦	9	厚20		強縦ナデ	粗17	模骨痕	未調整	褐色	884
89	2-2	SB1西辺下層	平瓦	4	厚24		強縦横ナデ		縦強ナデ消し	側縁凸面削り	灰色	558
90	2-2	SB1西辺上層	素縁十葉 蓮華文軒丸瓦	瓦当	瓦当復元径156 中房径46						灰色	240
91	2-2	SB1西辺上層	素縁十葉 蓮華文軒丸瓦	瓦当片	外縁幅11						灰色	110
92	2-2	SB1西辺上層	素縁十葉 蓮華文軒丸瓦	瓦当片	外縁幅16						黒色	472
93	2-2	SB1西辺上層	素縁十葉 蓮華文軒丸瓦	瓦当片							灰色	44
94	2-2	SB1西辺上層	素縁十葉 蓮華文軒丸瓦	瓦当片	外縁幅11						灰色	66
95	2-2	SB1西辺上層	素縁九葉 蓮華文軒丸瓦	瓦当片							乳白色	118
96	2-2	SB1西辺上層	軒丸瓦	丸瓦接合部				粗18			灰色	242
97	2-2	SB1西辺上層	軒丸瓦	丸瓦接合部			強縦ナデ	粗14			淡灰色	278
98	2-2	SB1西辺上層	軒丸瓦	丸瓦接合部			強横ナデ	粗18			乳白色	192
99	2-2	SB1西辺上層	三重弧文 軒平瓦 (I)	7	瓦当厚(33)	花卉型押し			縦強ナデ消し	側縁凹凸面削り	灰色	648
100	2-2	SB1西辺上層	三重弧文 軒平瓦 (I)	7	瓦当厚(35)	花卉型押し		粗22		未調整	褐色	116
101	2-2	SB1西辺上層	三重弧文 軒平瓦 (II)	8	瓦当厚29		強横ナデ	粗21			乳白色	328
102	2-2	SB1西辺上層	三重弧文 軒平瓦 (II)	7	瓦当厚29		不明	粗20			乳白色	158
103	2-2	SB1西辺上層	偏行唐草文 軒平瓦	8	瓦当厚(46)		強横ナデ	粗22			乳白色	292
104	2-2	SB1西辺上層	丸瓦	1, 2	厚12	平行6	強横ナデ消し	粗18	布綴じ合わせ目	側縁凹面削り	淡灰色	378
105	2-2	SB1西辺上層	丸瓦	7, 8	厚22		強縦ナデ	粗17		側縁凹凸面削り	淡灰色	728
106	2-2	SB1西辺上層	丸瓦	1, 2	厚13		強縦横ナデ	粗20		側縁凹面削り	乳白色	320
107	2-2	SB1西辺上層	丸瓦	6	厚19		強縦ナデ	粗9		側縁凹面削り	黒色	346
108	2-2	SB1西辺上層	丸瓦	8, 9	厚20		弱横ナデ	粗10		側縁凹面削り	灰色	560
109	2-2	SB1西辺上層	丸瓦	1, 2	厚14		弱横ナデ	粗17		未調整	乳白色	376
110	2-2	SB1西辺上層	丸瓦	2, 3	厚13		弱横ナデ	粗11		未調整	灰色	256
111	2-2	SB1西辺上層	丸瓦	8	厚16		弱横ナデ	粗18		—	灰色	276
112	2-2	SB1西辺上層	丸瓦	2, 3	厚10	平行6	強縦ナデ消し	粗18		未調整	灰色	310
113	2-2	SB1西辺上層	平瓦	6	厚26	平行5			縦強ナデ消し	未調整	淡灰色	488
114	2-2	SB1西辺上層	平瓦	8, 9	厚26	大斜格子11-11	弱横ナデ消し		縦強ナデ消し	側縁凹凸面削り	淡灰色	624
115	2-2	SB1西辺上層	平瓦	1	厚18	大縄目6		粗20	模骨痕	未調整	乳白色	432
116	2-2	SB1西辺上層	平瓦	9	厚17	小斜格子5-6	強横ナデ消し	粗21	模骨痕	未調整	淡灰色	446
117	2-2	SB1西辺上層	平瓦	6	厚11	小斜格子4-5	弱横ナデ消し	粗14		未調整	淡灰色	342
118	2-2	SB1西辺上層	平瓦	3	厚21	小斜格子4-4	強縦ナデ消し	粗21	模骨痕	側縁凹面削り	青灰色	670
119	2-2	SB1西辺上層	平瓦	6	厚20		強横ナデ	粗18	縦強ナデ消し	未調整	淡灰色	632
120	2-2	SK3	単弁八葉 蓮華文軒丸瓦	瓦当片							乳白色	276
121	2-2	SK3	平瓦	8	厚21		強横ナデ	粗		未調整	乳白色	304
122	2-2	SK3	平瓦	5	厚20	小斜格子5-7	強横ナデ	粗		—	淡黒色	372
123	2-2	SK3	平瓦	5	厚18	大正格子7-12	強横ナデ消し	粗		—	淡灰色	332
124	2-2	SK3	平瓦	5	厚22	平行4	弱ナデ		縦強ナデ消し	—	褐色	418
125	2-2	表土	素弁九葉 蓮華文軒平瓦	瓦当片	瓦当厚24		強縦ナデ		横弱ナデ消し		乳白色	706
161	4-7	SB1西辺下層	素弁十葉 蓮華文軒平瓦	瓦当	外縁復元径166 中房径45 外縁幅10	—		—	—	—	灰色	396
162	4-7	SB1西辺下層	素弁十葉 蓮華文軒平瓦	瓦当外縁	外縁幅13	—		—	—	—	灰色	102
163	4-7	SB1西辺下層	偏行唐草文 軒平瓦	瓦当片		—		—	—	—	乳白色	88
164	4-7	SB1西辺下層	丸瓦	4	厚11	平行	強横ナデ消し	粗18		未調整	灰色	198
165	4-7	SB1西辺下層	丸瓦	3	厚14	小縄目6	強横ナデ消し	粗21	布綴じ合わせ目	側縁凹面削り	灰色	282
166	4-7	SB1西辺下層	丸瓦	4	厚18		強横ナデ	粗20		側縁凹凸面削り	灰色	282
167	4-7	SB1西辺下層	丸瓦	6	厚16		強横ナデ	密27		未調整	乳白色	300
168	4-7	SB1西辺下層	丸瓦	3	厚18		強横ナデ	密25		—	褐色	300
169	4-7	SB1西辺下層	丸瓦	7	厚13	平行	強横ナデ	粗21		側縁凹面削り	灰色	232
170	4-7	SB1西辺下層	平瓦	2	厚26				縦強ナデ消し	—	淡褐色	640
171	4-7	SB1西辺下層	平瓦	2, 6	厚32	平行4		粗19		側縁凹面削り	乳白色	1, 018
172	4-7	SB1西辺下層	平瓦	2, 6	厚20		強横ナデ		縦強ナデ消し 模骨痕	未調整	乳白色	904
173	4-7	SB1西辺下層	平瓦	1, 2, 8, 9	厚18		強縦ナデ	粗17	模骨痕	未調整	乳白色	1, 058
174	4-7	SB1西辺下層	平瓦	8	厚21	大正格子11-10	強横ナデ消し	粗19		—	褐色	580
175	4-7	SB1西辺下層	平瓦	8, 9	厚25		強横ナデ	密27		布綴じ合わせ目	淡褐色	166

表8 興道寺廃寺第2～8次調査出土報告瓦一覽表(2)

報告 番号	次数 /Tr	造 構	種 別	残存部位	法 量 (mm)	凸面叩き目 本数・大きさ	凸面調整 (ナデ調整)	凹面 布目	凹面調整	端 部 側縁調整	色調	重量
176	4-7	SB1西边上層	素弁十葉 蓮華文軒平瓦	瓦当片	外縁幅12						灰色	176
177	4-7	SB1西边上層	素弁十葉 蓮華文軒平瓦	瓦当片							淡灰色	34
178	4-7	SB1西边上層	素弁九葉 蓮華文軒平瓦	瓦当片							乳白色	52
179	4-7	SB1西边上層	偏行唐草文 軒平瓦	瓦当片							乳白色	—
180	4-7	SB1西边上層	隅落とし平瓦	2, 3	厚19	平行4	強横ナデ		縦強ナデ消し	側縁凸面削り	淡褐色	412
181	4-7	SB1西边上層	隅落とし平瓦	2, 3	厚18		強横ナデ	粗20		未調整	灰色	114
182	4-7	SB1西边上層	隅落とし平瓦	7	厚20	平行4	強横ナデ	粗25		未調整	灰色	454
183	4-7	SB1西边上層	丸瓦	9	厚18		強横ナデ	密30		側縁凹面削り	灰色	258
184	4-7	SB1西边上層	丸瓦	6	厚18		強横ナデ	密(18)		未調整	乳白色	264
185	4-7	SB1西边上層	平瓦	6	厚19	平行4	強横削り状 ナデ消し	粗19	一部ナデ消し	側縁凸面削り	灰色	430
186	4-7	SB1西边上層	平瓦	3	厚20	小縄目6		粗(18)		未調整	乳白色	688
187	4-7	SB1西边上層	平瓦	6	厚20		強横ナデ	粗19		未調整	淡灰色	469
188	4-7	SB1西边上層	平瓦	3	厚19		強横ナデ	粗	ナデ消し	未調整	灰色	426
189	4-7	SB1西边上層	平瓦	4	厚14		強縦ナデ	粗19	一部縦強ナデ消し	未調整	乳白色	384
190	4-7	SB1西边上層	平瓦	4	厚24		強縦ナデ	粗19		側縁凹面削り	褐色	486
191	4-7	SB1西边上層	平瓦	8, 9	厚20		強横ナデ	粗		側縁凹面削り	淡黒色	372
196	4-10	SD3	軒丸瓦	広端接合部	厚33		強縦ナデ	粗19		—	乳白色	206
197	4-10	SD3	平瓦	5	厚17	大縄目5		粗20		—	淡褐色	288
198	4-10	SD3	平瓦	6	厚20	平行	弱横ナデ消し		ナデ消し	未調整	灰色	190
217	6-1	SK3	単弁八葉 蓮華文軒丸瓦	瓦当片	中房径33						乳白色	204
218	6-1	SK3	三重弧文 軒平瓦 (I)	9	瓦当厚40		花卉型押し	粗	縦強ナデ消し	未調整	乳白色	704
219	6-1	SK3	平瓦	6	厚19		強横ナデ		縦強ナデ消し	未調整	淡褐色	504
223	6-2	SB2東列石下	偏行唐草文 軒平瓦	8, 9	瓦当厚(50)		強横ナデ	粗20		未調整	乳白色	942
224	6-2	SB2構成土	偏行唐草文 軒平瓦	7	瓦当厚47		強横ナデ	粗18		未調整	乳白色	582
225	6-2	SB2構成土	隅落とし平瓦	2, 3, 5, 6	厚19	平行4		粗	縦強ナデ消し	未調整	淡灰色	580
226	6-2	SB2構成土	丸瓦	7	厚17		強横ナデ	粗17		未調整	乳白色	626
227	6-2	SB2構成土	丸瓦	1	厚22	平行	強横ナデ消し	粗16		側縁凹凸面削り	淡褐色	264
228	6-2	SB2構成土	平瓦	6	厚20	平行4	弱横ナデ		強縦ナデ消し	未調整	乳白色	410
229	6-2	SB2構成土	平瓦	1, 4, 5	厚24	平行4	強横ナデ	粗21		未調整	灰色	1, 466
230	6-2	SB2構成土	平瓦	4	厚25	大斜格子9-14	弱横ナデ消し	粗	強縦ナデ消し	側縁凹面削り	淡黒色	276
231	6-2	SB2構成土	平瓦	5	厚18	小斜格子7-9	強横ナデ消し	粗20		—	淡黒色	188
232	6-2	SB2構成土	平瓦	5, 6, 9	厚14		強横ナデ	粗21	模骨痕	未調整	褐色	1, 484
233	6-2	SB2構成土	平瓦	5, 6	厚18		強横ナデ	粗19	模骨痕	未調整	灰色	386
234	6-2	SB2構成土	平瓦	5, 6	厚22		弱縦ナデ	粗22		側縁凸面削り	褐色	544
235	6-2	SB2構成土	平瓦	6	厚18		強横ナデ	粗18		未調整	乳白色	480
236	6-2	SB2東辺下層	素弁十葉 蓮華文軒平瓦	瓦当片	外縁復元径170 中房径47 外縁幅14 瓦当厚28						淡灰色	816
237	6-2	SB2東辺下層	素弁十葉 蓮華文軒平瓦	瓦当片	外縁復元径170 中房復元径48 外縁幅16 瓦当厚17						灰色	128
238	6-2	SB2東辺下層	素弁十葉 蓮華文軒平瓦	瓦当片	外縁幅15						淡黒色	116
239	6-2	SB2東辺下層	素弁十葉 蓮華文軒平瓦	瓦当片	外縁復元径166 中房復元径50 外縁幅16 瓦当厚17						乳白色	282
240	6-2	SB2東辺下層	素弁九葉 蓮華文軒平瓦	瓦当片							乳白色	152
241	6-2	SB2東辺下層	三重弧文 軒平瓦 (I)	9	瓦当復元厚39	花卉型押し	剥離面平行5	粗	強縦ナデ消し	側縁凹面削り	淡褐色	358
242	6-2	SB2東辺下層	三重弧文 軒平瓦 (I)	9	瓦当復元厚35	花卉型押し	剥離面平行4	粗20		未調整	乳白色	1, 576
243	6-2	SB2東辺下層	三重弧文 軒平瓦 (II)	8	瓦当厚32	小縄目5	強横ナデ	粗20		—	乳白色	750
244	6-2	SB2東辺下層	三重弧文 軒平瓦 (II)	5, 7-9	瓦当厚28 平瓦厚21	小縄目	強横ナデ消し	粗20	模骨痕	未調整	淡灰褐色	2, 318
245	6-2	SB2東辺下層	三重弧文 軒平瓦 (II)	9	瓦当厚24		強横ナデ	粗19	模骨痕	未調整	乳白色	590
246	6-2	SB2東辺下層	三重弧文 軒平瓦 (II)	7	瓦当厚29		強横ナデ	粗19		未調整	乳白色	632
247	6-2	SB2東辺下層	三重弧文 軒平瓦 (II)	7	瓦当厚29	小縄目	強横ナデ消し	粗21		未調整	乳白色	1, 316
248	6-2	SB2東辺下層	三重弧文 軒平瓦 (II)	8	瓦当厚31	小縄目	強横ナデ消し	粗20		—	乳白色	622

表9 興道寺廃寺第2～8次調査出土報告瓦一覧表(3)

報告 番号	次 数 /Tr	遺 構	種 別	残存部位	法 量 (mm)	凸面叩き目 本数・大きさ	凸面調整 (ナデ調整)	凹面 布目	凹面調整	端 部 側縁調整	色 調	重 量
249	6-2	SB2東辺下層	偏行唐草文 軒平瓦	1, 4, 5, 8	瓦当現存厚35 平瓦厚30	小縄目4	強横ナデ消し	粗20		未調整	乳白色	2, 408
250	6-2	SB2東辺下層	偏行唐草文 軒平瓦	9	瓦当厚51		強縦横ナデ	粗20		未調整	乳白色	946
251	6-2	SB2東辺下層	偏行唐草文 軒平瓦	9	瓦当厚50	小縄目	強横ナデ消し	粗17		未調整	乳白色	998
252	6-2	SB2東辺下層	偏行唐草文 軒平瓦	7	瓦当厚50		強横ナデ	粗21		未調整	淡褐色	550
253	6-2	SB2東辺下層	偏行唐草文 軒平瓦	7	瓦当厚53	小縄目	強横ナデ消し	粗21		未調整	淡褐色	1, 016
254	6-2	SB2東辺下層	偏行唐草文 軒平瓦	9	瓦当復元厚51		強横ナデ	粗(20)		未調整	淡褐色	442
255	6-2	SB2東辺下層	熨斗瓦	1, 2, 5, 6	厚23	強横ナデ		粗	強縦ナデ消し	未調整	乳白色	588
256	6-2	SB2東辺下層	熨斗瓦	1, 4	厚23	平行5			強縦ナデ消し	未調整	乳白色	256
257	6-2	SB2東辺下層	丸瓦	7-9	厚13	平行5	強横ナデ消し	粗17	布綴じ合わせ目	未調整	青灰色	982
258	6-2	SB2東辺下層	丸瓦	4	厚11	平行4	強横ナデ消し	粗(22)		側縁凹面削り	淡灰色	584
259	6-2	SB2東辺下層	丸瓦	1-7	厚17	平行5	強横ナデ消し	粗19		側縁凹面削り	灰色	(2, 090)
260	6-2	SB2東辺下層	丸瓦	1-3, 5, 6	厚14	平行5	強横ナデ消し	粗19		未調整	淡灰色	936
261	6-2	SB2東辺下層	丸瓦	1, 2, 4-8	厚13	平行5	強横ナデ消し	粗20		側縁凹面削り	灰色	1, 570
262	6-2	SB2東辺下層	丸瓦	6	厚26	平行5	強横ナデ消し	密27		側縁凹面削り	青灰色	1, 124
263	6-2	SB2東辺下層	丸瓦	3, 6, 9	厚15	強横ナデ		粗17		側縁凹面削り	青灰色	1, 266
264	6-2	SB2東辺下層	丸瓦	9	厚16		強横ナデ	密28		側縁凹面削り	青灰色	254
265	6-2	SB2東辺下層	丸瓦	7	厚14		強横ナデ	粗18		未調整	淡黒色	318
266	6-2	SB2東辺下層	丸瓦	4-6	厚12		強横ナデ	粗17		未調整	乳灰色	790
267	6-2	SB2東辺下層	丸瓦	9	厚27		強横ナデ	密27		側縁凹面削り	褐色	236
268	6-2	SB2東辺下層	丸瓦	3	厚15		強横ナデ	密28		側縁凹面削り	褐色	278
269	6-2	SB2東辺下層	丸瓦	1	厚16		強横ナデ	粗20		側縁凹面削り	乳白色	228
270	6-2	SB2東辺下層	平瓦	1-4, 7, 9	厚20	平行4	強横ナデ		強縦ナデ消し 模骨痕	側縁凹凸面削り	淡灰色	3, 334
271	6-2	SB2東辺下層	平瓦	7	厚22	平行5		粗	強縦ナデ消し	未調整	乳白色	686
272	6-2	SB2東辺下層	平瓦	4, 5	厚25	平行5	強横ナデ消し	粗	強縦ナデ消し	未調整	乳白色	738
273	6-2	SB2東辺下層	平瓦	5, 6	厚24	大斜格子10-12	強横ナデ消し	粗22		未調整	黒色	326
274	6-2	SB2東辺下層	平瓦	5	厚23	小斜格子7-10	強縦横ナデ消し		強縦ナデ消し	—	黒色	458
275	6-2	SB2東辺下層	平瓦	1, 2	厚17	小斜格子5-7	強縦ケズリ状 ナデ消し	粗20	模骨痕	未調整	褐色	650
276	6-2	SB2東辺下層	平瓦	2, 3	厚18	小縄目6	強横ナデ	粗19	模骨痕	未調整	淡灰色	522
277	6-2	SB2東辺下層	平瓦	2, 4	厚22	小縄目6	強横ナデ消し	粗20		未調整	乳白色	584
278	6-2	SB2東辺下層	平瓦	5, 6	厚24	小縄目6	強横ナデ消し	粗15	模骨痕	未調整	乳白色	1, 522
279	6-2	SB2東辺下層	平瓦	2-6, 8, 9	厚27		強縦ナデ	粗21	模骨痕	未調整	褐色	3, 860
280	6-2	SB2東辺下層	平瓦	6	厚18		強横ナデ	粗20	模骨痕 布綴じ合わせ目	未調整	灰色	498
281	6-2	SB2東辺下層	平瓦	1	厚21		強横ナデ	粗10	模骨痕	未調整	淡灰色	692
282	6-2	SB2東辺下層	平瓦	9	厚23		強横ナデ	密28		側縁凹面削り	灰色	520
283	6-2	SB2東辺下層	平瓦	1, 6, 9	厚18		強縦横ナデ	粗20	模骨痕	側縁凹面削り	褐色	1, 982
284	6-2	SB2東辺下層	平瓦	6	厚17		強縦ケズリ状ナデ	粗19		未調整	乳白色	322
285	6-2	SB2東辺下層	平瓦	3, 5	厚23		強横ナデ	密26	模骨痕	側縁凹面削り	褐色	658
286	6-2	SB2東辺下層	平瓦	6	厚22		強横ナデ	粗23	模骨痕	未調整	乳白色	463
287	6-2	SB2東辺上層	素弁九葉 蓮華文軒丸瓦	瓦当片							淡灰色	166
288	6-2	SB2東辺上層	丸瓦	6	厚11	小縄目5	強横ナデ消し	粗17		側縁凹面削り	灰色	308
289	6-2	SB2東辺上層	丸瓦	6	厚17	小縄目6	強横ナデ消し	粗17		側縁凹面削り	淡黒色	428
290	6-2	SB2東辺上層	丸瓦	6	厚16	小縄目6	強横ナデ消し	粗20		側縁凹面削り	褐色	486
291	6-2	SB2東辺上層	丸瓦	1, 4	厚17		強横ナデ	粗19		未調整	淡黒色	380
292	6-2	SB2東辺上層	丸瓦	6	厚14		強横ナデ	粗10		未調整	黒色	276
293	6-2	SB2東辺上層	丸瓦	6	厚14		強横ナデ	粗12		側縁凹面削り	灰色	272
294	6-2	SB2東辺上層	丸瓦	4, 5	厚16		強横ナデ	密27		未調整	褐色	352
295	6-2	SB2東辺上層	平瓦	5	厚22	大斜格子7-12	弱横ナデ消し 赤彩		強縦ナデ消し	—	褐色	236
296	6-2	SB2東辺上層	平瓦	4	厚20	小正格子4-6	強横ナデ消し	粗20	模骨痕	未調整	褐色	700
297	6-2	SB2東辺上層	平瓦	4, 5	厚17	大正格子5-10	強横ナデ	粗18		未調整	灰色	672
298	6-2	SB2東辺上層	平瓦	2	厚19	小縄目6	強横ナデ消し	粗16		未調整	褐色	420
299	6-2	SB2東辺上層	平瓦	3	厚15	小縄目9	強横ナデ消し	粗20	模骨痕	未調整	灰色	158
300	6-2	SB2東辺上層	平瓦	2	厚28		強横ナデ	粗20		狭端凸面削り	灰色	606
301	6-2	SB2東辺上層	平瓦	7	厚18		強横ナデ		強縦ナデ消し	広端凸面削り 側縁凸面削り	灰色	356
303	6-3	SB2西列石下	偏行唐草文 軒平瓦	7	瓦当厚50		強横ナデ	粗20		未調整	乳白色	830
304	6-3	SB2構成土	丸瓦	9	厚23		強横ナデ	粗11		未調整	黒色	422
305	6-3	SB2構成土	平瓦	9	厚18	平行5			強縦ナデ消し 模骨痕	未調整	灰色	778
306	6-3	SB2構成土	平瓦	5	厚19	大正格子8-9	強横ナデ消し	粗22	一部ナデ消し	—	褐色	406
307	6-3	SB2構成土	平瓦	6	厚17	小斜格子4-6	強横ナデ消し	粗22	模骨痕 一部ナデ消し	未調整	褐色	446

表 10 興道寺廃寺第2～8次調査出土報告瓦一覧表(4)

報告 番号	次数 /Tr	遺 構	種 別	残存部位	法 量 (mm)	凸面叩き目 本数・大きさ	凸面調整 (ナデ調整)	凹面 布目	凹面調整	端 部 側縁調整	色 調	重量
308	6-3	SB2構成土	平瓦	6	厚26	平行5			強縦ナデ消し 模骨痕	未調整	乳白色	400
309	6-3	SB2構成土	平瓦	7	厚25	平行5			強縦ナデ消し	側縁凹凸面削り	乳白色	528
310	6-3	SB2構成土	平瓦	6	厚25		強横ナデ	粗	強縦ナデ消し 模骨痕	側縁凸面削り	褐色	828
311	6-3	SB2構成土	平瓦	1	厚18		弱横ナデ	粗21	模骨痕	未調整	乳白色	296
312	6-3	SB2西辺下層	三重弧文 軒平瓦 (I)	5	厚25	花卉型押し		粗20		—	淡黒色	472
313	6-3	SB2西辺下層	丸瓦	4	厚12	平行4	弱横ナデ	密24	布綴じ合わせ目	—	褐色	244
314	6-3	SB2西辺下層	丸瓦	7, 8	厚26	小縄目4	弱横ナデ	粗19		未調整	淡黒色	270
315	6-3	SB2西辺下層	丸瓦	4	厚19		強横ナデ	粗21		側縁凹凸面削り	青灰色	552
316	6-3	SB2西辺下層	丸瓦	9	厚23		強横ナデ	粗(20)		側縁凹凸面削り	乳白色	508
317	6-3	SB2西辺下層	丸瓦	4	厚25		強横ナデ	粗(18)		未調整	青灰色	340
318	6-3	SB2西辺下層	丸瓦	4, 6	厚19		強横ナデ	粗20		未調整	灰色	870
319	6-3	SB2西辺下層	丸瓦	3	厚17		強横ナデ	粗20		側縁凹凸面削り	褐色	286
320	6-3	SB2西辺下層	丸瓦	4	厚18		強横ナデ	粗19		側縁凹凸面削り	淡灰色	230
321	6-3	SB2西辺下層	平瓦	8, 9	厚18	小正格子7-8	強横ナデ消し	粗21	模骨痕	未調整	灰色	560
322	6-3	SB2西辺下層	平瓦	8, 9	厚19	小斜格子4-7	強横ナデ消し	粗22		未調整	灰色	320
323	6-3	SB2西辺下層	平瓦	2, 3	厚18	小斜格子4-7	強横ナデ消し	粗22		未調整	灰色	404
324	6-3	SB2西辺下層	平瓦	8, 9	厚20	小正格子2-8	強横ナデ消し	粗20	模骨痕	側縁凹凸面削り	褐色	572
325	6-3	SB2西辺下層	平瓦	5	厚22	大縄目6		粗19		—	乳白色	182
326	6-3	SB2西辺下層	平瓦	2	厚21		強横ナデ	粗(22)		未調整	淡灰色	370
327	6-3	SB2西辺下層	平瓦	1	厚17		弱横ナデ	粗19	強縦ナデ消し	未調整	黒色	244
328	6-3	SB2西辺下層	平瓦	1	厚22		強縦ナデ	粗22		未調整	乳白色	344
329	6-3	SB2西辺上層	軒丸接合部	接合部	厚35	小縄目7	強横ナデ消し	粗19		—	灰色	172
330	6-3	SB2西辺上層	丸瓦	4	厚15	平行4		粗	強縦ナデ消し	側縁凹凸面削り	灰色	166
331	6-3	SB2西辺上層	丸瓦	6	厚15		強横ナデ	粗18		未調整	淡灰色	262
332	6-3	SB2西辺上層	丸瓦	4	厚15		強横ナデ	粗21	布綴じ合わせ目	側縁凹凸面削り	乳白色	418
333	6-3	SB2西辺上層	平瓦	1	厚18	小正格子4-10	強横ナデ消し	粗21		未調整	灰色	410
334	6-3	SB2北辺削平	丸瓦	8, 9	厚20	小縄目	強横ナデ消し	粗16		側縁凹凸面削り	灰色	470
335	6-3	SB2北辺削平	丸瓦	4	厚22		強横ナデ	粗22		側縁凸面削り	乳白色	302
336	6-3	SB2北辺削平	平瓦	1, 2	厚21	平行5	強横ナデ	粗21	模骨痕	側縁凹凸面削り	灰色	424
337	6-3	SB2北辺削平	平瓦	9	厚20	小正格子4-7	強横ナデ	密25	模骨痕	未調整	乳白色	827
338	6-3	SB2北辺削平	平瓦	2, 5	厚20		強横ナデ	粗20		未調整	淡褐色	550
339	6-3	SB2北辺削平	平瓦	5, 6	厚21		強横ナデ	粗25	強横ナデ消し	未調整	淡灰色	754
340	6-3	SB2北辺削平	平瓦	9	厚24		強横ナデ	粗22	模骨痕	側縁凹凸面削り	褐色	594
341	6-5	表土	素弁十葉 蓮華文軒平瓦	瓦当片	外縁復元径166 中房径47 外縁幅12						灰色	616
350	7-2	SK1	丸瓦	3, 6	厚18		強横ナデ	密29		広端未調整 側縁凹凸面削り	灰色	608
351	7-2	SD1	丸瓦	1, 4, 5	厚12	平行4	強横ナデ消し	粗17		未調整	灰色	570
352	7-2	SK1	丸瓦	5	厚26		弱縦横ナデ	粗20		—	淡褐色	342
353	7-2	SK1	平瓦	5	厚25		強横ナデ		ナデ消し 模骨痕	—	淡褐色	402
354	7-2	SK1	平瓦	5	厚21		強縦削り状ナデ	粗20		—	淡褐色	350
355	7-2	SD1	平瓦	8, 9	厚20		強縦削り状ナデ	粗19	模骨痕	未調整	灰色	702
356	7-2	P2	平瓦	4	厚20	小縄目5	強横ナデ消し	粗24		未調整	灰色	372
357	7-2	黒褐色土	丸瓦	1-7	厚21		強横ナデ	粗17		凹面削り	灰色	2, 609
358	7-2	黒褐色土	単弁八葉 蓮華文軒丸瓦	7-9	—						乳白色	2, 216
370	7-3	SB1北辺下層	軒丸瓦	広端接合部	—		強横ナデ	粗			乳白色	464
371	7-3	SB1北辺下層	偏行唐草文 軒平瓦	7	—		強横ナデ	粗22		未調整	乳白色	746
372	7-3	SB1北辺下層	丸瓦	6, 9	厚17		弱縦横ナデ	粗20		側縁凹凸面削り	淡灰色	456
373	7-3	SB1北辺下層	丸瓦	8, 9	厚31		弱縦ナデ	粗21		側縁凹凸面削り	灰色	630
374	7-3	SB1北辺下層	平瓦	7	厚22	平行4	強横ナデ消し	粗20		未調整	乳白色	1, 084
375	7-3	SB1北辺下層	平瓦	2, 4, 8	厚20	平行4	強横ナデ消し	粗	強縦ナデ消し	未調整	淡黒色	976
376	7-3	SB1北辺下層	平瓦	2	厚22	大斜格子10-12		粗	強縦ナデ消し	—	淡褐色	258
377	7-3	SB1北辺下層	平瓦	4, 5	厚19	小縄目7	弱ナデ消し	粗13		側縁凸面削り	淡褐色	608
378	7-3	SB1北辺下層	平瓦	1	厚22		強横ナデ		強縦ナデ消し	未調整	淡灰色	599
379	7-3	SB1北辺下層	平瓦	9	厚19		横ナデ		強縦ナデ消し	側縁凹凸面削り	灰色	330
380	7-3	SB1北辺下層	素弁十葉 蓮華文軒平瓦	瓦当							灰色	138
381	7-4	SB2東辺下層	丸瓦	6	厚15	平行4	弱横ナデ消し	密30		側縁凹凸面削り	青灰色	230
382	7-4	SB2東辺下層	丸瓦	8, 9	厚10		弱横ナデ	密26		未調整	灰色	310
383	7-4	SB2東辺下層	丸瓦	7, 8	厚22		強横ナデ	粗18		広端未調整 側縁凹凸面削り	乳白色	590
384	7-4	SB2東辺下層	丸瓦	8, 9	厚12		強縦ナデ	密32		側縁凹凸面削り	青灰色	274
385	7-4	SB2東辺下層	平瓦	6, 8	厚22	平行4		粗18		未調整	褐色	542
386	7-4	SB2東辺下層	平瓦	8, 9	厚18	小斜格子4-6		粗19	模骨痕	未調整	淡灰色	598

表 11 興道寺廃寺第2～8次調査出土報告瓦一覧表 (5)

報告 番号	次数 /Tr	遺 構	種 別	残存部位	法 量 (mm)	凸面叩き目 本数・大きさ	凸面調整 (ナデ調整)	凹面 布目	凹面調整	端 部 側縁調整	色 調	重量
387	7-4	SB2東辺下層	平瓦	6, 8	厚25	平行4		粗20		未調整	乳白色	124
388	7-4	SB2東辺下層	平瓦	6	厚16	大斜格子5-11		粗21	模骨痕	未調整	淡褐色	446
389	7-4	SB2東辺下層	平瓦	8, 9	厚21		削り状横ナデ	粗23		広端未調整 側縁凸面削り	灰色	814
390	7-4	SB2東辺下層	平瓦	4	厚22		弱横ナデ	粗16		未調整	淡褐色	508
391	7-5	地山直上	丸瓦	9	厚17		強横ナデ	粗19		側縁凹面削り	褐色	262
392	7-5	地山直上	平瓦	5, 6	厚24		強縦ナデ	粗20		側縁凹面削り	褐色	866
411	8-3	SB3周辺下層	丸瓦	4, 5	厚18		弱縦ナデ	密31		側縁凹面削り	褐色	302
412	8-3	SB3周辺下層	丸瓦	6	厚23		弱縦ナデ	密31		側縁凹面削り	淡褐色	230
413	8-3	SB3周辺下層	丸瓦	1	厚22		強横ナデ	粗14	布綴じ合わせ目	側縁凹面削り	青灰色	654
414	8-3	SB3周辺下層	丸瓦	5	厚22		強横ナデ	粗17		—	乳白色	212
415	8-3	SB3周辺下層	平瓦	4	厚24		弱縦ナデ	粗18		側縁凹面削り	乳白色	278
416	8-3	SB3周辺下層	平瓦	7	厚17		強縦ナデ	粗21		側縁凹面削り	褐色	222
417	8-3	SB3周辺下層	平瓦	7	厚22		弱縦ナデ	密27	模骨痕 布綴じ合わせ目	側縁凹面削り	淡褐色	886
418	8-3	SB3周辺下層	平瓦	4	厚17		弱縦ナデ	粗18	模骨痕	未調整	乳白色	200
419	8-3	SB3周辺下層	平瓦	1	厚22		弱縦ナデ	粗20	模骨痕 布綴じ合わせ目	側縁凹凸面削り	乳白色	596
420	8-3	SB3周辺下層	平瓦	4	厚17		弱縦ナデ	粗16		未調整	乳白色	268
421	8-3	SB3周辺下層	平瓦	8	厚18		弱縦ナデ	密32	模骨痕	—	青灰色	308
422	8-3	SB3周辺下層	平瓦	8	厚26		強横ナデ		平行	—	褐色	150
423	8-3	SB3周辺下層	平瓦	3	厚22		強横ナデ	粗18		狭端凸面削り	乳白色	360
424	8-3	P2	平瓦	2	厚23		強横ナデ		縦強ナデ消し	—	褐色	342
425	8-3	SK1	丸瓦	3	厚18		弱縦ナデ	粗(16)		未調整	乳白色	218
426	8-3	SK1	平瓦	7, 8	厚14	小斜格子4-7	強縦ナデ消し	粗19	模骨痕	側縁凹面削り	灰色	858
427	8-3	SK1	平瓦	2	厚20		強横ナデ	密25	模骨痕	未調整	乳白色	518
428	8-3	SB3周辺上層	丸瓦	4	厚19	平行6	弱横ナデ消し	密31	布綴じ合わせ目	側縁凹面削り	青灰色	150
429	8-3	SB3周辺上層	平瓦	9	厚24		弱横ナデ	密23		側縁凹凸面削り	褐色	444
430	8-3	SB3周辺上層	平瓦	2	厚20		強縦ナデ	粗	縦強ナデ消し	—	褐色	246

凡例

残存部位：丸瓦は凸面を上、平（軒平）瓦は凹面を上にして左上から右下に1～9の数字を付し、残存部位を表した。

法量：厚は瓦の厚みの計測値を指す（計測箇所は任意）

凸面叩き目・凹面布目：平行・縄目叩きは2cmあたりの本数、格子目・斜格子目は1単位あたりの大きさを指す。

凹面布目：2cmあたりの布目の本数を指す。ただし、括弧付きの数値は1cmあたりの本数である。

端部・側縁調整：面取りを行なっている場合、削りとして記載した。

表 12 興道寺廃寺第2～8次調査出土報告瓦一覧表（6）

番号	次数/Tr	出土地点	銭 名	外縁外径	外縁内径	内郭外径	内郭内径	外縁厚	文字面厚	重量	備 考
431	8-3	SB3西辺P2底面	和同開珎	(24.6)	(20.2)	—	—	1.5	0.7	(0.7)	欠損「同」
432	8-3	SB3西辺P2最上面	神功開寶	—	—	—	5.8	1.2	0.8	(0.5)	欠損「開寶」
433	8-3	SB3西辺P3底面	萬年通寶	(26.2)	(22.2)	(7.3)	6.0	1.5	0.9	(0.7)	欠損「萬」？
434	8-3	SB3西辺P2・P3検出面	和同開珎	(24.8)	(21.2)	—	(5.8)	1.3	0.8	(0.6)	欠損「同開」
435	8-3	SB3西辺P2・P3検出面	萬年通寶	—	—	—	—	1.2	0.9	(0.4)	欠損「年」
436	8-3	SB3西辺P2・P3検出面	神功開寶	(27.2)	(24.0)	—	(5.2)	1.3	0.9	(0.8)	欠損「神功」
437	8-3	SB3西辺	和同開珎	23.1	18.0	7.4	6.3	1.2	0.9	1.8	完形
438	8-3	SB3西辺	萬年通寶	26.2	21.2	8.0	6.0	1.5	1.0	2.8	完形
439	8-3	SB3西辺	神功開寶	26.1	21.1	7.9	6.0	1.1	0.7	1.8	完形
440	8-3	SB3西辺	萬年通寶	(27.4)	(22.2)	—	—	1.3	0.9	(0.7)	欠損「萬〇〇寶」
441	8-3	SB3西辺	神功開寶	25.3	20.1	7.5	6.0	1.5	0.7	2.6	完形
442	8-3	SB3西辺	神功開寶	25.0	19.5	7.8	5.6	2.0	1.6	3.4	完形
443	8-3	SB3西辺	不明	(28.1)	(24.7)	—	5.2	1.3	0.6	(0.7)	欠損「寶」
444	8-3	SB3北辺基壇土中	神功開寶	25.1	21.0	7.8	6.3	1.3	1.1	(1.6)	一部欠損

(単位：ミリメートル、グラム)

表 13 興道寺廃寺第8次調査3トレンチ出土銭貨一覧表

## 第3章 高善庵遺跡

### 第1節 遺跡の概要

高善庵遺跡（福井県遺跡番号 30068）は北緯 35 度 35 分 28 秒、東経 135 度 56 分 50 秒付近、福井県三方郡美浜町興道寺小字高善庵、高遠他に所在する。耳川流域左岸、雲谷山（標高 786.6m）から派生する小支尾根先端（標高 70.5m）の東斜面の裾部に遺跡が立地する。遺跡付近から北に向けて河岸段丘面が大きく広がり、獅子塚古墳、興道寺古墳群、興道寺遺跡、興道寺廃寺などの古墳時代後期から律令期の耳川流域を特徴付ける古代遺跡が密に分布する。高善庵遺跡から支尾根を挟んだ西斜面裾部には興道寺窯が所在する。

高善庵遺跡の現況は畑地、水田からなるが、遺跡北西縁部では日吉神社、弥美小学校西分校、西保育所などの建物が建ち、一部で土砂掘削が行われているなど旧地形が大きく変貌している。遺跡の東縁部は段丘崖と接する。

高善庵遺跡の性格について、水野和雄氏は弥美小学校西分校（廃校）、西保育所付近に瓦窯の存在を指摘している（水野 1987）。瓦窯の存在を窺わせる資料として昭和 12（1937）年に小字高善庵から出土したことを墨書する瓦片 4 点が現存する。瓦片発見の経緯は不明であるが、その後、美浜町教育委員会に寄贈あるいは寄託されたようで、現在、町教育委員会が保管している。丸瓦 3 点、平瓦 1 点であり、今回の報告に際して 3 点を図化した（第 110 図）。1 は丸瓦。凸面に平行叩きを施す。暗灰色。2 は隅落とし丸瓦。凸面は側縁に平行する強い縦ナデを施す。凹面には布目とともに糸切り痕を残す。広端、狭端の切断面、側面は未調整。灰色。凸面に「耳村興道寺高善庵出土 昭和十二年十月」と墨書する。ほぼ完形。3 は平瓦。凸面は側縁に平行する強い縦ナデを施す。凹面には一部、模骨痕を残す。焼け歪みが顕著である。凸面に「耳村興道寺高善庵 布目瓦」と墨書する。青灰色。

平成 10（1998）年度に美浜町教育委員会が実施した分布調査において、西保育所北側に広がる畑地（茶畑）から瓦片、底部に高台を有する須恵器杯片を若干採集しており、山裾の畑地に遺跡まで遺跡が展開し、ともすれば瓦窯が所在する可能性が考えられた。

### 第2節 調査の経緯、経過および方法

調査地の地番は福井県三方郡美浜町興道寺 77 号高遠 3 番地 3～6。遺跡の土地改変が進む中、興道寺廃寺に瓦を供給したと目される瓦窯を検出することを調査の目的とした。分布調査で瓦片、須恵器片を採集した緩斜面地の休耕地に 3 箇所のトレンチを設定。トレンチの規模は、1 トレンチ南北 7.1m、東西 4.1m、幅 1.5m、2 トレンチ南北 4.0m、幅 1.5m、3 トレンチ南北 9.9m、幅 1.5m、計 36 m<sup>2</sup>である。

調査は平成 15 年 6 月 23 日から平成 15 年 7 月 18 日まで実施。以下に調査日誌を抄録する。

6 月 23 日 調査機材搬入、調査区設定。6 月 24 日 表土掘削。6 月 26 日 地山面の人力精査。調査図面作成に着手。7 月 2 日 全体写真撮影。7 月 3 日 調査図面作成後、トレンチ埋め戻しに着手。7 月 18 日 調査機材搬出。

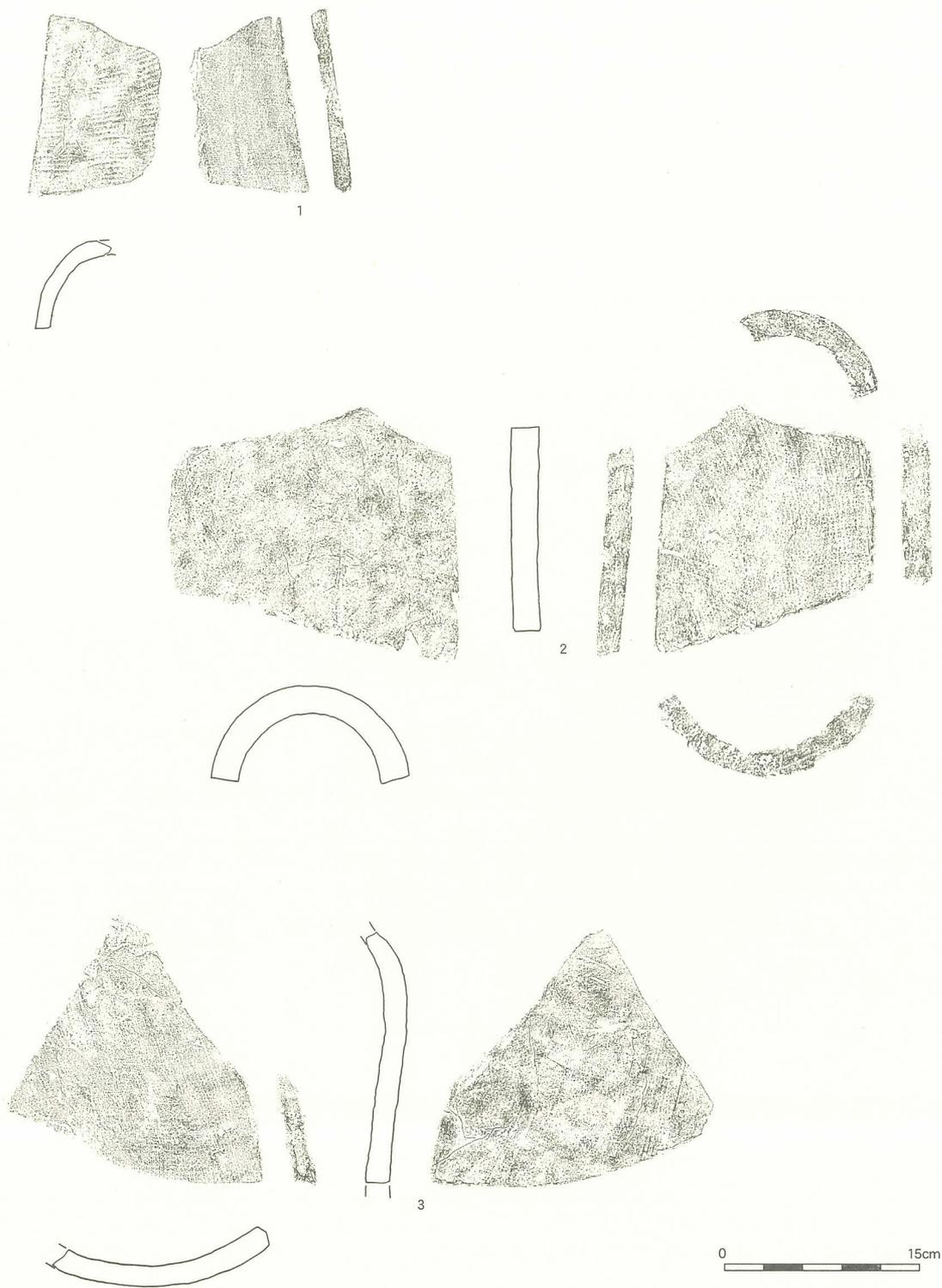
調査区の掘り下げは重機と人力を併用して耕土を除去し、地山面においては人力による精査を実施した。調査区平面図・土層断面図は 1/20 の縮尺で作成した。写真撮影は 35 mmモノクロフィルム、35 mmリバーサルフィルムを使用し、調査の各段階で撮影した。

### 第3節 基本層序

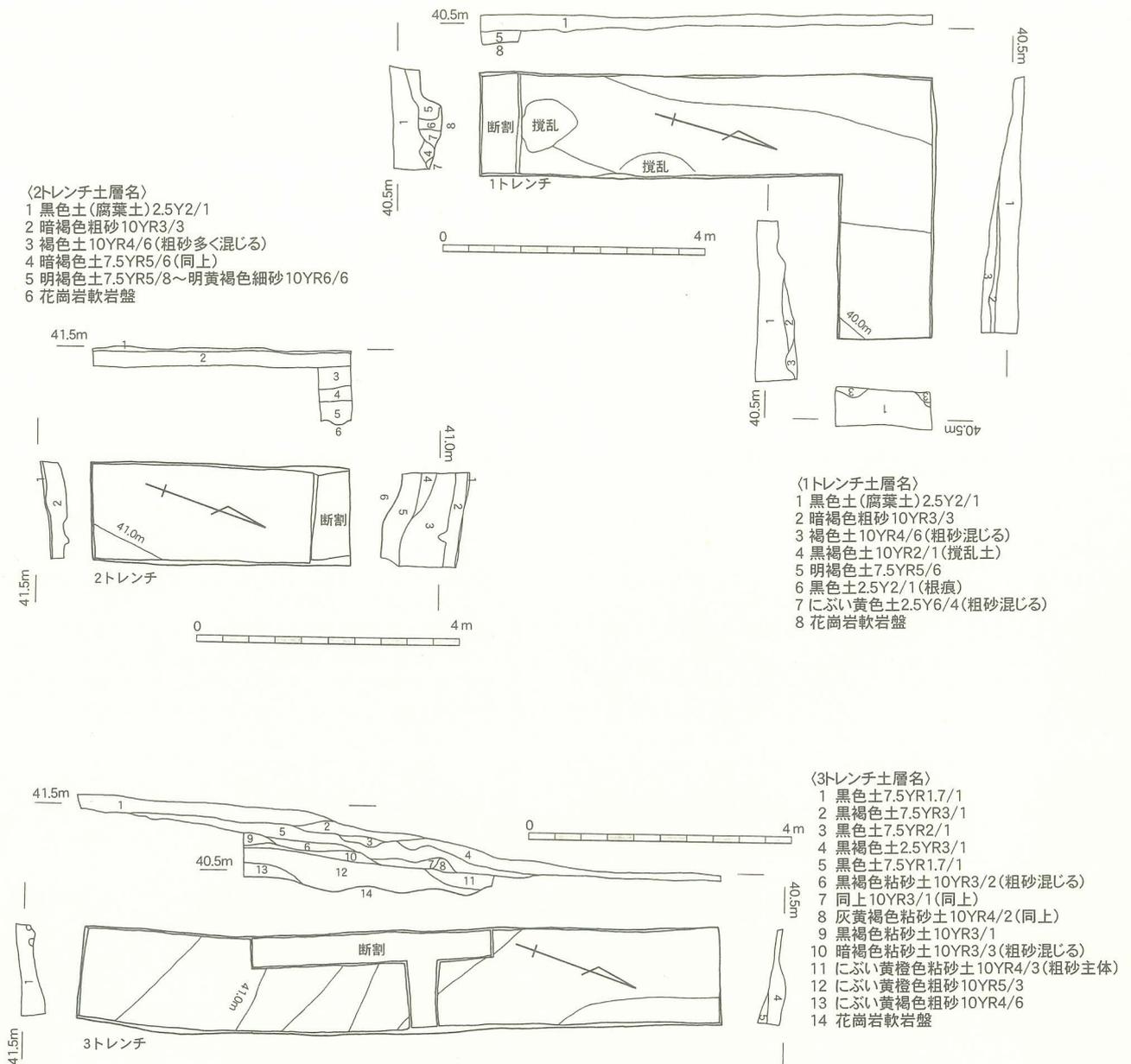
地表面の標高は2トレンチ、3トレンチ南端付近が最高位で41.5m～41.6m、それぞれ1トレンチ、3トレンチ北端に向けて標高を減じ、1トレンチで40.7m前後、3トレンチ北端で約40.5mとなる。上層から耕作土の黒色土（層厚0.05m～0.5m）、層厚0.2m～0.3mの褐色系粗砂、黒色土、黒褐色土の堆積土を経て、1トレンチで標高40.0m～40.4m、2トレンチで標高41.1m～41.2m、3トレンチで標高40.4m～41.4mにおいて明褐色土、褐色土、あるいは黒色系粗砂からなる地山層上面へと至る。各トレンチにおいて断ち割りを行ったところ、層厚0.3m～1.0mの褐色系地山土の堆積を経て花崗岩軟岩盤層へと至る状況を確認した。岩盤層、地山層の傾斜はおおむね現地形の傾斜に沿う。



第109図 高善庵遺跡調査位置図 (縮尺 1/3,000)



第 110 図 伝高善庵遺跡出土瓦実測図 (縮尺 1/5)



第111図 高善庵遺跡調査区平面図・土層断面図(縮尺1/100)

#### 第4節 遺構・遺物

いずれのトレンチにおいても地山層上面において精査を行い、かつ各トレンチにおいて断ち割りを行うことで地山面下の状況確認を行ったが、遺構、遺物ともに確認されていない。

#### 第5節 小結

今回の調査で瓦窯を確認することはできなかった。ただし、本章第1節で報告した昭和12年、小字高善庵出土の瓦は製作技法、胎土が興道寺廃寺出土瓦と酷似しており、また焼け歪んだ平瓦の存在は付近に興道寺廃寺に瓦を供給した瓦窯が存在する可能性を暗示しているものと考えられる。興道寺廃寺とともに今後の計画的、継続的な調査が必要であると思われる。

#### [引用・参考文献]

水野和雄「3 興道廃寺」『北陸の古代寺院 その源流と古瓦』 1987 北陸古瓦研究会

## 第4章 浄土寺古墳群

### 第1節 遺跡の概要

浄土寺古墳群（福井県遺跡番号 30008）は北緯 35 度 42 分 3 秒、東経 134 度 58 分 40 秒付近、福井県三方郡美浜町丹生小字川坂山に位置する。蝸螺ヶ岳（標高 885m）から南西に向けて派生する支尾根先端部（標高 64.2m）から山裾にかけて分布し、1号墳と2号墳、3号墳とはそれぞれ別の支尾根筋に分布する。これまでに確認されている古墳は3基である。

浄土寺古墳群下には小河川、落合川が形成した狭小な沖積地が見られる。落合川河口部の右岸には浄土寺遺跡が所在し、土器包含層から縄文時代前期の豊富な土器群が出土するとともに、弥生時代後期から古墳時代初頭までの土器が出土することが報告されている（松井・古川 1983、山口 1984）。また、古川登氏の御教示によれば、遺跡内の水田面から過去に石棒、石鎌が採集されており、縄文前期、弥生後期の集落が面的に存在した可能性が高い。落合川河口部左岸に海岸線に沿って南北に延びる小浜堤上に古墳時代後



第112図 浄土寺古墳群・浄土寺跡位置図（縮尺 1/3,000）

期から律令期に至る時期と思われる土器製塩遺跡、竹波遺跡が所在する。竹波集落内、田畑から断片的に製塩土器片などが採集されている。

浄土寺跡は浄土寺2号墳、3号墳の西方、支尾根下の山裾から水田面にかけて所在する。

## 第2節 既往の調査

浄土寺古墳群における初めての調査は、昭和52(1977)年、浄土寺1号墳、2号墳の発掘調査である。既往の報告によれば(畠中1986)、昭和51(1976)年6月、建物建築に伴う尾根先端部山裾の削平により1号墳石室が露出した状態で不時発見された。この土取り工事の拡大計画に伴い、美浜町教育委員会から委託を受けた若狭考古学研究会が記録保存のための緊急調査を昭和52年5月に実施している。1号墳調査時に別支尾根上に乱掘された2号墳が確認され、同年6月に石室図化を目的とした調査を実施している。調査後、土取りにより1号墳は消滅したが、2号墳は現状保存された。

その後、平成10・11(1998・1999)年、美浜町教育委員会による町内遺跡分布調査において2号墳に近接する3号墳の存在を確認、2号墳、3号墳周辺にはそれ以外に3箇所の古墳墳丘状の土地隆起が確認された。ただし、今回の調査の結果、3号墳を除いて他の墳丘状施設は自然地形であることが明らかとなっている。この分布調査において3号墳では墳頂部から石室玄室に向けて盗掘坑が掘り込まれ、石室側壁、石棚が一部露頭していることを確認した。併せて、地表面上に側壁構成材と思われる石材が散乱し、盗掘坑からの石室玄室内の観察により石室側壁が内屈している状況を確認している。

浄土寺跡については無縫塔の存在が既に指摘されている(北陸中世考古学研究会編2000)。

## 第3節 調査の経緯、経過および方法

### 第1項 浄土寺2号墳、3号墳の調査前現況

今回の調査に先立ち、平成16(2004)年春に美浜町単独事業において古墳群の現況地形測量を実施した。南南東に向けて緩やかな支尾根が延び、支尾根先端部には送電線鉄塔が設置されている。尾根上の登山道の存在と相まって古墳群の存在は古くから知られていたものと思われる。2号墳背後付近から東南東に向けて、2号墳東方約20m付近まで舌状に小支尾根が派生する。尾根を構成する岩帯は花崗岩である。尾根上の至るところで硬岩盤、軟岩盤が露頭する。

2号墳は現標高39.2~40.4mに、3号墳は現標高37.4~36.8mに、いずれも尾根筋からわずかに東側に逸れ、約26mの距離を持って分布する。3号墳から約10m南西の地点、標高39.0~40.0mの支尾根先端付近において送電線鉄塔建設に伴う土取りを受けた状態で墳丘状の土地隆起が存在する。調査前の段階ではこれを6号墳と扱った。また、2号墳から約20m東方地点の小支尾根先端付近、標高36.6~37.4mにおいても墳丘状の土地隆起が見られ、地表面観察で石室、あるいは墳丘外護列石のように円弧状に廻る石列を構成すると思われる石材の露頭が一部で認められたことから4号墳と扱った。なお、地表面観察から墳丘状の地形の高まりは認められなかったが、古墳構成材と思われる石材が散乱する3号墳南東方約10mの地点、標高34.4~36.8mの部分で5号墳と取り扱っている。



写真13 浄土寺古墳群調査前現況



写真14 浄土寺古墳群調査風景1



写真15 浄土寺古墳群調査風景2



写真16 浄土寺古墳群調査風景3

## 第2項 調査の経緯と経過

今回の浄土寺古墳群の調査は、昭和52年の2号墳調査以後、古墳群の荒廃が進んだことに起因する。石柵を有する横穴式石室墳である2号墳の存在は、昭和52年調査以後、石柵研究対象として広く知られ、また分布調査によって3号墳においても横穴式石室に石柵が架設されることが判明するなど、古墳群の価値は高いと言える。反面、2号墳は昭和52年調査以後、石室を見学可能とするための配慮としてか、墳丘・石室に対する埋め戻しなどの保護措置が講じられずに現状保存され、現在に至っており、墳丘土の流失、石室側壁の一部崩落を招いていた。また3号墳については既に盗掘を受け、石室側壁が内屈するなど、古墳の遺存度は良好ではなく、いずれ崩落する可能性が考えられた。

今後、さらに古墳群の自然荒廃が進むことが憂慮されたことから3号墳を含めた古墳群の環境維持は不可欠であるものと判断し、平成16・17(2004・2005)年に文化庁、福井県教育庁文化課など関係機関の指導のもと、美浜町教育委員会が内容確認調査を実施した。

調査地の地番は福井県三方郡美浜町丹生19号中浄土7番地、66号川坂山5番地1・20。古墳群全体の調査面積は190㎡である。

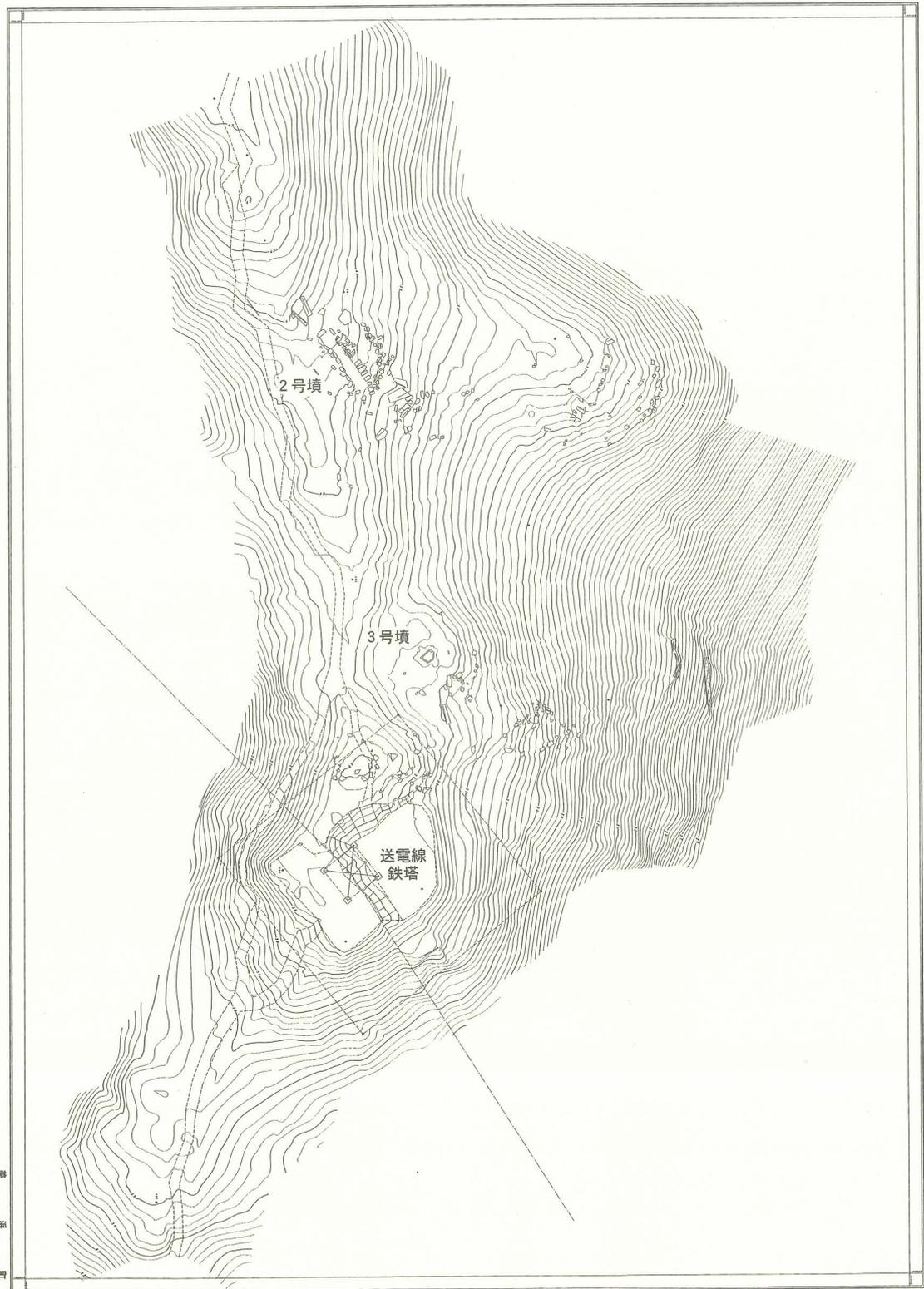
調査は平成16年8月23日から平成17年2月20日まで(3号墳等調査)と平成17年8月22日から平成17年11月18日まで(2号墳等調査)実施した。以下に調査日誌を抄録する。

### (3号墳等調査)

8月23日 調査機材搬入、調査区設定。8月24日 表土の人力掘削に着手。3号墳墳丘外護列石・石室奥壁の一部を検出。8月25日 3号墳石室側壁の一部を検出。8月26日 3号墳墳丘全体の検出に本格的に着手する。8月27日 3号墳外護列石の伸張を確認。8月30日 3号墳西方、1～3トレンチにおいて墳丘状土地隆起が花崗岩風化層であることを確認。9月1日 3号墳石室石柵の一部を検出する。9月2日 3号墳石室盗掘坑を確認。9月3日 畠中清隆氏(県埋蔵文化財調査センター)来跡。9月6日 3号墳墳丘を全検出し、調査図面作成に着手する。9月7日 中司照世氏(県埋蔵文化財調査センター)、川村俊彦氏(敦賀市教育委員会文化課)来跡。9月10日 3号墳石室開口部付近で須恵器杯G1点が出土。9月16日 3号墳石室平面プランを検出。9月17日 3号墳墳丘外護列石付近から須恵器杯が散らばって出土する。9月21日 3号墳外護列石全体を検出。9月27日～ 調査担当者、奈良文化財研究所研修のため調査休止(～10月6日)。10月12日 3号墳石室埋土の掘削に着手。崩落天井石を除去。10月16日 3号墳墳丘の一部を断ち切る。10月19日～ 台風23号接近。調査休止。10月25日 3号墳石室開口部にて須恵器杯1点、杯蓋1点が出土。10月27日 3号墳石室羨道部にて須恵器杯G2点が出土。10月28日 3号墳石室床面精査に着手。11月1日 3号墳石室図面作成に着手(～11月8日)。11月15日 3号墳墳丘測量および調査区関係図面作成に本格的に着手(～11月29日)。植野浩三氏(奈良大学文学部文化財学科)、中司照世氏(県埋蔵文化財調査センター)来跡。11月27日 発掘調査現地説明会。11月28日 歴史シンポジウム「浄土寺古墳群を考える」開催。11月31日 調査機材一部搬出。12月1日～ 興道寺廃寺第5次調査実施のため調査休止(～12月28日)。1月5日 3号墳墳丘背後において周溝状の溝を検出。土師器杯1点が出土。1月14日 2号墳全体写真撮影。1月17日～ 調査図面補足。1月26日 埋め戻し準備を進める。1月31日 調査区埋め戻しに入る(～2月23日)。2月20日 2日間で調査機材を搬出する。

### (2号墳等調査)

8月22日 調査機材搬入、調査区設定。8月23日 古墳群地表面観察。8月24日 2号墳墳丘上3箇所堆積土を除去



第113図 浄土寺古墳群調査前現況地形測量図 (縮尺1/500)



第114図 浄土寺古墳群調査位置図 (縮尺 1/200)

したところ、昭和52年調査排土から土師器杯1点が出土。2号墳東方、4～6トレンチを設定し、表土掘削。土師器甕片がまとまって出土。石室確認には至らず。8月25日～調査図面作成に着手。4～6トレンチにおいて墳丘状土地隆起が自然地形であることを確認。8月29日～2号墳墳丘・外護列石の精査、2号墳石室図化に着手。8月30日～本格的に石室図化を進める（～9月9日）。墳丘図化を並行して進める。9月2日～4～6トレンチの図化に入る。9月6日4トレンチ出土の土師器甕取り上げ。9月12日2号墳墳丘背後にて須恵器杯G1点、製塩土器2点が出土。9月13日2号墳墳丘背後にて周溝状の溝を検出。4～6トレンチを埋め戻す。9月20日墳丘の全体写真撮影。墳丘立面図作成に着手。9月21日2号墳墳丘背後の調査区を拡張する。御嶽貞義氏（県埋蔵文化財調査センター）ら3名来跡。9月22日2号墳墳丘背後にて土師器小甕1点出土。9月26日墳丘背後の遺物出土状況写真撮影。9月27日墳丘外護列石写真撮影。9月28日土井孝則氏（亀岡市教育委員会）、諫早直人氏（京都大学大学院）ら来跡。10月3日2号墳全体写真撮影。石室実測図補足。10月6日2号墳墳丘断ち割り。中司照世氏（県埋蔵文化財調査センター）来跡。10月7日記者発表。墳丘背後出土遺物の取り上げ。10月11日石室床面・墳丘背後断ち割り。並行して写真撮影、平断面図化を進める。10月18日調査図補足、10月19日排土をふるいにかき、未採集遺物を確認しながら調査区を埋め戻し（～11月18日）。10月24日～教育委員会行事などのため調査休止（～11月11日）

### 第3項 調査の方針と方法

浄土寺古墳群は遺跡の性格上、地表面観察によってその規模、構造は比較的明らかであった。このことから古墳群内の各古墳の構造差、時期差などを明らかにすることを調査の目的に置き、記録化を図り、調査後の古墳群の保護措置を執ることで将来的な史跡指定に備えることも副次的な目的とした。

2号墳は昭和52年に既に調査されているが、当時の調査対象が石室であったことから墳丘構造についてはさほど明らかにされていない。このことから2号墳調査は墳丘構造の把握を主眼に置き、基本的に墳丘を覆うように86.2㎡の調査区を設定した。一部、土層観察用畦として未掘部分を設けている。併せて石室壁面の清掃、石室床面の再精査、昭和52年調査以後の石室の損傷有無を確認するために石室の再実測を行った。3号墳においては調査対象を墳丘、横穴式石室としたため、2号墳と同様に墳丘を覆うように70.4㎡の調査区を設定し、土層観察用畦を残している。石室は玄室部分が既に盗掘を受け、開口していたことから床面精査を行うとともに、羨道部については堆積土を除去の上、床面精査を行った。後述するが石室羨道部は全体的に西側、つまり谷に向かって側壁が傾いており、右側壁上半が崩落する可能性もあったことから一部、未掘部分を設けている。

墳丘は2号墳、3号墳ともに一部、断ち割りを行うことで墳丘構成の様相確認を行うとともに、墳丘外においては岩盤面と古墳基底面とのレベル差を確認するために地山層をさらに断ち割った。

これ以外に前述のとおり、小支尾根先端部の4号墳と扱った地点に尾根筋と直交、平行するトレンチを設定、調査の状況により適時拡張して調査を進めた。4トレンチ13.6㎡、5トレンチ9.6㎡、6トレンチ1.4㎡、計24.6㎡の調査面積である。また、2号墳南東方約13m地点においては2号墳へと至る墓道の検出を目的として尾根の傾斜に直交するトレンチ（7トレンチ、調査面積1.6㎡）を設けた。さらに支尾根上先端部、3号墳の南西約10m付近の6号墳と扱った地点では支尾根の傾斜に平行、直行するトレンチを配している。1トレンチ2.3㎡、2トレンチ2.3㎡、3トレンチ2.9㎡、計7.5㎡の調査面積である。

表土、堆積土の除去、墳丘、石室の精査など、全ての作業は人力で行った。調査区平面図・土層断面図は1/20の縮尺で作成し、石室実測図（平面・立面・断面図など）、遺物出土状況図は1/10の縮尺で作成した。写真撮影は35mmモノクロフィルム、35mmリバーサルフィルムを使用し、調査の各段階で撮影した。

### 第4項 報告に関する留意点

遺構報告に関しては、現地調査において方位は全て磁北を使用したため、本章収録遺構図の方位は磁北を指す。ただし、第113図、第114図の方位は真北を示している。

既述のとおり浄土寺1号墳、2号墳は昭和52年に発掘調査が実施されている。この調査に関する正式

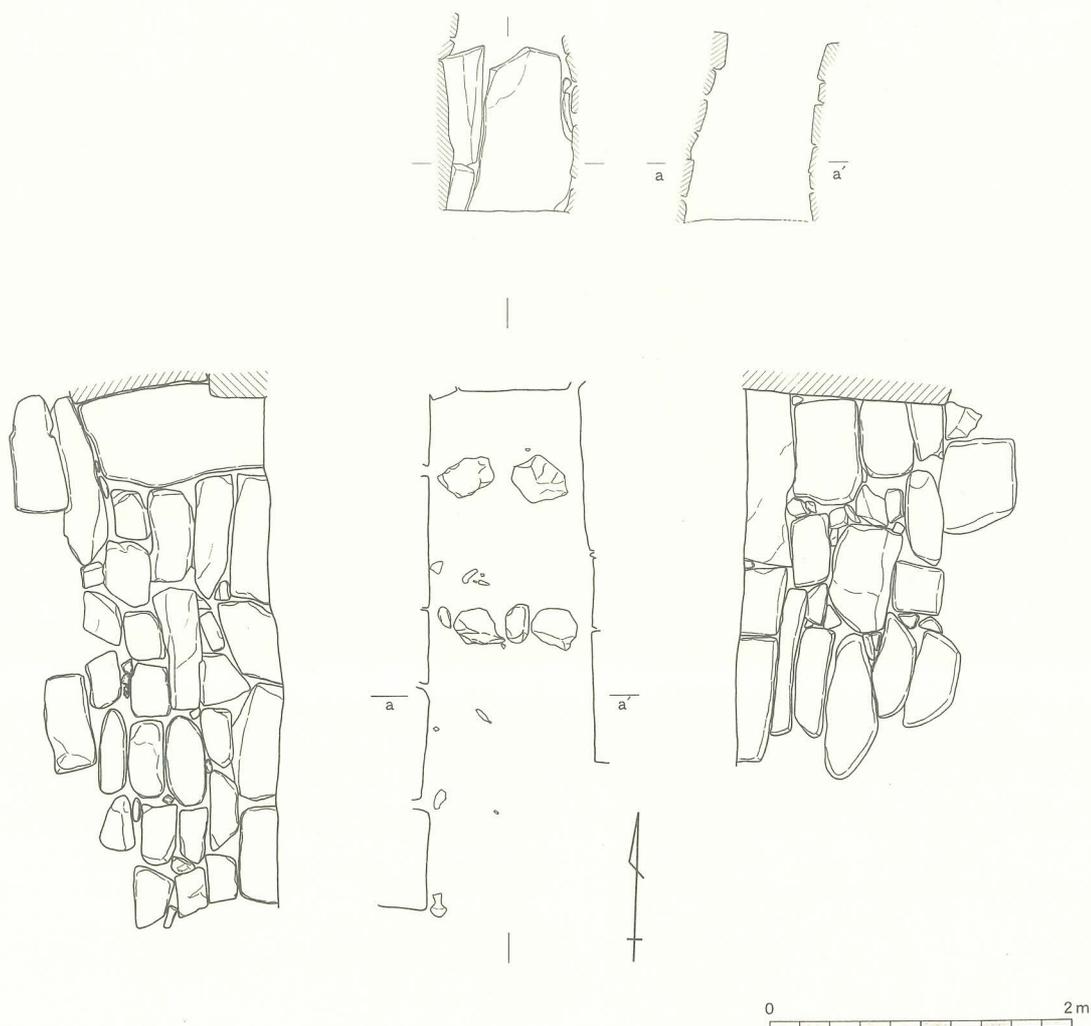
な発掘調査報告書は未刊行となっているが、調査結果については周辺地形測量図、浄土寺1号墳、2号墳石室実測図、浄土寺遺跡調査内容を付して若狭考古学研究会会長、上野晃氏から美浜町教育委員会教育長に対して昭和52年7月18日付けで中間報告という形で提出されている。また、出土遺物については調査後、美浜町教育委員会に提出されたようで現在、町教育委員会で保管している。今回の報告に際して、昭和52年調査出土遺物を図化し、浄土寺1号墳石室実測図と併せて本章に収録した。なお、調査資料の公表に際しては実際に調査を実施された若狭考古学研究会会長、上野晃氏の御快諾を賜ったことを付記する。

#### 第4節 浄土寺1号墳

若狭考古学研究会から提出された中間報告および既報告（畠中 1986）、町教育委員会に保存されている調査記録などに基づき、昭和52年に調査が行なわれた浄土寺1号墳の調査内容を概述する。

調査段階には既に墳丘の大半が失われており、墳形、規模は不明。

石室は横穴式石室で、現存長3.4m、幅1.0m、高さ1.7m。平面形は無袖式となるものと思われる。床



第115図 浄土寺1号墳石室実測図（縮尺1/50）

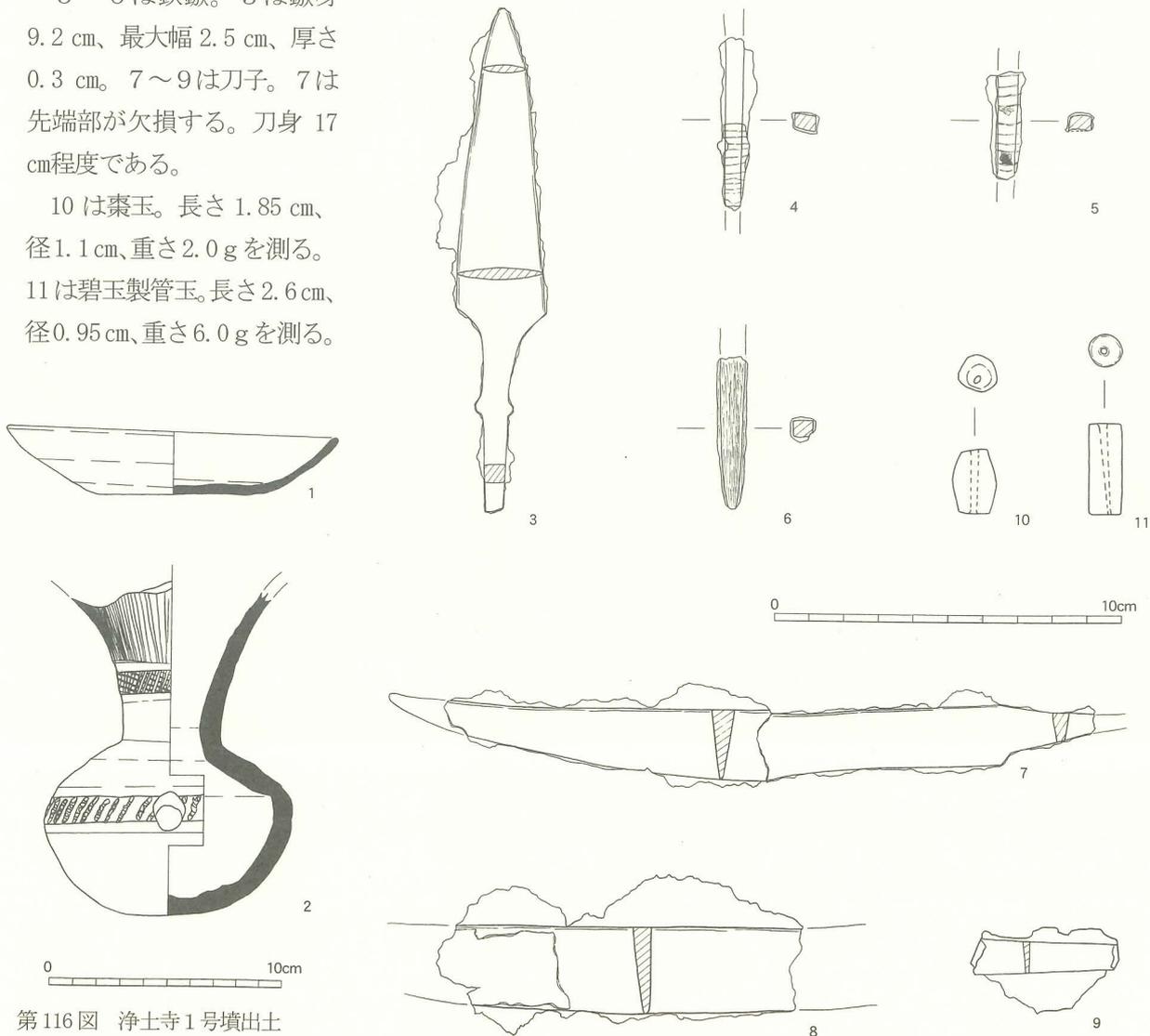
面には棺台とされる人頭大礫が奥壁寄りに2石、開口部寄りに3石平行に配置される。石室壁面は、奥壁は1石を鏡石状に配し、天井石までの隙間に小石材を充填することで構成する。両側壁では、右側壁の最奥壁寄りで長辺1.2m、短辺0.65mの石材を縦位に配し、それ以外の部分では長辺0.8m、短辺0.4mほどの石材を横位に平積みすることで基底石とする。両側壁基底石上部には長辺0.6m、短辺0.35mほどの石材を最高6段目まで明確に目地を揃えながら横長手積みすることで構成する。調査段階には既に天井石、開口部が失われていた。

石室内からは須恵器壺1点、椀1点、鉄鏃1点、刀子1点、棗玉1点、管玉1点が散在した状況で出土した。ただし、2号墳からも鉄器片4点が出土したとされ、現存資料に1号墳、2号墳のどちらに帰属するか不明な遺物があるため、鉄製品については1・2号墳出土鉄器として報告する。

1は須恵器椀。口径14.3cm、器高2.9cm、底径6.4cm。口縁部に歪みがあるため、口径、器高の数値には若干の幅がある。底部外面はヘラ切り後、未調整である。2は須恵器壺。口縁部が欠損する。残存高14.3cm、体部径10.6cm。頸部外面上半に放射線文、中位に細かい刺突文を施し、その上下に浅い沈線を巡らす。体部は中位が最大径となる球状を呈し、底部は丸底となる。体部下半に回転ヘラ削りを施す。

3～6は鉄鏃。3は鏃身9.2cm、最大幅2.5cm、厚さ0.3cm。7～9は刀子。7は先端部が欠損する。刀身17cm程度である。

10は棗玉。長さ1.85cm、径1.1cm、重さ2.0gを測る。11は碧玉製管玉。長さ2.6cm、径0.95cm、重さ6.0gを測る。



第116図 浄土寺1号墳出土  
土器実測図 (縮尺1/3)

第117図 浄土寺1号墳・2号墳出土鉄器・玉実測図 (縮尺1/2)

## 第5節 浄土寺2号墳

### 第1項 立地と墳丘

2号墳は南南西に延びる支尾根からわずかに東側に逸れた地点に位置する。

墳丘規模は石室主軸方向 7.4m、石室直交方向 6.8mを測る円墳である。墳丘外護列石と墳丘背後の岩盤掘削による周溝状施設を墳丘外部施設に持つ。昭和52年調査段階の所見として「2号墳は尾根の稜線上から幾分東へずれた位置に、南側と東側の斜面を削ることによって墳丘とし、墳丘裾には羨道部両側壁から連続して外護列石を巡らせているが、流出が激しく墳形は明らかでない。ただし、円形を呈していたならば、直径7m程度である。」(島中1986)と報告されており、今回の調査内容と大過はない。墳丘裾部の標高は、石室開口部付近で39.0m、墳丘東裾部が39.5m前後、墳丘西裾部が40.3m前後、墳頂検出レベルで40.5mである。墳丘の高さは検出高で石室開口部から約1.5mを測るが、石室奥壁2段目石材の上端に天井石が架けられ、さらに盛土されたものと考えれば2.0m前後であったものと推測される。

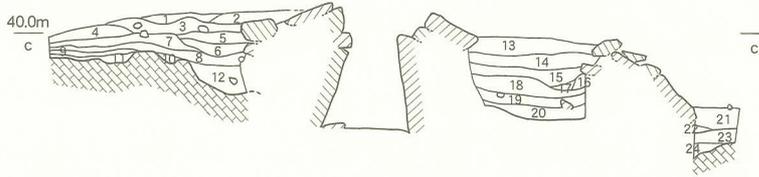
石室開口部から連続して直線的に左右に展開する墳丘外護列石は墳丘基底部に載せるように墳丘裾部から約0.2m浮いた状態で石積みを伴わずに石列状に伸張する。使用石材は長辺0.3~0.4mの花崗岩自然礫である。開口部東側では列石上端の標高が39.4~39.5mであることに對して、墳丘西側では標高39.8mとレベル差が見られる。墳丘東側の裾部が地山土、岩盤の削り出しによって比較的水平面が確保されていることに對して、西側の裾部では自然傾斜を持つ地山土に墳丘土を覆っていることに起因するものと考えられる。この開口部から続く外護列石は、墳丘東側ではさらに平面形がやや直線的な弧状を呈して、墳丘背後、石室開口部から4.4mの地点まで伸張する。この東側の外護列石は、長辺0.7m、短辺0.5mほどの大石材を墳丘に沿って立て掛けるように縦位に平積みすることで基底石とし、2、3段目には長辺0.4m、短辺0.2mほどの石材を横位に長手積みすることで構築する。使用石材は花崗岩岩盤から切り出した自然礫を未加工のまま使用している。墳丘東側の外護列石は墳丘正面から見える範囲において基底石上端レベルを標高39.6m付近に揃え、目地が通る。ただし、この基底石上端レベルは墳丘背後に至ると最高で標高40.0mとなる。使用石材の法量や基底石を縦位に用いる点は後述する石室側壁の立面構成と共通する。墳丘東側では堅固な外護列石を伴う墳丘裾部を形成することで墳丘土の流出を防いだものと思われる。

一方、墳丘西側は支尾根上にあり、墳丘土も流失していることから尾根筋と墳丘頂部との標高差はほとんど見られない。元来は尾根上に直接、墳丘土を被せることで墳丘裾部を形成したものと考えられる。

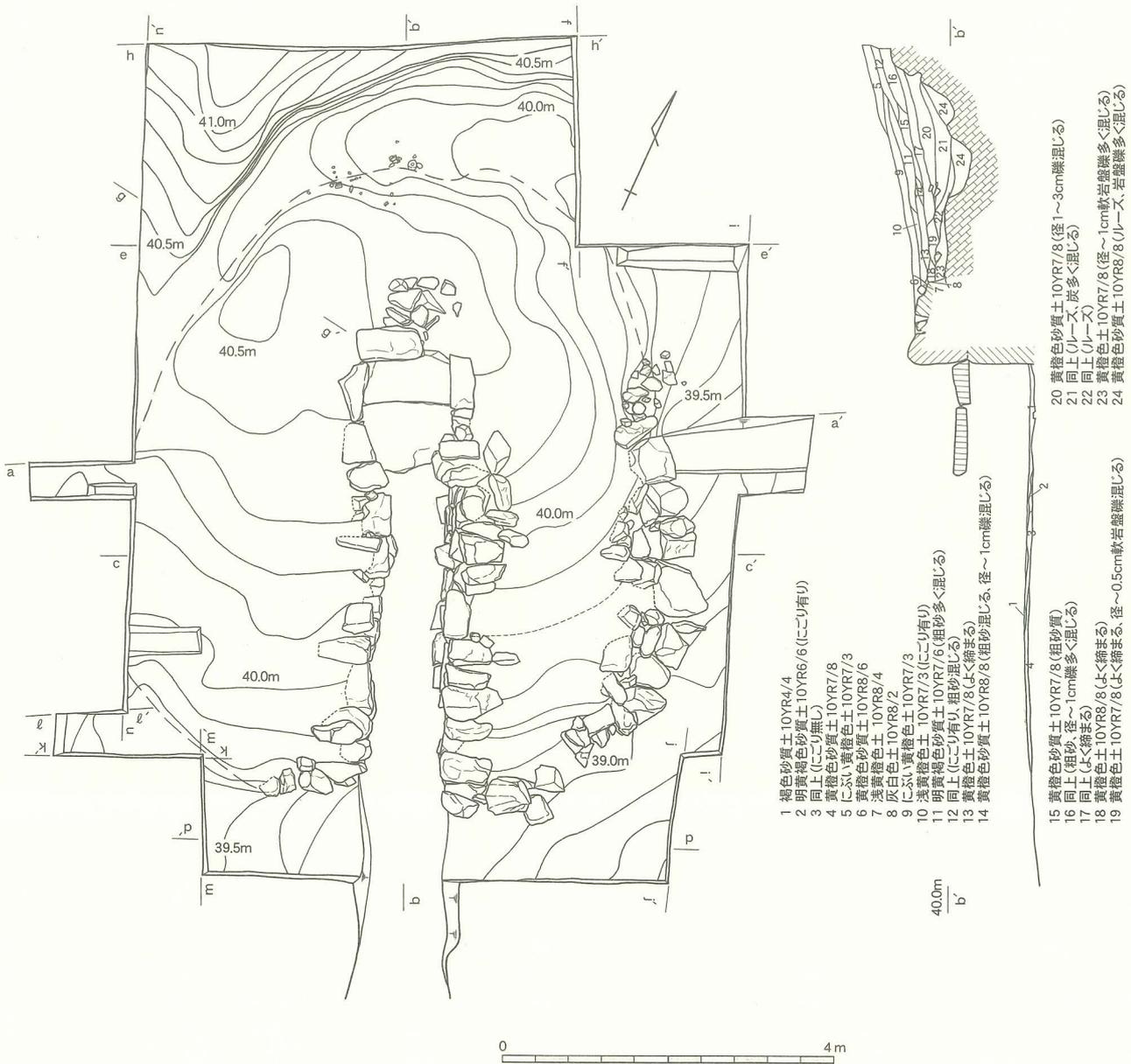
墳丘背後では、墳丘東側の外護列石が途切れる付近から墳丘西側の支尾根に至るまで墳丘裾部に沿って周溝状に溝を掘削する。平面形は円弧状を呈する。この溝は墳丘背後、標高40.6m付近から地山土を掘り込み、標高40.0m~40.3mにおいて幅1.0mほどの緩やかな平坦面をなした後、墳丘裾部に至る。外護列石に代わる墳丘区画施設となっている。

墳丘土の構成を把握する上で、墳丘の一部を縦断、横断に断ち割り、土層観察を行った。墳丘は径2cmほどの小礫が部分的に混じる黄橙色、明黄褐色の砂質土を基本的に0.1cm前後の厚みを1単位として水平に盛ることで構築する。墳丘西側では墳丘土の叩き締めが見られないことに對して、墳丘東側では総じて墳丘土がよく締まり、墳丘外護列石の構築と関わる叩き締めがされたものと考えられる。墳丘土は地山土、岩盤を掘削した残土をそのまま利用したものと考えられる。

墳丘構築に際しては、墳丘西側では尾根上の地山土、岩盤を標高39.8mまで水平に削り出す。さらに石室主軸から約1.9m付近から石室床面に向けて一段深く、不定形なスロープ状に岩盤を掘削する。墳丘背後においては地山土、岩盤を溝状に掘削し、その内側に意図的に岩盤を水平に掘り残した部分に盛土を行うことで墳丘裾部を造り出し、さらに石室奥壁の背後から石室床面に向かって岩盤を深く掘削する。墳丘東側、背後に見られる一段深くなる岩盤掘削は石室掘り方、あるいは墓坑を意識したものと思われる。

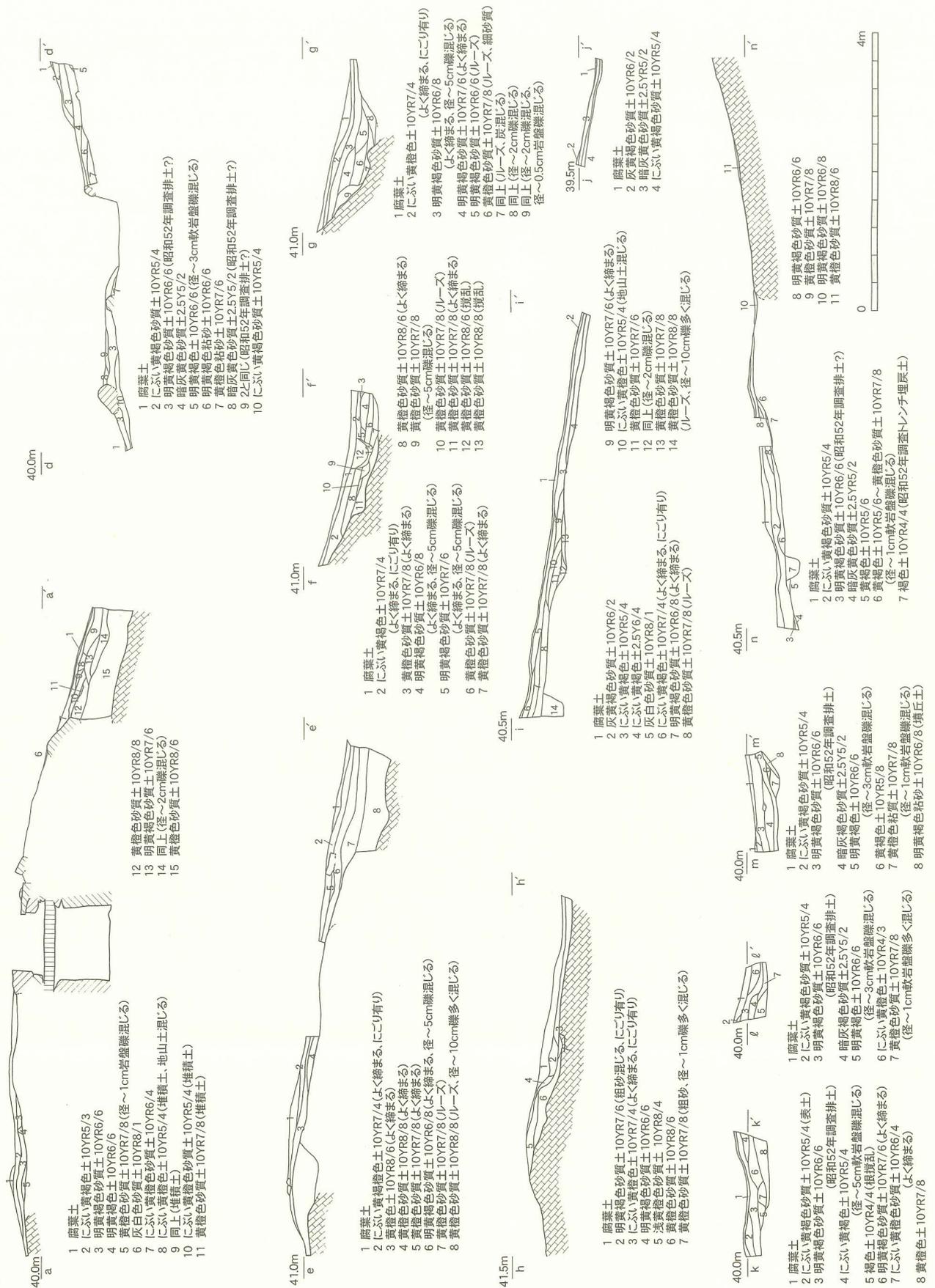


- 1 明黄褐色砂質土 10YR7/6(よく締まる、径~0.5cm岩盤混じる)
- 2 黄橙色砂質土 10YR7/8(よく締まる、径~0.5cm岩盤混じる、炭混じる)
- 3 同上(ルース、径~10cm礫混じる)
- 4 明黄褐色砂質土 10YR6/8(よく締まる)
- 5 黄橙色砂質土 10YR7/8(粗砂ベース、ルース、炭混じる)
- 6 同上(ルース、炭混じる)
- 7 明黄褐色砂質土 10YR6/8(ルース、径~2cm礫多く混じる)
- 8 同上(粗砂ベース、ルース)
- 9 同上(ルース、径~1cm礫多く混じる)
- 10 黄橙色砂質土 10YR7/8(よく締まる)
- 11 明黄褐色砂質土 10YR6/8(締まる、径~2cm礫多く混じる)
- 12 黄橙色砂質土 10YR7/8(ルース)
- 13 黄橙色砂質土 10YR8/8(よく締まる、径~2cm礫多く混じる、炭混じる)
- 14 黄橙色砂質土 10YR7/8(よく締まる)
- 15 黄橙色砂質土 10YR8/8(よく締まる、径~2cm礫多く混じる)
- 16 同上(よく締まる、径~1cm礫混じる)
- 17 黄橙色砂質土 10YR7/8(よく締まる)
- 18 同上(よく締まる、細砂ベース)
- 19 同上(よく締まる、細砂ベース、18より締まる)
- 20 黄橙色細砂 10YR8/6(よく締まる)
- 21 黄橙色砂質土 10YR7/8(やや締まる、径~5cm礫混じる、径~0.5cm岩盤多く混じる、径~1cm礫多く混じる、炭混じる)
- 22 黄橙色砂質土 10YR8/8(ルース、炭混じる)
- 23 同上(地山土)
- 24 同上(やや締まる、地山土)



- 1 褐色砂質土 10YR4/4
- 2 明黄褐色砂質土 10YR6/6(にこり有り)
- 3 同上(にこり無し)
- 4 黄橙色砂質土 10YR7/8
- 5 にぶい黄褐色土 10YR7/3
- 6 黄褐色砂質土 10YR8/6
- 7 黄褐色土 10YR8/4
- 8 灰白色土 10YR8/2
- 9 にぶい黄褐色土 10YR7/3
- 10 淡黄褐色土 10YR7/3(にこり有り)
- 11 明黄褐色砂質土 10YR7/6(粗砂多く混じる)
- 12 同上(にこり有り、粗砂混じる)
- 13 黄褐色土 10YR7/8(よく締まる)
- 14 黄褐色砂質土 10YR8/8(粗砂混じる、径~1cm礫混じる)
- 15 黄褐色砂質土 10YR7/8(粗砂質)
- 16 同上(粗砂、径~1cm礫多く混じる)
- 17 同上(よく締まる)
- 18 黄褐色土 10YR8/8(よく締まる)
- 19 黄褐色土 10YR7/8(よく締まる、径~0.5cm軟岩盤混じる)
- 20 黄褐色砂質土 10YR7/8(径1~3cm礫混じる)
- 21 同上(ルース、炭多く混じる)
- 22 同上(ルース)
- 23 黄褐色土 10YR7/8(径~1cm軟岩盤多く混じる)
- 24 黄褐色砂質土 10YR8/8(ルース、岩盤多く混じる)

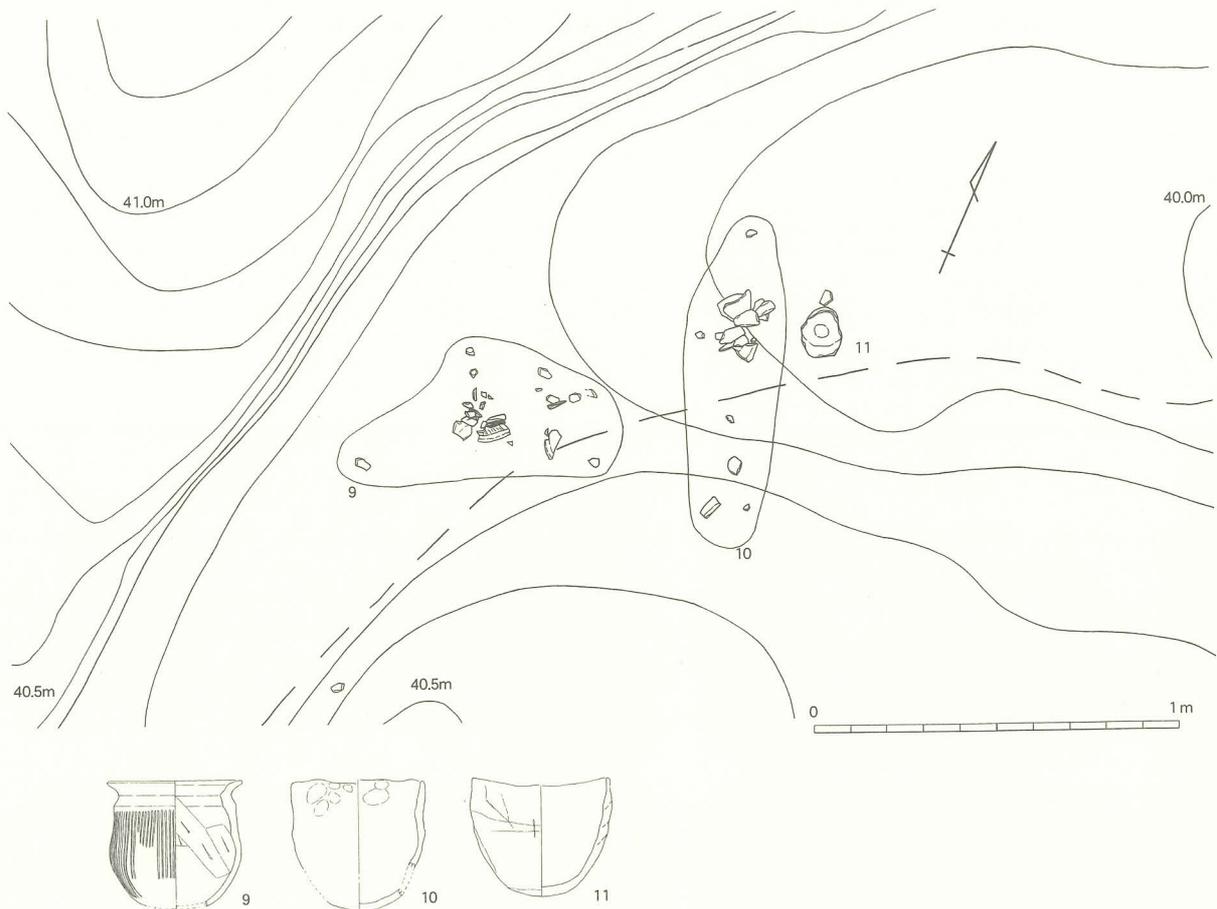
第 118 図 浄土寺 2 号墳調査区平面図・土層断面図 (縮尺 1/80)



第119図 浄土寺2号墳土層断面図 (縮尺1/80)



第120図 浄土寺2号墳立面図 (縮尺 1/40)



第121図 浄土寺2号墳墳丘背後遺物出土状況図（縮尺1/20）

一方、石室床面部分から墳丘東側全面にかけては岩盤、地山土を水平に掘削し、標高38.0m付近に平坦面を造り出す。このため石室床面岩盤レベルと墳丘東側の外護列石基底石の底面レベルとは同標高を維持する。

墳丘背後、墳丘裾部から溝の底面にかけて須恵器杯G蓋1点、土師器甕1点、製塩土器2点が破片の状態で散らばって出土した。土師器甕、製塩土器は墳丘上に据え置かれたものが転落、破損し埋没した出土状況を示しており、墳丘上で祭祀が行われたことを示唆する。また古墳に伴うものではないが、調査区北側、表土直下から石鏃1点が出土した。

## 第2項 埋葬施設

玄室内に石柵を架設する両袖式の横穴式石室である。石室側壁は玄室前方部から開口部の範囲において東側、つまり谷に向かって側壁が若干傾いている。

石室は南から29度東偏する南北に主軸を持つ。石室の規模は全長5.6m。玄室の規模は玄室長2.1m、玄室幅は奥壁付近1.06m、玄門付近1.14m、袖部幅0.88mを測る。羨道部の規模は羨道長3.2m、羨道幅は玄門付近1.06m、開口部付近1.04mを測る。使用石材は全て花崗岩である。石室の平面形は玄門部の両側に長辺0.8m、短辺0.35mほどの石材を縦位に配し、内側に突出させることで袖部を形成するが、玄室幅と羨道部幅はさほど変わらないことから、立柱石のみでもって袖部を構成する擬似両袖と言えるものである。昭和52年調査以後、既に石室床面は流失、岩盤面が露出し、かつ側壁基底石の根固石が確認できる

状況であった。根固石は長辺 0.4m、短辺 0.2m前後の扁平な角礫を側壁基底石底部と基底石掘り方との間に直線状に詰め込まれる。

玄室の高さは床面から奥壁上端で 1.5m、羨道部の高さは玄門部付近で床面から 1.1mを測り、天井部は奥壁高（標高 40.5m）が羨道部最高位（標高 40.1m）より高いことから、羨道部がわずかに低くなる天井部を有していたものと考えられる。

石室壁面は、奥壁は2石からなり、基底石は長辺 1.0m、短辺 0.8mの石材を横位に配し、その上部に長辺 0.8m、短辺 0.7mの石材を同じく横位に平積みすることで構成する。奥壁断面は直立し、持ち送りは見られない。両側壁では基底石として長辺 0.6~0.8m、短辺 0.4~0.7mの石材を縦位に配するが、玄室内の石棚が架設される部分では長辺 0.8mほどの大型の石材を基底石として縦位に配置する。この基底石の上端レベルは標高 39.8mに揃えており、石棚を水平に架設するために使用石材がある程度規格的に選別されたものと考えられる。それ以外の基底石上端レベルは標高 39.6m付近で目地が通る。玄室基底石の表面は切り石状に平滑に調整されており、石材の切り出し後、二次加工が施されたものと考えられる。側壁基底石の上部には長辺 0.3~0.5m、短辺 0.2~0.4mと法量差がある自然礫を石棚架設部分では奥に控えを取らずに横位に平積みし、玄室前方部から羨道部においては横長手積み、小口積みする。側壁断面は玄室石棚架設部分で直立を保つことに対して、玄室前方部および羨道部では内傾する。

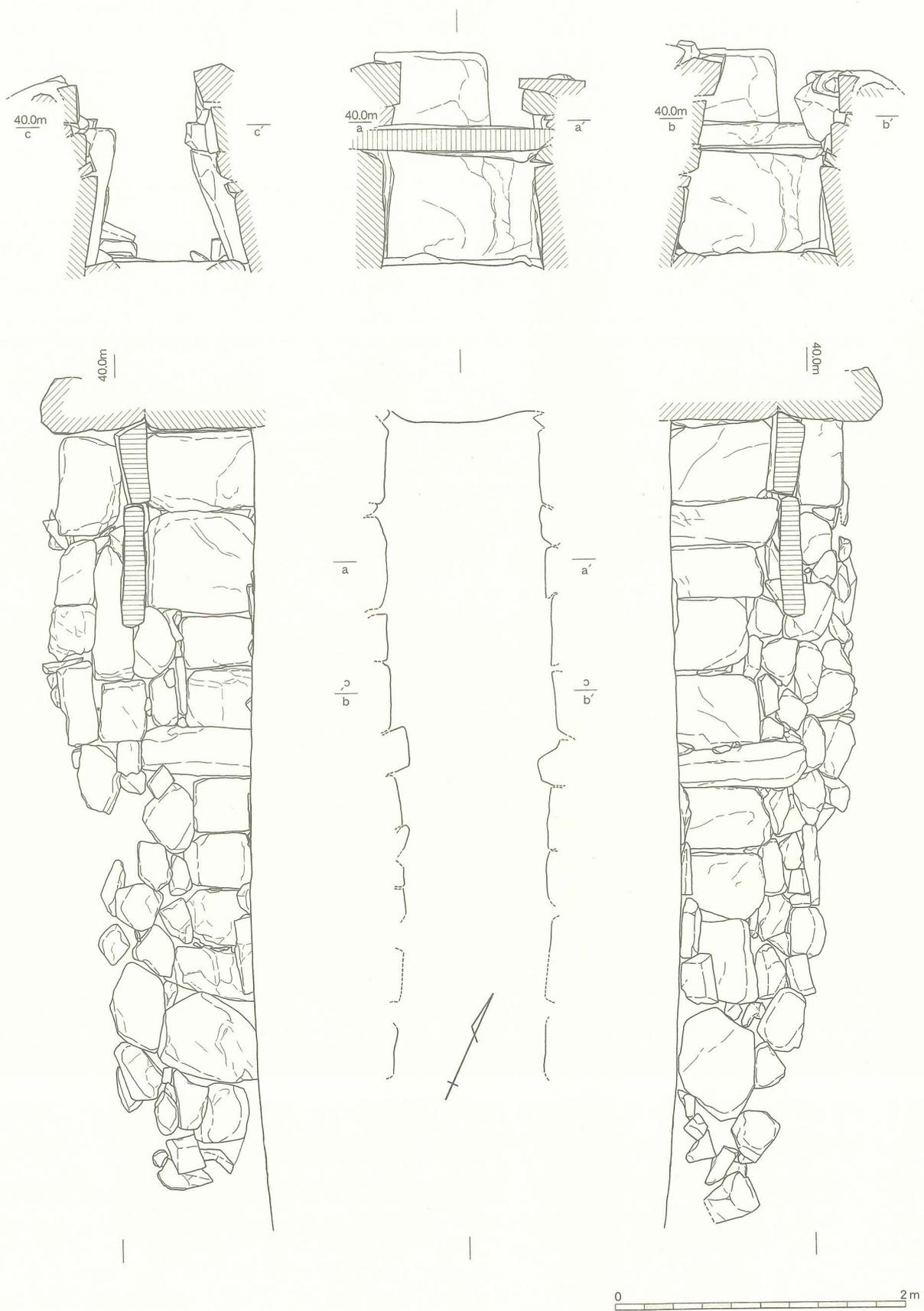
石棚は2枚の板状石材を玄室後方部、側壁基底石上面に直接載せることでほぼ水平に架設するが、奥側の石棚が奥壁基底石上面に若干掛かるため、わずかに傾く。石棚が架設される範囲は奥壁壁面から石棚先端部までで 1.4mに及ぶ。石棚石材の厚さは 0.15~0.2mであり、玄室の高さが 1.5mであることから、石棚下で高さ 0.8m、石棚上では高さ 0.6mの空間となる。

奥壁基底石上端、石棚を支える側壁基底石上端、玄門立柱石上端、そして石棚下面レベルが標高 39.8m付近で概ね一致する。このレベルに合わせるように石材を選別・配置し、水平に石棚を架設したものと考えられる。

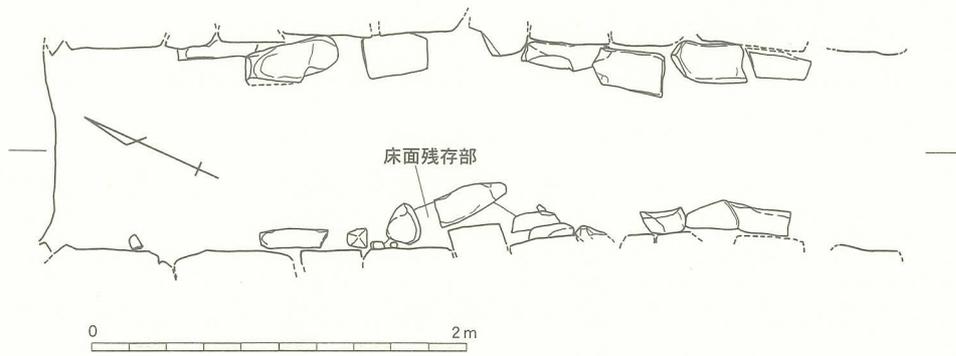
### 第3項 出土遺物

昭和 52 年の調査時に閉塞石下から須恵器 3 点（1・2・5）、調査排土から須恵器片数点（3・4・6・7）が出土している。なお 1・2・5 は既報告資料である（畠中 1986）。1~4 は須恵器杯 G 蓋、5~7 は須恵器杯 G。1 は口径 8.8 cm、器高 3.2 cm、受け部径 10.5 cm。2 は口径 8.7 cm、器高 3.0 cm、受け部径 10.4 cm。1・2 は宝珠つまみを有し、かえりは受け部より下に突出する。天井部外面に回転ヘラ削り、口縁部外面に回転ナデを施す。3 は口縁部を欠損するが 1・2 と同形態である。4 は復元径 10.2 cm。かえりは短く収めて、受け部の下に突出しない。5 は口径 9.3 cm、器高 3.9 cm。口径が小さく器高が深い。底部外面は回転ヘラ切り後、未調整。6 は口縁部を欠損する。5 と同形態である。7 は復元径 10.2 cm。器高は低い。体部はやや丸みを帯びる。口縁端部を外側につまみ出し、口縁部は外反する。

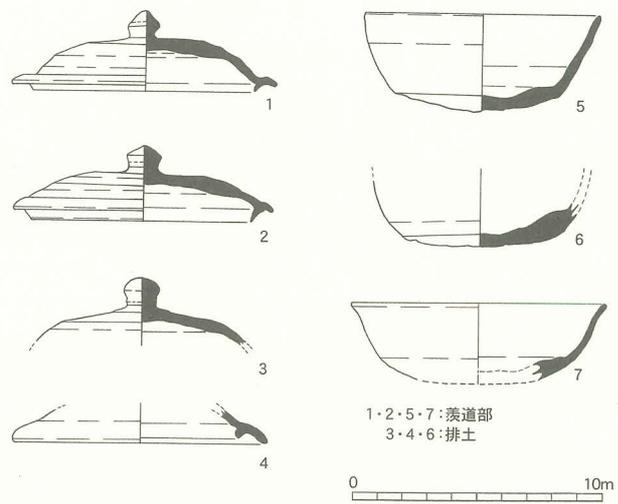
今回の調査で墳丘背後から須恵器 1 点（8）、土師器 1 点（9）、製塩土器 2 点（10・11）、計 4 点が出土した。8 は須恵器杯 G 蓋。口縁部を欠損する。形骸化した扁平な宝珠つまみを有し、器壁が厚い。天井部は回転ヘラ削りを施し、丸みを帯びる。9 は小型の土師器甕。口径 10.5 cm、現存高 10.3 cm。口縁部は強く外反して開く。頸部の器壁は厚く、口縁端部にかけて薄くなる。口縁部は内外面に強いナデを施す。胴部外面に粗い縦ハケを、内面は下方から粗い削りを施す。10・11 は製塩土器。10 は口径 11.0 cm、器高 9.8 cm。11 は復元径 10.5 cm、復元高 10.9 cm。ともに底部は丸底で、砲弾形を呈する。10 は内面にナデを施し、外面は粘土輪積み痕をナデ消す。11 は口縁部の強いナデにより内弯し、口唇部に指押さえ痕が部分的に認められる。



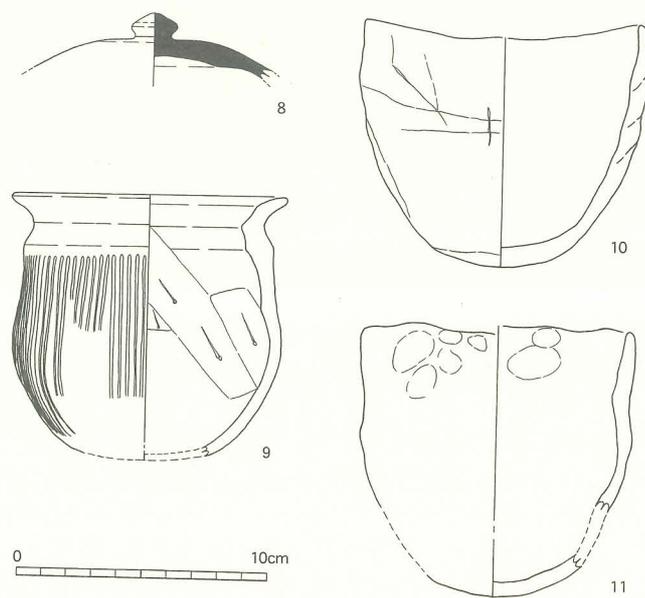
第122図 浄土寺2号墳石室実測図(縮尺1/40)



第123図 浄土寺2号墳石室掘り方平面図 (縮尺1/40)



第124図 浄土寺2号墳(昭和52年)出土土器実測図(縮尺1/3)



第125図 浄土寺2号墳墳丘背後出土土器実測図(縮尺1/3)

## 第6節 浄土寺3号墳

### 第1項 立地と墳丘

2号墳から約26m南西、同一支尾根から東側に若干逸れた地点に位置する。立地条件は2号墳と共通するが、自然地形は2号墳よりも急傾斜となる。墳頂部から掘り込まれた盗掘坑が石棚下、玄室内まで及んでいた。このため既に玄室床面まで盗掘が及んでいるものと考えられた。なお、盗掘段階に石棚に阻まれ、石棚前方まで迂回しながら土砂を掘削したと考えられる掘り込みが石棚上の堆積土層断面で確認された。

墳丘規模は石室主軸方向8.2m、石室直交方向8.1m、径8.2mの円墳。墳丘外護列石と墳丘背後の岩盤掘削による周溝状施設を墳丘外部施設に持つ点は2号墳と同様である。墳丘裾部の標高は、石室開口部付近で37.2m、墳丘東裾部が37.2m前後、墳丘西裾部が38.2m前後、墳頂検出レベルで38.3mである。墳丘の高さは、石室奥壁4段目上端に天井石が架けられ、さらに盛土されたものと考えれば2.0m前後であったものと推測される。

石室開口部から直線的に左右に展開する墳丘外護列石は墳丘基底部に載せるように墳丘裾部から約0.2m浮いた状態で石列状に伸張する。2号墳と同様、開口部東側の列石は元位置を保たないものが大半である。使用石材は長辺0.3mの花崗岩自然礫。開口部東側では列石上端の標高は37.5m、墳丘西側では標高37.9~38.0m。墳丘東側ではさらにこの列石から連続し、平面形が円弧状を呈して、墳丘背後、石室開口部から2.0mの地点まで伸張するが、それより背後には外護列石は認められない。古墳の立地は急斜面地にあり、墳丘流失に伴い既に崩落したものと考えられる。墳丘東側外護列石には、2号墳で見られたような大型基底石は存在せず、0.4m四方の未加工の自然礫を最大2段に横長手積みする程度である。現存する外護列石は標高37.5m付近において上端の目地が揃う。2号墳と同様、墳丘東側では外護列石を構築し、墳丘裾部を形成することで墳丘土の流出を防いだものと思われるが、3号墳ではこの墳丘裾部から谷に向けての急傾斜地であり、構造も2号墳と比べてさらに形骸化した外護列石であったことから、結果として列石の流失を招いたものと考えられる。

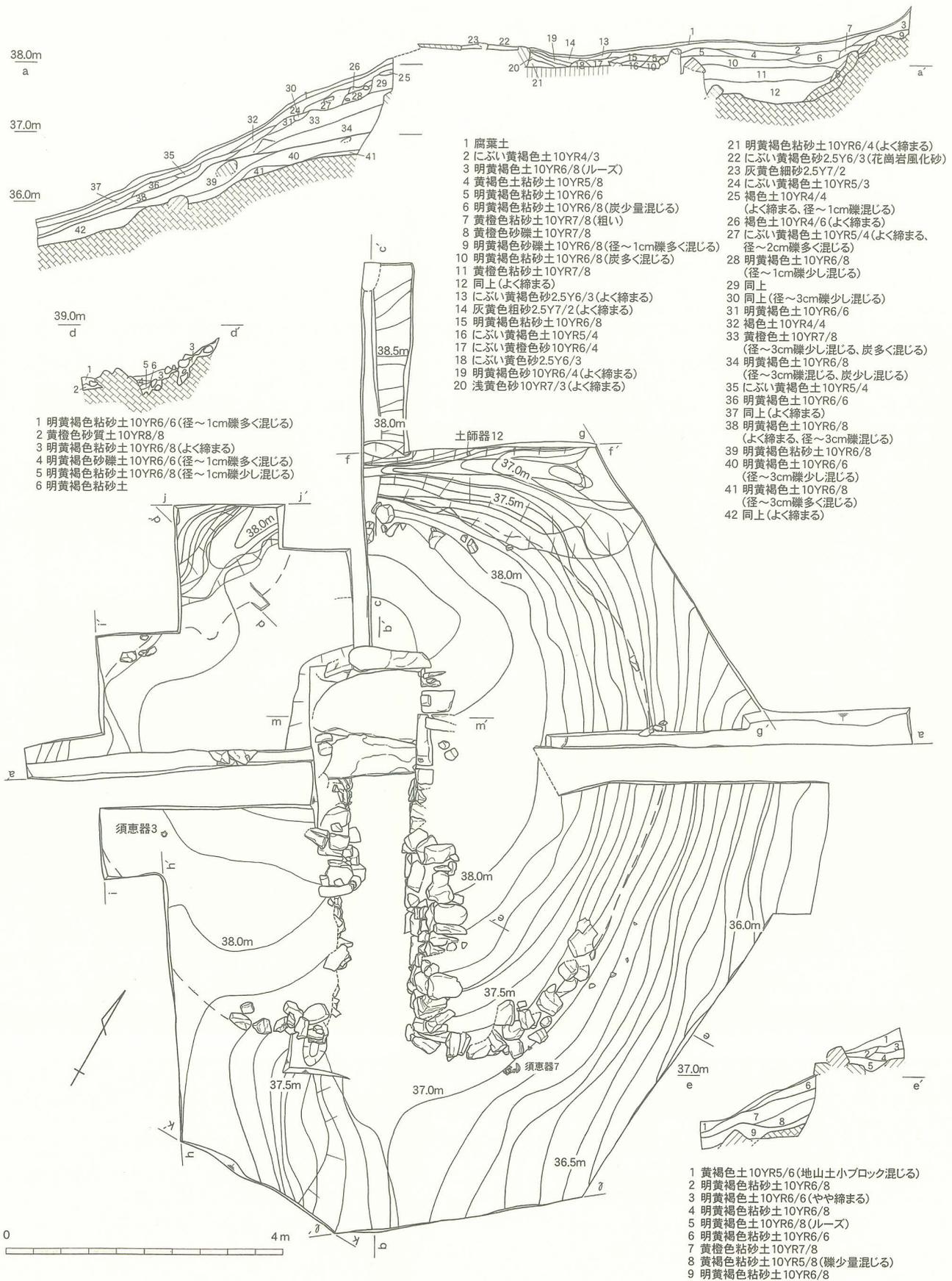
一方、墳丘西側は2号墳とは若干異なり、支尾根から東に傾斜する地山上に直接、墳丘土を載せることで墳丘裾部を形成したものと考えられる。

墳丘背後では、墳丘西側の支尾根から墳丘裾部に沿って円弧状に溝を掘削するが、墳丘北裾部付近で収束し、さほど伸張しない。平面形は円弧状を呈する。墳丘背後、標高38.5m付近から地山土を掘り込み、標高37.8mにおいて幅0.5mほどの平坦面を経て、墳丘裾部に至る。

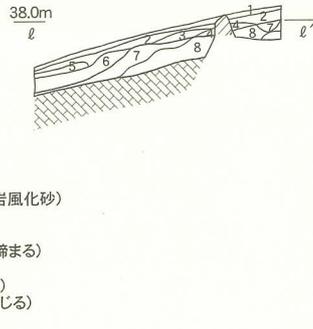
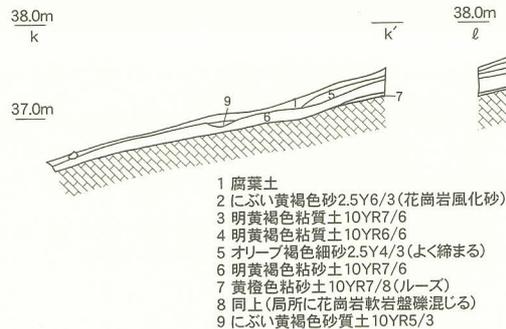
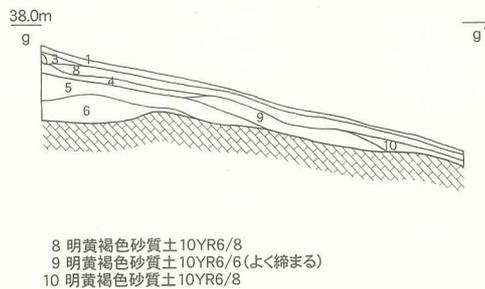
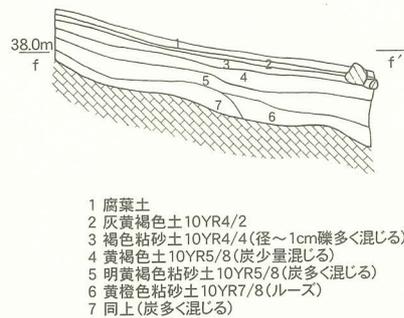
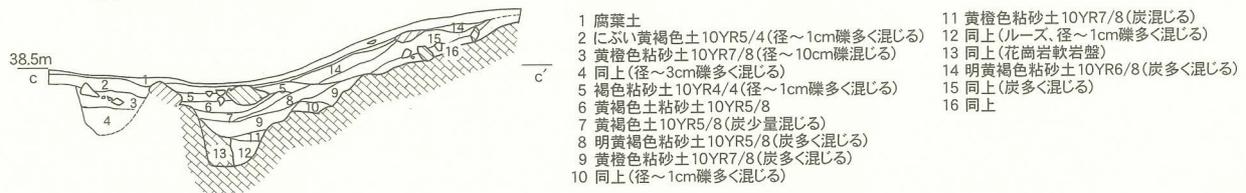
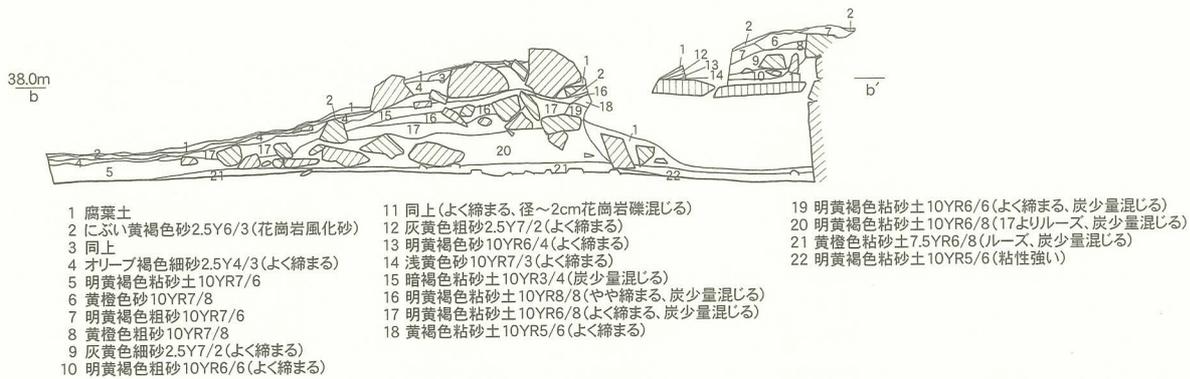
2号墳調査と同様、墳丘の一部を縦断、横断に断ち割ることで墳丘構成の様相確認を行った。墳丘は径2cmほどの小礫が部分的に混じる黄橙色、明黄褐色の砂質土を基本的に0.2cm前後の厚みを1単位として水平に盛ることで構築する。墳丘西側では比較的良好に締まった墳丘土を持つことに対して、墳丘東側では墳丘の崩落を招いており、ほとんど原形を留めていない。

墳丘構築に際しては、墳丘西側では尾根斜面の岩盤を石室主軸から約4.4m付近から掘削し、標高37.5m付近に平坦面を造り出した後、石室側壁背後から石室床面に向けてさらに一段深く岩盤を掘削する。墳丘背後においても岩盤を溝状に深く掘削し、意図的に地山、岩盤をマウンド状に掘り残した部分をそのまま墳丘裾部とし、さらに石室奥壁背後から石室床面に向かって岩盤を深く掘削したものと考えられる。石室床面部分から墳丘東側全面にかけては2号墳と同様に岩盤、地山土を水平に掘削し、標高37.0m付近に平坦面を造り出す。

玄室内は盗掘されており、遺物は出土していない。玄門付近、石室羨道部右側壁下の床面直上から須恵器杯G 2点(1・2)が完形で出土した。また開口部前方付近から須恵器杯G 1点(5)、須恵器杯A 1点(9)、杯G蓋1点(6)、須恵器杯B蓋1点(8)が破片の状態でまとまって出土し、墳丘東側外護列石



第126図 浄土寺3号墳調査区平面図・土層断面図(縮尺1/80)



第127図 浄土寺3号墳土層断面図 (縮尺1/80)

下付近からは開口部から流れ出たと考えられる須恵器杯G 1点 (7)、須恵器杯G 蓋 1点 (4)、須恵器長頸壺破片 1点 (10)、土師器杯 1点 (11) の計 8点が出土した。さらに石室西側の墳丘上から須恵器杯G 1点 (3)、墳丘背後の掘り込み堆積土から土師器杯 1点 (12) が出土している。

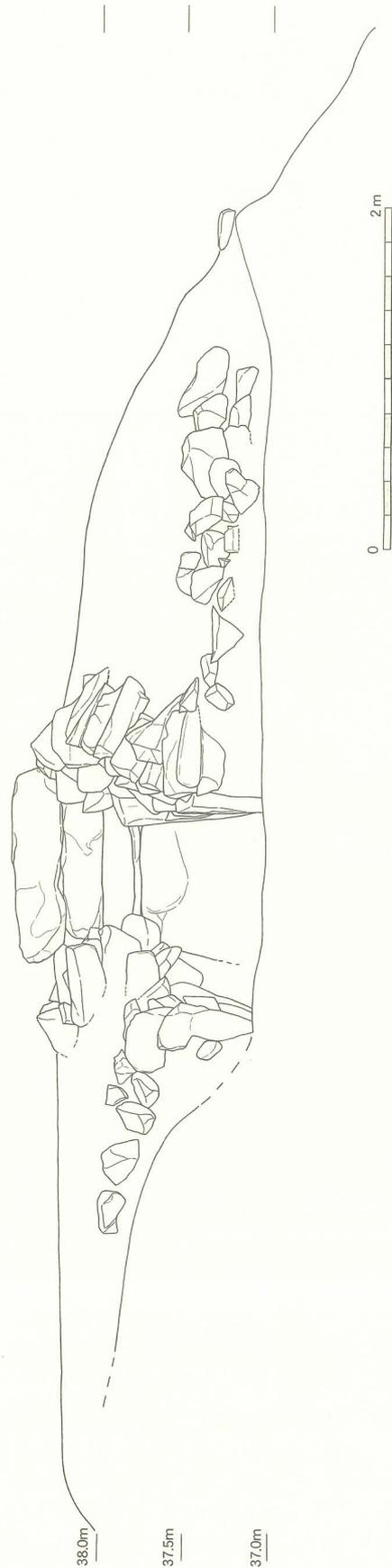
羨道部出土の須恵器杯は追葬段階のものと考えられ、前庭部出土の須恵器は墓前祭祀に伴うものと考えられる。ただし、前庭部出土須恵器杯A (9) は石室玄室付近の表土から出土した須恵器小片と接合関係にあり、これらの遺物が厳密に元位置を保つものとは言い切れない。

## 第2項 埋葬施設

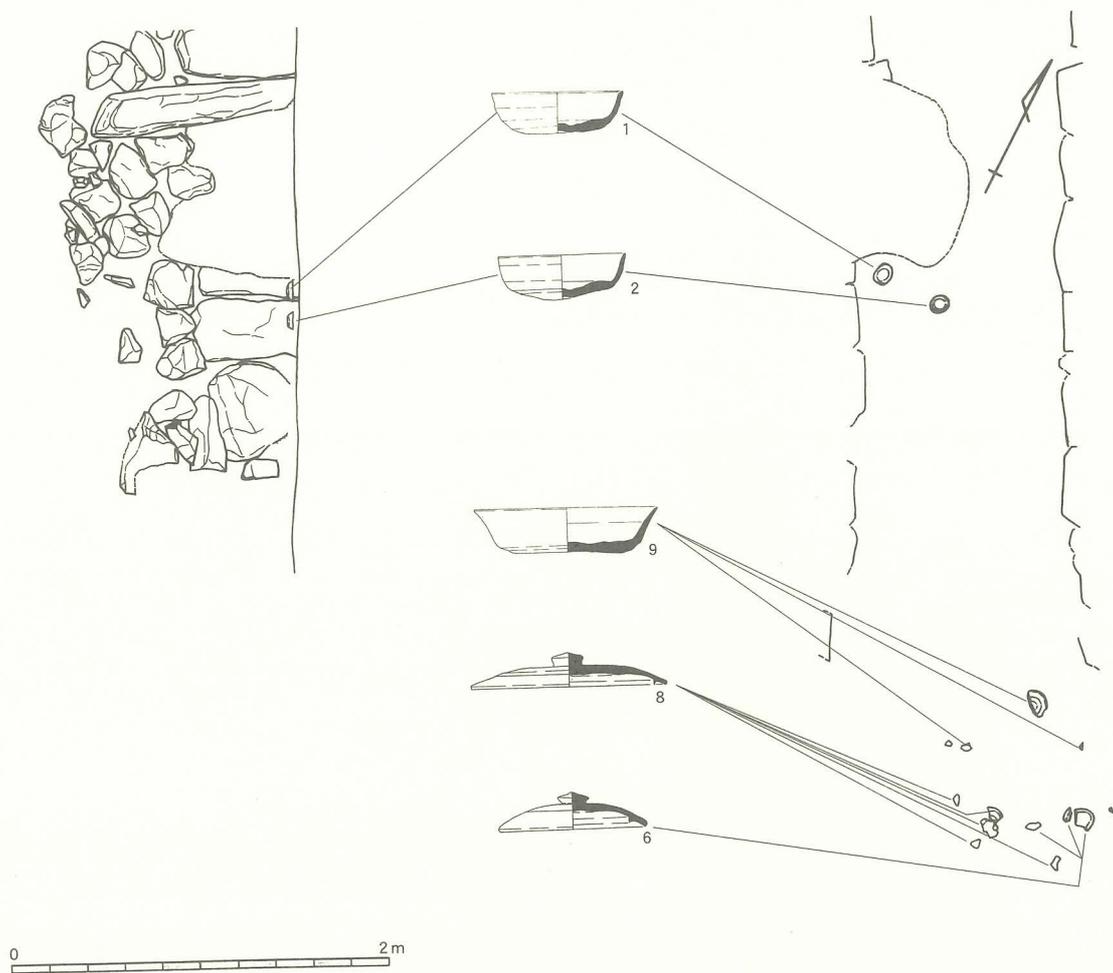
2号墳と同様、玄室内に石柵を架設する両袖式の横穴式石室である。石室側壁は全体的に東側に傾いている。

石室は南から 30 度東偏する南北に主軸を持つ。石室の規模は全長 5.6m。玄室の規模は玄室長 2.2m、玄室幅は奥壁付近 1.16m、玄門付近 1.04m、袖部幅は 0.88mを測る。羨道部の規模は羨道長 3.0m、羨道幅は玄門付近 1.05m、開口部付近 1.34mを測る。使用石材は全て花崗岩である。石室の平面形は右側壁玄門部に長辺 1.1m、短辺 0.2m、左側壁玄門部に長辺 0.9m、短辺 0.35mの石材を縦位に配し、内側に突出させることで擬似両袖を形成する。ただし、石室側壁の東側への傾きのため、玄室と羨道部との間で床面両側壁ラインのズレが生じている。石室床面の周縁部において長辺 0.4m、短辺 0.2mほどの扁平な角礫の上面が部分的に露出する。床面の断ち割りにより、奥壁、側壁基底石の掘り方に角礫を詰め込み、根固石とした状況を断片的に確認している。2号墳と同様の意図で配列したものと考えられる。

天井石は長辺 1.5m、短辺 0.6m内外の天井石が玄門部から羨道部に向かって 3石まで残るが、全て石室羨道部に落ち込んでいた。玄室天井石は残存しないが、玄室の高さは床面から奥壁4段目上端で 1.6m、羨道部の高さは玄門部付近で床面から 1.4mを測り、2号墳同様、天井部は羨道部が玄室より若干低くなるものと考えられる。



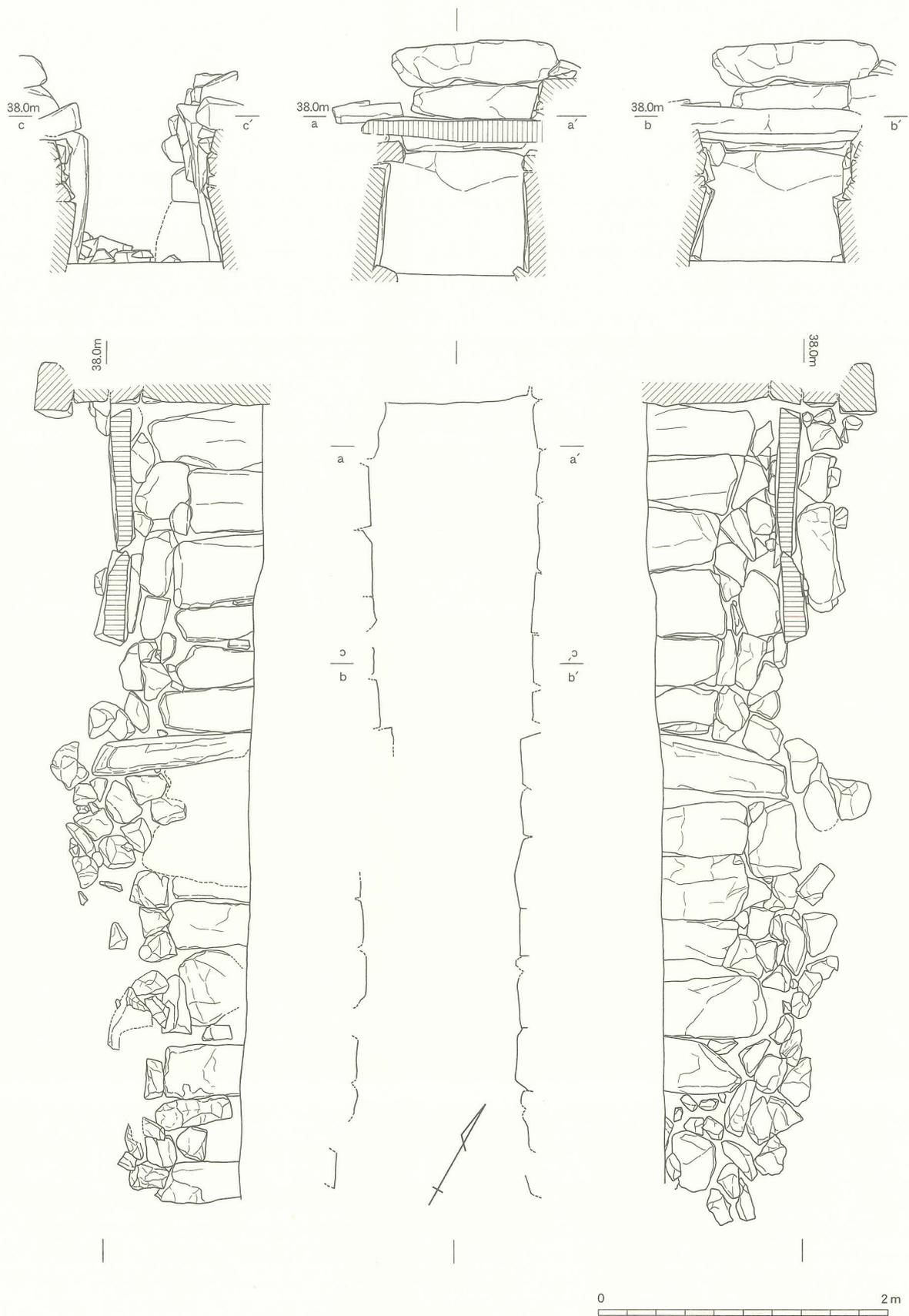
第128図 浄土寺3号墳立面図 (縮尺 1/40)



第129図 浄土寺3号墳羨道部・開口部遺物出土状況図（縮尺1/40）

石室壁面は、奥壁は4石からなり、長辺1.0m、短辺0.8mの石材を横位に配置することで基底石とし、上部に長辺0.9~1.1m、短辺0.25mほどの石材を3段に横位に平積みすることで構成する。奥壁断面は直立し、最上段の奥壁が若干内側に迫り出す程度である。両側壁では長辺0.5m前後~0.8m、短辺0.2~0.5m弱の石材を縦位に配することで基底石とするが、2号墳に見られるような石材の規格性は乏しく、基底石上端での目地は右側壁でおおよそ揃うに留まる。側壁基底石の上部には基本的には長辺0.2~0.3m、法量差が激しい小石材を複数段にわたって奥に控えを取りながら小口積みすることで構成する。明確な目地が揃う箇所は見られず、特に羨道部では基底石を除き、総じて規格性に乏しい。側壁断面は石棚架設部分では直立を保っていることに対して、玄室前方部および羨道部では側壁基底石が内屈し、逆に基底石上は外反するなど遺存状況は悪い。

石棚は、玄室後方部、側壁基底石の上に長辺0.3~0.4m、短辺0.2m前後の小石材を1~3段に横長手積み、小口積みすることで目地が揃う水平面を設け、その上に2石の板石を石棚として架設する。奥壁から離れ、組み込まれていないため、石棚の水平が保たれている。石棚は表面を平滑に整え、また直線状に割れた節理面をさらに平滑に調整した後、その面を開口部に向けて架設する。2号墳で見られた石室基底石の二次調整は3号墳では見られないが、石棚に関しては明確な調整痕跡が認められる。石棚が架設される範囲は奥壁壁面から石棚先端部までで1.6mを測る。石棚の厚さが0.16mであり、玄室の高さは1.6mであることから、石棚下は高さ0.93m、石棚上では高さ0.55mの空間となる。奥壁基底石と玄門立柱石の

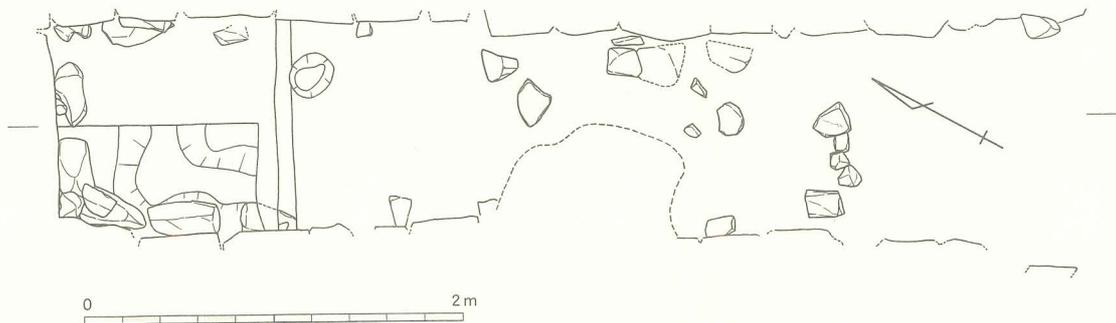


第130图 浄土寺3号墳石室実測図(縮尺1/40)

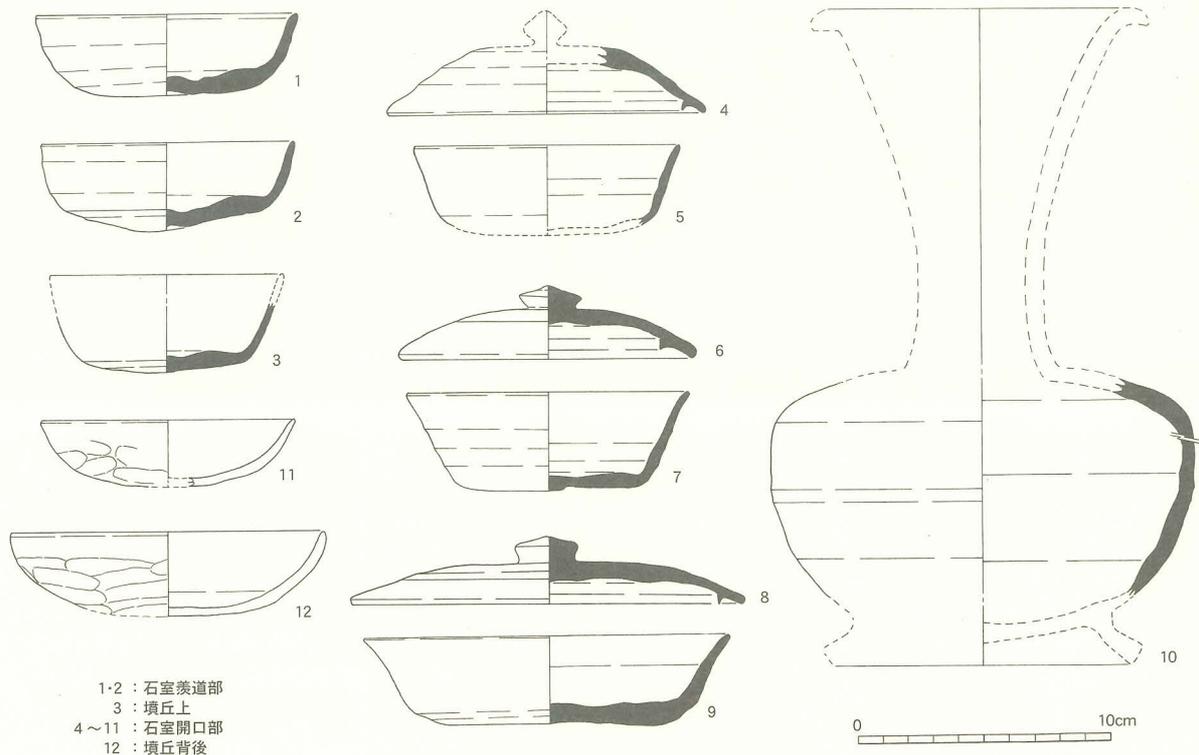
上端と石棚の下面のレベルが標高 37.9m 付近で概ね一致する。

### 第3項 出土遺物

1は須恵器杯G。口径 10.2 cm、器高 3.3 cm。底部から緩やかに口縁部に至る。口縁端部に強いナデを施し、つまみ出す。2は須恵器杯G。口径 9.9 cm、器高 3.6 cm。体部から丸みを帯びて口縁部に至る。口縁端部は外側につまみ出す。口縁部はナデ押さえるため不定形に屈曲する。底部外面は回転ヘラ切り後、未調整である。3は須恵器杯G。現存高 2.8 cm、底径 5.3 cm。口縁部は欠損する。4は須恵器杯G蓋。復元径 12.5 cm、現存高 2.7 cm。宝珠つまみを持つ。かえりは短く収める。5は須恵器杯G。復元径 10.4 cm、現存高 3.3 cm。6は須恵器杯G蓋。口径 11.4 cm、器高 2.9 cm。肩部に鋭い稜を持つ扁平なつまみを有し、かえりは短く収める。天井部に自然釉が付着。7は須恵器杯G。口径 11.0 cm、器高 4.0 cm。底部外面はヘラ切り後、未調整。8は須恵器杯B蓋。口径 15.4 cm、器高 2.8 cm。幅のある扁平なつまみを有する。か



第131図 浄土寺3号墳石室掘り方平面図 (縮尺 1/40)



1-2 : 石室羨道部  
3 : 墳丘上  
4~11 : 石室開口部  
12 : 墳丘背後

第132図 浄土寺3号墳出土土器実測図 (縮尺 1/3)

えりは下方につまみ出し、端部は鋭く収める。9は須恵器杯A。口径14.3cm、器高3.5cm。底部内面は不定方向にナデを施す。10は須恵器長頸壺として復元。肩部は丸みを帯びる。11は土師器杯。復元径9.9cm。器壁は薄く、底部から口縁部に至るまで丸みを帯び、口縁端部を外方につまみ出す。外面にミガキを施す。12は土師器杯。口径12.2cm、器高3.3cm。底部の器壁は薄く、口縁部にかけて厚くなる。底部はやや平底で、丸みを帯びて口縁部に至り、口縁端部を上方につまみ上げる。内面は回転ナデを、外面はミガキを丁寧に施す。

## 第7節 浄土寺古墳群内のその他の調査

### 第1項 1～3トレンチ

1トレンチでは腐葉土下、地山土細ブロックが混じる黄褐色砂質土が薄く堆積し、黄褐色粘砂土からなる地山土が尾根地形に沿って東に標高を減じながら分布する。地山土上面は標高39.85～40.25m。トレンチ東端で標高40.05m付近から地山土を掘り込む痕跡が土層断面で確認されており、3号墳造営にかかる支尾根の削平痕跡を示しているものと考えられる。

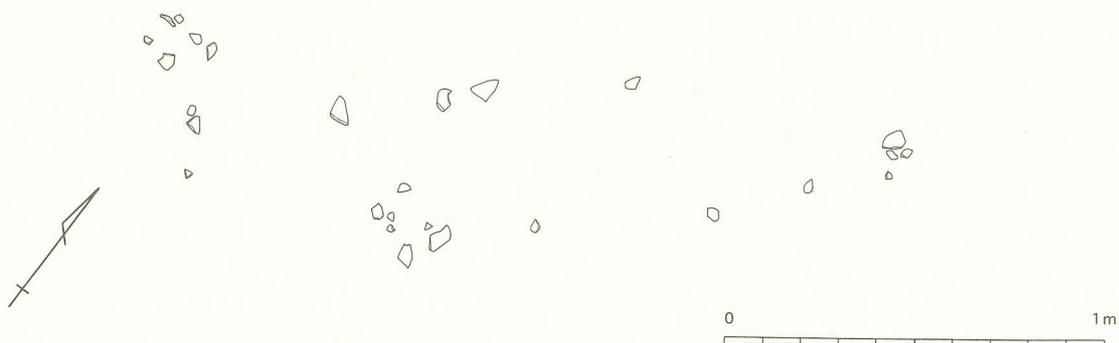
2トレンチ、3トレンチでは腐葉土下、地山土ブロック、岩盤ブロックが混じる黄褐色、黄橙色系の砂質土が薄く堆積して標高39.4～40.3mで岩盤へと至る。

1～3トレンチでは表土下、地山土、岩盤が分布しており、古墳が存在した痕跡は認められない。

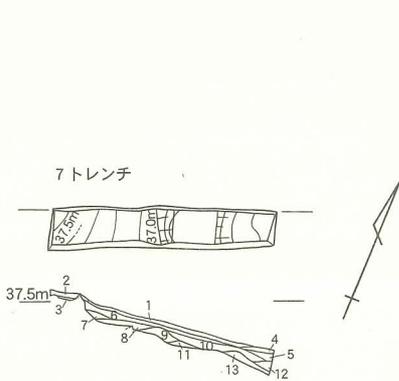
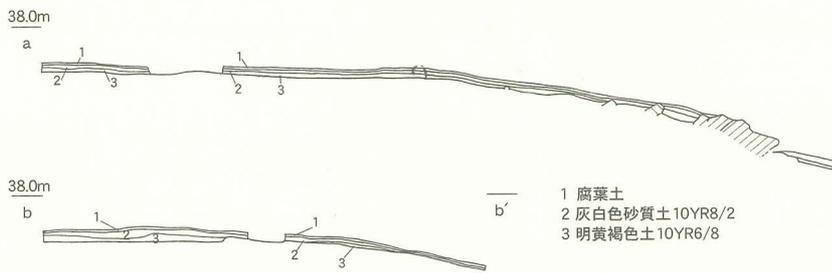
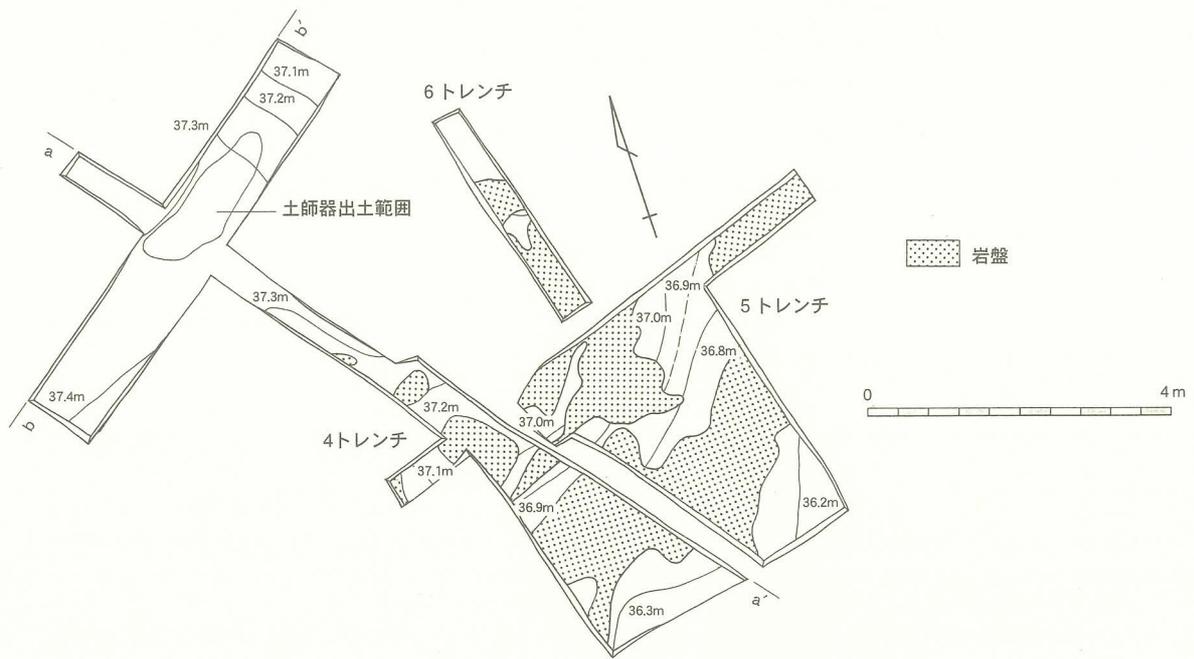
### 第2項 4～6トレンチ

4トレンチ北側および6トレンチは小支尾根平坦部に、4トレンチ南側、5トレンチは尾根地形が南に向けて傾斜を始める地点にあたる。いずれのトレンチにおいても腐葉土下、灰白色砂質土、明黄褐色土がそれぞれ0.04mほど薄く堆積し、尾根平坦部では標高37.2～37.4mで地山土上面に、平坦部の南側では標高37.1mから標高36.2mまで標高を減じる地山土、岩盤層へと至る。当初、石室構成材、外護列石構成材と考えられた石材は岩盤の花崗岩が地表面に突き出るように露頭したものである。

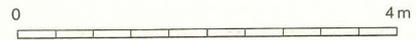
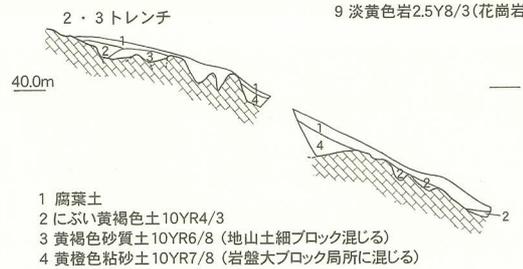
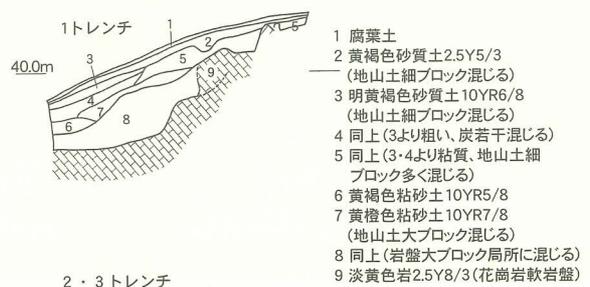
4トレンチ北側、小支尾根平坦部において土師器甕1点(1)が意図的に破碎された状態で出土した。東西2m×南北1mの範囲から計27点の甕細片が出土し、さらにトレンチ外に広がりを持って拡散するものと思われる。接合関係にあるものは3点に留まるが、いずれも土器の調整、胎土、焼成が酷似し、同一個体と考えられる。この平坦部において意図的な土器破碎行為がなされたものとみられる。この土器の他に、古墳、整地痕跡、あるいは柱穴といった明確な遺構は検出されなかった。なお、この調査地点は2号墳墳丘東側の下端と比高差が約1.6mあり、この地に立って西向すると墳丘外護列石を正面にして2号墳を見上げる位置となる。



第133図 浄土寺古墳群4トレンチ土器出土状況図(縮尺1/20)



- 1 腐葉土
- 2 黄褐色土 2.5Y5/3 (径~1cm岩盤混じる)
- 3 明黄褐色土 10YR6/6 (径~1cm岩盤少し混じる)
- 4 暗褐色土 10YR3/4
- 5 にぶい黄褐色砂質土 10YR4/3
- 6 同上 (径~1cm岩盤混じる)
- 7 褐色砂質土 10YR4/4 (地山土混じる)
- 8 黄褐色砂質土 10YR5/6 (細砂ベース)
- 9 黄褐色砂質土 10YR7/8



第134図 浄土寺古墳群1~3トレンチ土層断面図 (縮尺1/80)

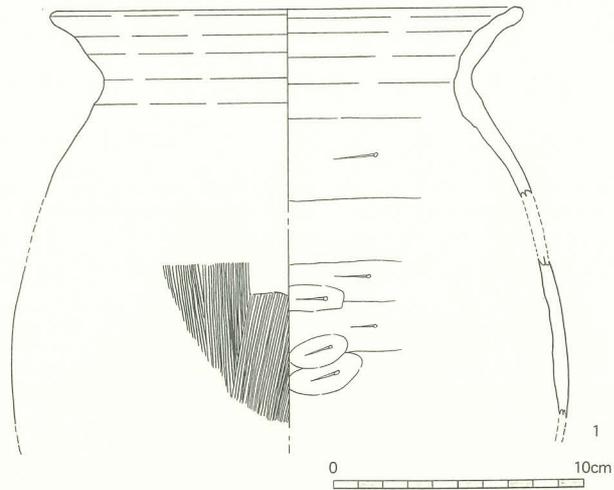
4~7トレンチ平面図・土層断面図 (縮尺1/100)

### 第3項 7トレンチ

表土下、細岩盤ブロックが混じる黄褐色系の地山土が薄く堆積し、標高36.8m～37.0m付近において地山層の削り出しによる幅0.8mほどの平坦面を確認した。2号墳へと至る墓道と捉えられるかも知れない。出土遺物はない。

### 第4項 出土遺物

1は土師器甕。復元径18.4cm。中胴状を呈すると思われる。口縁部は強く外反し、口縁端部を丸く収める。頸部から口縁端部にかけて内外面に指圧の強い横ナデを施すために内面では3条の凹線が段状に巡り、外面は膨らむ。胴部の器壁は総じて薄く、外面は細かい縦ハケを、内面には横方向にケズリを施す。

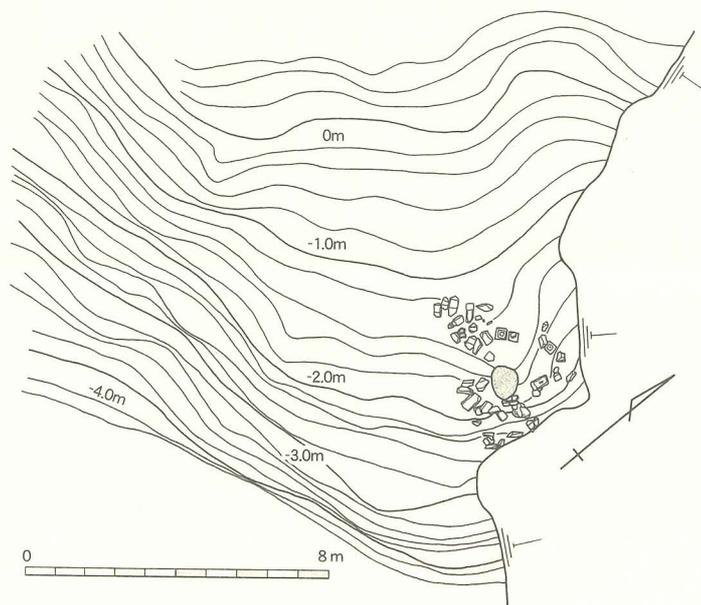


第135図 浄土寺古墳群4トレンチ出土土器実測図(縮尺1/3)

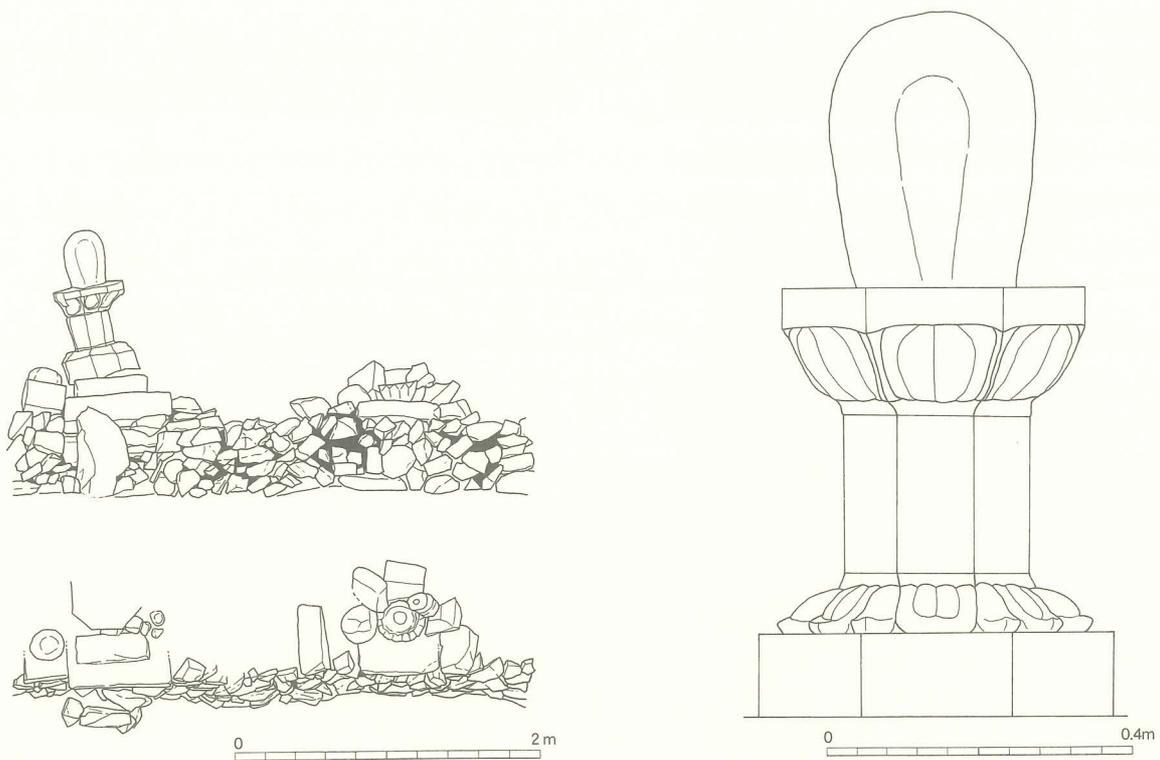
## 第8節 浄土寺跡

浄土寺3号墳調査時に支尾根周辺を踏査したところ、浄土寺古墳群西方の山裾において地形に沿って廻る石垣状遺構、この上面に載るように無縫塔1基、倒壊した五輪塔1基を確認、さらに石垣背後に五輪塔、宝篋印塔、板碑が散在し、その一部は大木の周囲に集積されている石塔群集積地1箇所を確認した。当該地周辺には上浄土、中浄土、下浄土といった小字地名が残るなど中世寺院の存在を窺わせる。浄土寺古墳群という遺跡名称の由来となっている寺院跡の現状把握を目的として、浄土寺3号墳調査後、平成17年2月28日から3月17日までの期間において、石垣状遺構の一部平面、立面図化、石塔群周辺の現況地形略測、無縫塔実測などの諸作業を実施した。ただし、遺跡近郊に基準点、水準点が設置されていないことから地形測量図、実測図の作成は現地での任意の水準を±0mとして、相対的な高低差によるレベル表示、等高線表示で行った。

石垣状遺構は埋没する部分も含めれば北東-南西約50m、北西-南東約15m、計65mほどの範囲に広がる。山裾地形に沿って伸張するため明瞭な隅部は持たない。基本的には0.2mまでの大小の花崗岩自然礫を最高0.55mの高さまで乱積みすることで構築する。背後の山林に至る通路として部分的に張り出しが見られる。石垣上面においてやや傾いた状態で無縫塔1基、崩落した五輪塔1基が確認された。無縫塔が置かれた部分では長さ



第136図 浄土寺跡石造物集積地測量図(縮尺1/200)



第137図 浄土寺跡石垣状遺構平面図・立面図（縮尺1/50）・無縫塔実測図（縮尺1/10）

1.3mの範囲において石垣の積み直しが行われた痕跡が認められ、無縫塔直下、石積み最下面には縦0.25m、横0.3m、奥行き不明の石組状の空洞部分があり、内部に中世陶器の甕を埋納している。

無縫塔は総高1.3mの花崗岩製。基壇上段は高さ0.14m、幅0.465m、基壇下段は高さ0.15m、幅0.69m。基礎台座は八角形をなし、高さ0.2m、幅0.485m。各面に格狭間を配し、上部には複弁の反花を彫る。竿石の高さ0.29m、幅0.245m、八面をなす。中台は高さ0.15m、幅0.4m。塔身の高さ0.365m、最大幅0.27m。格狭間、中台反花の形式、塔身の形状から南北朝期の製作年代が推測され、若狭地方最古の無縫塔として位置付けられている（杉本2006）。

石垣背後の山林には五輪塔、板碑が散在、石垣列からさらに北東方において、既に枯れている巨樹の周囲に五輪塔、宝篋印塔、五輪塔陽刻板碑が寄せ集められた集積地1箇所を確認した。宝篋印塔、五輪塔は崩落し、また大半の板碑は地中に埋没する。石塔群に一石五輪塔1体が含まれており、中世末から近世にかけての時期にこれらの石塔群の集積が行われたものと考えられる。

浄土寺跡については「丹生浦山沽却注文」（丹生区有文書）、応永三十一（1425）年七月三日の項に「いささやな山壺所、丹生浦片山つる女の山を、丹生浦の浄土院ゑ寄進申候、今も知行にて候」とあり、室町初期には浄土寺（浄土院）が存在したことを窺わせる記述があるが（杉本2006）、寺院そのものの様相は分からない。石垣状遺構前面の水田面に寺院伽藍が存在するものと推測される。無縫塔の年代から考えて室町期以前には既に寺院として成立し、中世末には衰退し、廃寺となったものと考えられる。

なお、この石塔集積地は土地改良に伴う土取りが既に行われており、塔類、板碑の大半が元位置を離れて散乱する状況にあるなど、早急な保護措置が必要である。

## 第9節 浄土寺古墳群周辺分布調査

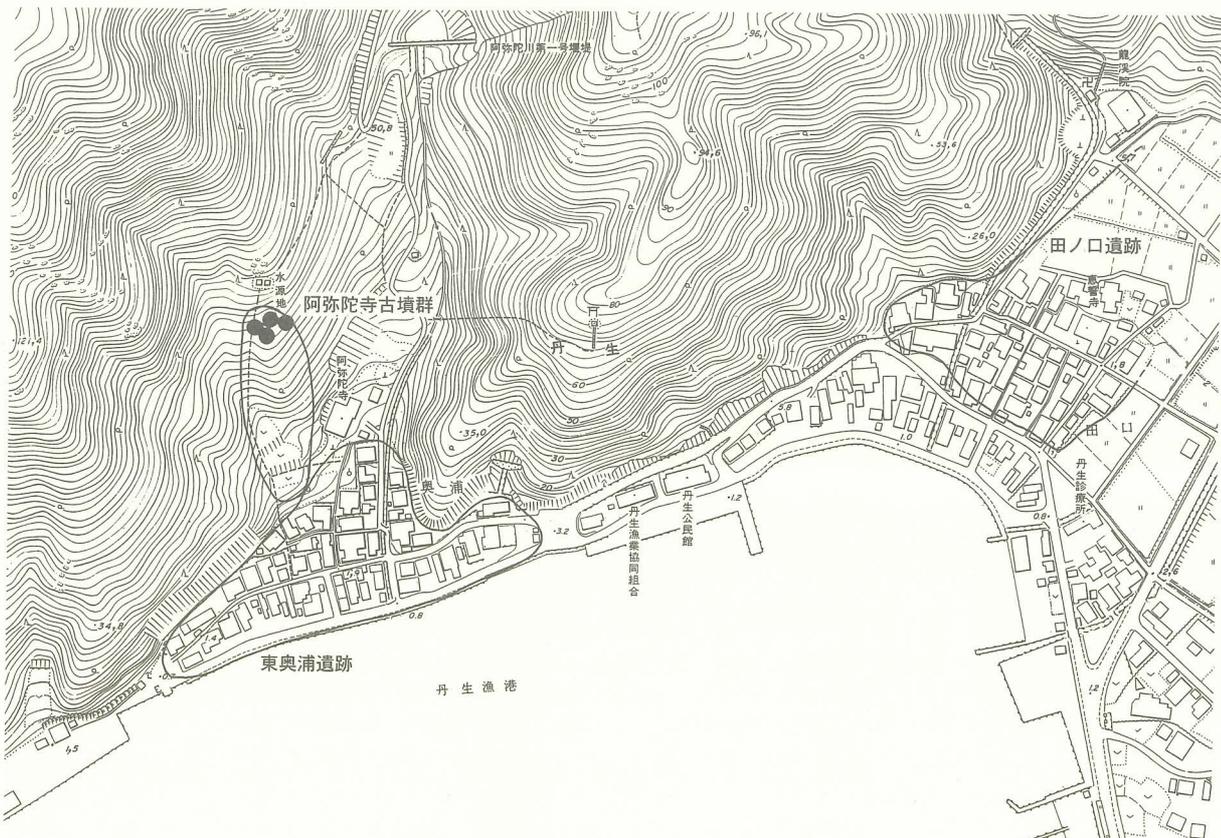
浄土寺古墳群は敦賀半島西岸において唯一確認されている石柵を有する後期古墳群であり、また若狭地方の後期古墳では珍しく尾根筋に築造された古墳群であることから、若狭地方における浄土寺古墳群の歴史的意義を探るための基礎資料を得ることを目的として、敦賀半島西岸における山間部の踏査を平成18年2月9日から3月17日にかけて断続的に実施した。

### 第1項 阿弥陀寺古墳群

阿弥陀寺古墳群は敦賀半島西岸の先端部、丹生湾を望む山間部の谷筋、標高約44~48m付近に所在し、これまでに横穴式石室を内蔵する4基の円墳が確認されている。過去、古川登氏らによって地表面観察による詳細な報告がなされている(古川・大森1976)。報告の内容は以下のとおりである。

1号墳石室は全長3.5m、幅0.55m。石室内部は埋没する。石室構造は奥壁を鏡石状に造り、側壁は小石材を乱石積みする。天井石もさほど大きくない。石室主軸は南から10度東偏する。2号墳石室は玄室長1.7m、羨道部長2.0m、幅0.8m、天井石は1m大の大きさで、石室主軸は南から25度東偏する。3号墳石室は玄室長2.0m、羨道部長2.75m、幅1.0m。石室構造は奥壁として扁平な石材を4段に積み、持ち送りが顕著。側壁は2、3段に積む。天井石は長辺1.2m、短辺0.7m、一部が崩落する。石室主軸は南から10度東偏する。4号墳石室は玄室長2.95m、幅1.15m、高さ約1.0m。羨道部の崩落が著しい。天井石は1石が残る。石室構造は、奥壁基底石は2石からなり、上部に1石で2段に積む。側壁は小石材を乱石積みし、天井石もさほど大きくない。石室主軸は南から25度東偏する。

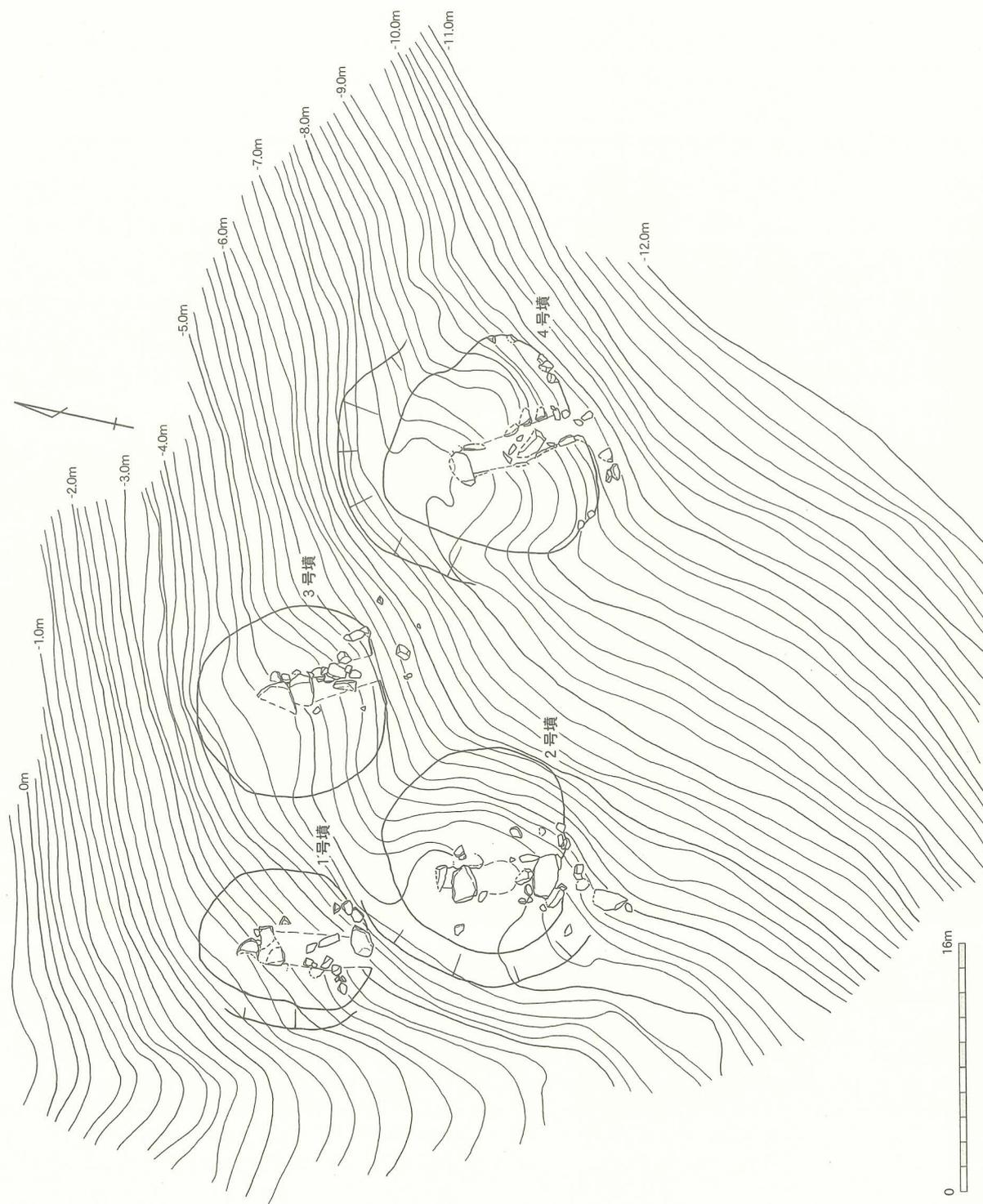
その後、古墳群自体は山中にあることから開発事業が及ぶことなく現状保存されている。ただし、今回の踏査において墳丘上に樹木が繁茂し、樹木の根が石室壁面を押し、一部は石室が崩落する状況を確認した。このことから、今後の調査の基礎資料を得ることを目的として、平成18年3月16日、17日において



第138図 阿弥陀寺古墳群位置図(縮尺1/3,000)

現況地形測量を実施した。ただし、遺跡近郊に基準点、水準点が設置されていないことから地形測量図、実測図の作成は現地での任意の水準を±0mとして、相対的な高低差によるレベル表示、等高線表示で行った。次項の北田東禅寺裏古墳群も同様である。

地表面観察、現況地形の略測から明らかとなった所見を以下にまとめる。古墳の号数は古川氏らの報告に準拠した。また、石室内には流入土が厚く堆積しており、略測数値は全て現存値である。石室全長については開口部が明瞭ではないことから露出する側壁長のみの数値を示した。



第139図 阿弥陀寺古墳群現況測量図 (縮尺 1/400)

古墳群は南方に向けて比較的緩やかに延びる尾根筋から東側に逸れた緩斜面上に分布する。標高の最高位に分布する1号墳と最低位に分布する4号墳との高低差は約7.3m。1号墳、2号墳は尾根筋からわずかに東側に外れて分布し、さらにその東側に4号墳が分布する。古墳間の距離は2号墳を起点に、1号墳が北西に約14m、3号墳が北北東に約17m、4号墳が東に27mである。

1号墳は南北11.2m、東西8.4m、高さ約2.0mの円墳。墳丘西側には比較的緩やかな尾根筋が南方に伸びているが、この尾根の一部を削り出すことで墳丘西側裾部を造り出す。横穴式石室は上部が露出する。奥壁幅0.6m。4基中で最も小規模な石室である。天井石2石が元位置を保つ。奥壁は1枚石で構成されると考えられる。

2号墳は11.9m、南北13.4m、高さ1.9mの円墳。墳丘東側の流失が認められる。1号墳と同様、墳丘西側の尾根筋を削平して墳丘西側裾部を造る。横穴式石室は奥壁幅1.0m。最奥壁寄りの天井石1石が元位置を保つが、その開口部側の天井石は一部が左側壁に架かるのみで石室内に落ち込んでいる。奥壁は基底石として1石を縦位に据え、その両側壁側に小石材を横位に上下2段に積むことでレベルを揃え、その上段に横位に2石を積む。隙間には塊石を詰める。右側壁は堆積土に覆われていたが、左側壁では奥壁から3.1mの範囲まで石積みの上部分が露出する。石材は基本的に横位に積む。

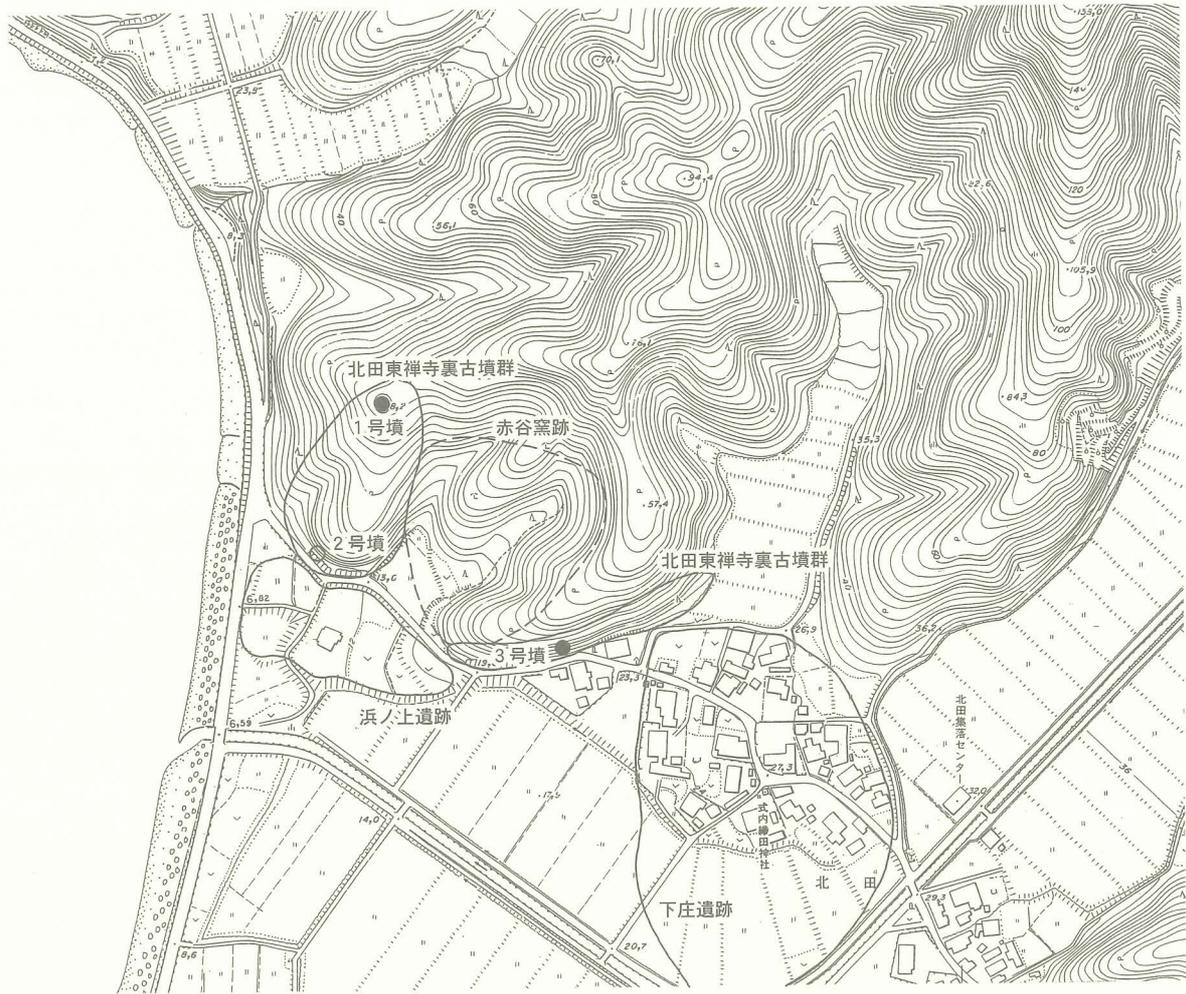
3号墳は南北12.3m、東西12.8m、高さ2.0mの円墳。古墳群内で最大規模を誇る。横穴式石室は奥壁幅0.77m。奥壁側に元位置を保つ天井石2石が残存。奥壁は鏡石状に大石材1石を配し、天井石との間に横位に石材を1段積む。奥壁から1.7mまで両側壁が確認できるが、それ以外は木根の堆積土と側壁崩落により確認できない。側壁は基本的に横位に積む。左側壁は石材を3、4段に積み、概ね目地が通る。

4号墳は13.9m、東西13.8m、高さ1.8mの円墳。墳丘北西側、墳丘背後の緩斜面を周溝状に削り出し、墳丘裾部を造る。墳丘南東裾部には人頭大の自然礫を横位に2段に積む墳丘外護列石が存在する。墳丘外護列石を伴う墳丘は4号墳のみである。横穴式石室は奥壁幅1.05m。奥壁側に元位置を保つ天井石1石が残存。奥壁は3段の石積みを確認できる。下段は大型の石材1石を鏡石状に配し、中段は石材2石を横位に横並びに配置し、上段は石材1石を横長に積み、各段の隙間に塊石を詰める。両側壁は開口部付近まで断続的に確認できるが、玄門部分は堆積土によりその平面形は不明である。両側壁とも概ね石材を横位に積む。左側壁は玄室内で5段の石積みがされ、すべて幅が小さい横長の石材で構成される。右側壁は幅のある横長の石材を3～4段積む。

基本的には、古墳群自体に古川氏が報告された内容と大きな変容はないが、前述のとおり樹木の自生により古墳の一部が損壊を受けており、早急な保護措置を講じる必要がある。

## 第2項 北田東禅寺裏古墳群

北田東禅寺裏古墳群は敦賀半島西岸基部、支尾根先端に所在する。これまでに横穴式石室を内蔵すると思われる小群集墳が山裾に所在したと伝えられている。長年、美浜町文化財保護委員を務められた郷土史家、本間宗次郎（諦観）氏は美浜町東部（旧山東村）の歴史をまとめており（本間1955）、古墳群についての記述がある。引用すると「北田東禅寺裏積石式古墳 古墳は東禅寺北西側菅浜道添に露出してあるなり、昭和初年頃には天、両側、参枚の石にて積合せ下は浜の真砂を敷詰めたるを見受けられたが今は左側は落石せり数年後には原形を認められざるものなり。（後略）」とあり、昭和初期には露頭する横穴式石室が崩落した状況が窺える。地元の古老からの聞き取りによれば、地区の生活道路を造る際に横穴式石室と思われる石室数基が削平されたとのことである。本町の埋蔵文化財調査に従事される吉本正治氏も学生時代、通学時に古墳の石室が山肌の崖面に露頭していることを確認されており、昭和前半期には法面に石室断面が露頭したようである。古墳群からの出土品は伝えられていない。

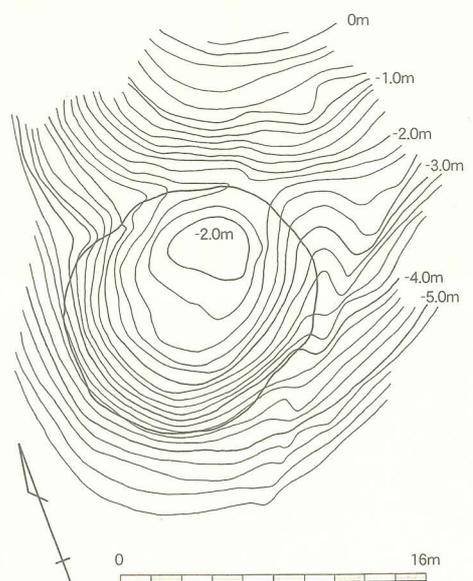


第140図 北田東禅寺裏古墳群位置図 (縮尺 1/3,000)

その後、この道路はアスファルト舗装され、崖面も平滑に掘削されており、既にこの古墳の所在は確認できない。従前、北田東禅寺裏古墳(消滅墳)として福井県遺跡地図に周知されてきた古墳はこの石室露頭古墳を指すものと思われる。本報告では2号墳として扱った。今回の踏査で同じ崖面(法面)で2号墳とは別の古墳と思われる石室の一部と思われる石積みを断片的に確認した。便宜的に3号墳とする。

この山裾に所在する横穴式石室墳を見下ろす尾根上、標高約48m付近に円墳1基を確認した。新発見古墳であり1号墳とする。古墳の範囲、規模を把握するために平成18年3月7日～3月10日の期間において地表面観察、現況地形の略測を行っている。

現地観察、現況地形測量から明らかとなった所見を簡単にまとめる。1号墳は南北12.6m、東西13.5m、高さ2.3mの円墳。墳丘背後は尾根筋の岩盤を墳形に沿って掘削することで墳丘裾部を造り出す。葺石、外護列石などの墳丘外部施設は確認できない。墳丘上に石室石材の露頭が見られず、内部主体は不明であるが、横穴式石室であるものと思われる。



第141図 北田東禅寺裏1号墳  
現況測量図 (縮尺 1/400)

北田東禅寺裏古墳群は海浜部に面する小群集墳であり、造営主体の直接的な生産基盤は古墳群下、土器製塩遺跡と思われる浜ノ上遺跡に求められる。1号墳は敦賀市沓丸山古墳とよく似た立地、墳丘規模を有し、2号墳、3号墳については、谷筋に直交する山裾に所在し、南方に開口する横穴式石室を持つ敦賀市白塚古墳、名子古墳などと同様の傾向が認められるように敦賀半島東岸に見られる古墳群分布と共通する立地を示している。北田東禅寺裏古墳群もこれらの古墳と比較的近い時期、6世紀後葉の年代を考えたい。

なお、今回新たに1基以上の古墳を確認し、複数基からなる群集墳として把握されたことから福井県教育庁文化課と協議を行い、平成18年6月25日付け、福井県教育委員会教育長通知にて遺跡名称の変更(北田東禅寺裏古墳群)、遺跡範囲の変更が新たに周知された。近年の樹木伐採が1号墳付近まで進んでおり、早急な対策が必要である。

## 第10節 小結

### 第1項 浄土寺古墳群出土遺物と古墳群の年代

浄土寺古墳群の時期決定の前提となる出土遺物について確認する。

1号墳出土遺物は、須恵器壺1点、鉄鏃1点、刀子1点、管玉1点、棗玉1点であり、土器、装身具、武器・工具の構成である。須恵器壺の年代はTK43型式の範疇で考えられている(畠中1986)。玉類や武器・工具などの鉄製品についても若狭地方の当該期小古墳出土遺物に見られる構成である。

2号墳は石室羨道部閉塞石下から出土した須恵器杯G1点、杯G蓋2点などの出土が知られているが(畠中1986)、今回の調査で墳丘背後から須恵器杯G蓋1点、土師器甕1点、製塩土器2点が出土するなど新資料を蓄積した。石室羨道部閉塞石下から出土したとされる須恵器杯類は杯Gのみで構成され、杯Hの共伴は見られない。器形、調整から見て飛鳥Ⅱ型式並行期、7世紀中葉の年代が考えられる。なお、墳丘背後から出土した須恵器杯G蓋は羨道部出土杯G蓋から若干後出するものと思われる。

3号墳羨道部から出土した須恵器杯は、杯Gのみで構成される。2号墳羨道部出土須恵器杯Gと比べ粗雑化が認められ、後出するものと思われるが、さほど降らない時期、飛鳥Ⅱ型式並行期、7世紀中葉の幅の中で捉えておきたい。3号墳石室開口部から墳丘外護列石下にかけて須恵器杯G2点、杯A1点、杯G蓋2点、杯B蓋1点、長頸壺1点、土師器杯1点、墳丘背後の堆積土から土師器杯1点が出土している。これらの土器群はさらに後出する一群であり、飛鳥Ⅲ～Ⅳ型式の範疇で捉えられる。複次的な追葬に伴うものと考えられ、必ずしも一括資料ではない。

以上のことから、浄土寺古墳群の年代を考えれば、浄土寺1号墳の造営年代は6世紀後葉が想定される。なお、1号墳から出土した須恵器碗の存在から古墳造営以後、後世の石室利用が窺える。

2号墳は石室羨道部閉塞石下から出土したとされる須恵器杯類が初葬に伴うものとは考えにくく、実質的な古墳造営の時期が7世紀第2四半期頃まで遡ることを含みながらも7世紀中葉の幅の中で捉えたい。

3号墳は墳丘、横穴式石室構造から見ても2号墳より後出することは明らかであり、羨道部出土須恵器杯Gについても2号墳出土資料よりも後出要素が認められることから、2号墳から若干遅れて、7世紀中葉には古墳造営を終えているものと考えられる。

2号墳では昭和52年調査の石室開口部付近排土から土師器杯片1点が出土しているが、精緻な胎土を持ち、外面にへら磨きを残すことから畿内産(系)土師器と称されるものである可能性が高い。また3号墳においても羨道部出土須恵器からさらに後出する7世紀後半代の土器群が石室開口部、あるいは墳丘背後から出土しており、2号墳、3号墳ともに追葬行為、墓前祭祀が7世紀後半まで継続したものと思われる。

古墳群の時期については、これまで1号墳は6世紀末葉、2号墳、3号墳は7世紀第2四半期にほとんど時期を違えず造営され、7世紀後半まで継続的に追葬、古墳祭祀が行われたものと述べているが(美浜町教育委員会 2005)、上記のとおり若干の修正をしておきたい。

## 第2項 敦賀半島における浄土寺古墳群横穴式石室の位置付け

浄土寺古墳群の横穴式石室構造については、浄土寺1号墳は6世紀後葉に敦賀半島東岸に造営された穴地蔵3号墳、尾尻1号墳、名子古墳、色古墳の横穴式石室と総じてよく似た構造を持ち、石棚を架設する浄土寺2号墳、3号墳においては穴地蔵1号墳、白塚古墳、鳩原2号墳といった敦賀半島周辺域に分布する石棚を有する横穴式石室と共通する石室構造であることを確認し(美浜町教育委員会 2005)、この石室定型化の背景に浄土寺1号墳の段階、6世紀後葉から続く小地域ごとの紐帯が引き継がれているものと考えた(美浜町・美浜町教育委員会 2006)。基本的な見解に変更はないが、浄土寺古墳群、あるいは敦賀半島における横穴式石室構造と動向を再整理する。

浄土寺1号墳は平面形が無袖式、玄室奥壁を1石で構成し、側壁は目地を揃えながら横長手積みするという石室構造を持つ。敦賀半島における同時期の横穴式石室と比較すると、6世紀後葉に敦賀半島東岸に点的に造営された尾尻1号墳、名子古墳、色古墳などの横穴式石室と、ともすれば同一石室造営者の手によるものではないかと思われるほど酷似する。これらの石室は無袖型の床面平面形を呈し、基本的には奥壁を鏡石状に1石を配し、両側壁はほぼ同法量の石材を明確に目地を揃えながら複数段に積むという特徴がある(川村 1992)。ただし穴地蔵3号墳に関しては、石室構造は同様の傾向があるものの、奥壁を1石で占める割合は1/2程度に留まり、側壁基底石は大ぶりの石材を用い、さらに玄門立柱石、礫床を持つなど(川村 1990)、先の古墳より時期的には若干先行し、また優位性を保持した可能性がある。同じく6世紀後半代、敦賀半島東岸の沓丸山古墳は天井部まで達するかのような玄門立柱石を両側壁に用いた北部九州系石室として知られているが、敦賀半島においては沓丸山古墳、穴地蔵3号墳、そして穴地蔵3号墳を起点に尾尻1号墳、名子古墳、色古墳とともに浄土寺1号墳が造られるという造営順序が窺える。

このように敦賀半島域では6世紀末葉段階に石室構造が定型化するものと考えられるが、6世紀後葉代の敦賀半島域の小地域首長層であったと考えられる穴地蔵3号墳被葬者を中心とした敦賀半島浦々の小地域集団の密接な関わりを窺うことができる。この背景には土器製塩のみならず、敦賀半島沿岸地域を束ねる何らかの社会的動向を想定する必要がある。

7世紀以後、敦賀半島周辺域で造営された穴地蔵1号墳、白塚古墳、鳩原2号墳、そして浄土寺2号墳、3号墳についても同様の流れを見ることができる。

浄土寺2号墳の構造は、内側に迫り出す玄門立柱石を持つ擬似両袖式の平面形を呈し、規格的な石材を両側壁基底石として縦位に用い、やや小ぶりとなる石材を複数段に目地を揃えながら積む。また、玄室後方部の側壁基底石上に石棚を架設し、奥壁は石棚を境として上下に1石ずつで構成する。

石室構造から見て、穴地蔵1号墳は奥壁の1石構成、石室石材の大型化が顕著であるが、穴地蔵3号墳と連続性を保ち、従前の指摘どおり3号墳→1号墳へと継続したことが窺える。この地域における6世紀後葉段階の石室構造の流れにある穴地蔵1号墳の横穴式石室に石棚が導入されることに対して、白塚古墳、鳩原2号墳においては石室も小規模となり、石室側壁基底石として玄室、羨道部ともに比較的少量を統一した石材を縦位に据えるなど穴地蔵1号墳とはまた異なる石室構造を持つ。なお、白塚古墳は石室側壁面構成が穴地蔵1号墳の流れにあるものの、玄門立柱石で擬似両袖を形成する点は浄土寺2号墳に強い影響を及ぼす。石棚の架設と連動し、7世紀以後の石室構造は穴地蔵1号墳から白塚古墳(鳩原2号墳)へと変化を辿る中で浄土寺2号墳において最も規格的となり、退化傾向を示しつつ浄土寺3号墳まで継続する。

これらの石棚を有する古墳の造営時期は7世紀前半にまとめ、その中でも穴地蔵1号墳への導入を契機として白塚古墳→浄土寺古墳群への石棚の波及が想定されているが(美浜町教育委員会 2005)、石室構造から見れば穴地蔵1号墳への石棚の導入以後、石室構造の変化と相まってかなり計画的に石棚を周辺に波及させたことが窺える。網谷克彦氏は穴地蔵1号墳使用石材の法量規格の検討から石材採掘加工業の分離、独立が敦賀平野に存在したことを想定したが(網谷 2005)、穴地蔵1号墳への石棚の導入を契機として石室造営集団の再編があったのかも知れない。穴地蔵1号墳の後に造営された白塚古墳、浄土寺2号墳、鳩原2号墳の時期差はほとんどないものと考えられる。石棚の当地への波及とも関連して7世紀前半期においても敦賀半島沿岸地域の再編成を睨んだ社会的動向を想定する必要があるものと思われる。

### 第3項 若狭地方における浄土寺古墳群横穴式石室の位置付け

ここではもう少し視野を広げて、若狭地方において浄土寺古墳群の年代、6世紀後葉から7世紀前半代に造られた横穴式石室の構造を概観することで浄土寺古墳群横穴式石室の位置付けを行う。

敦賀半島と同様な地形条件である大島半島において、6世紀後葉には神田10号墳、11号墳、畑村古墳が造られる。石室構造は奥壁および側壁の基底石に大型石材を縦位または横位に配し、その上に一回り小型の石材を2～3段に横位に積み、玄門部で一方の側壁のみから立柱石を内側に突出させるといった形態の片袖式石室が分布する。7世紀前半にはヒガンジョ4号墳、吉見浜古墳が造られ、石室構造は6世紀後葉段階の石室とほぼ同様であるが、明確な袖石を持たない無袖式石室へと変化する。

若狭西部、佐分利川流域においては、6世紀後葉の石室構造として奥壁、側壁の基底石に大型石材を横位に配し、上部を一回り小型の石材で2～3段に横位に積むという共通性が基本的に認められるが、滝見10号墳、鹿野1号墳では一方の側壁から立柱石を突出させる片袖式石室であることに対して、山の神1号墳は明確な袖石をもたない無袖式石室で、両者が並存する。7世紀以後、内陸部の大飯神社2号墳、滝見11号墳、山田1～3号墳、鹿野今谷古墳、鹿野7号墳などに見られるように、奥壁が1石で構成され、側壁に大型の基底石を横位に配し、上部を2～3段に横位に平積みする無袖式石室が共通して造られる状況が確認できることから、この段階には佐分利川流域で定型化した無袖式石室が造られた動向が見て取れる。

このように大島半島域、佐分利川流域では6世紀後葉には立柱石を突出する片袖式石室と無袖式石室が併存し、7世紀に入ると定型化した無袖式石室が一様に造られるという地域の特徴が指摘できる。

一方、若狭地方中央部の北川流域は古墳時代中期以後、大首長墳が集中する地域であり、6世紀末葉には加茂北古墳に巨石を用いた畿内型とも言える両袖式横穴式石室が造られる。多田池町1号墳のような小規模墳であっても大型石材で構成する両袖式石室が造られ、畿内型の横穴式石室の採用はこの地域に集中する。ただし、7世紀以後、明確な首長墳が確認できず、その後の展開は不明である。

以上のことから、前時代まで古墳造営の中心地であった北川流域では7世紀に入ると古墳造営が停滞することとは対照的に、海岸部に土器製塩遺跡を控える敦賀半島や大島半島、佐分利川流域においては7世紀以後も継続的に古墳が造られる状況が窺える。また、7世紀以後、大島半島、佐分利川流域などの小地域ごとに、地域を特徴付ける構造を持つ横穴式石室が構築されている。浄土寺古墳群における横穴式石室構造はこのような若狭地方沿岸部の小地域に共通して認められる現象の中で捉えられる。

### 第4項 浄土寺古墳群墳丘の位置付け

浄土寺1号墳の墳丘構造は不明であるが、浄土寺2号墳、3号墳はともに径7m強の円墳である。2号墳、3号墳を見た場合、若狭地方において7世紀前半に造営された古墳と比較しても決して大規模墳ではない。若狭地方西部、佐分利川流域や大島半島を視野に置く大飯神社古墳群、滝見古墳群などは主に10m

前後から10mを超える円墳で構成されることに対し(赤澤2003・石部他1966)、大島半島に造営されるヒガンシヨ古墳群などは小円墳で構成され(石部他1966)、浄土寺2号墳、3号墳は後者である海浜部所在の群集墳と比較的近い墳丘規模を有している。

墳丘の断ち割り調査によって2号墳、3号墳の墳丘築成の工程、特徴を把握した。まず、古墳造営範囲の地山、岩盤を掘削する。尾根側の掘削範囲は作業量の軽減化によるものか最小限に留め、石室裏込めに相当する部分では軟岩盤を墓坑状にさらに深く掘削する。一方、谷側では石室床面設置レベル付近まで大規模に地山、岩盤を削平し、石室床面設置レベルから連続する平坦面を造り出す。その後、石室基底石掘り方を掘削し、根固石を用いながら石室基底石を設置するとともに、2号墳では墳丘外護列石基底石が設置され、墳丘土が水平に盛土される。さらに、石室玄室に石棚を架設し、順次、石室2段目以上、2号墳では外護列石2段目以上、3号墳では外護列石基底石を積みながら、墳丘土を充填する。天井石を架設後、さらにマウンド状に盛土を行ったものと考えられる。

浄土寺2号墳、3号墳の墳丘外護列石を見ると、特に2号墳の列石が特徴的である。外護列石の石材法量や石材の積み方は横穴式石室側壁構成とよく似ており、古墳築造段階の構築意図を窺わせるが、石室奥壁、側壁基底石は定型化した加工石材である可能性が高いことに反して、外護列石基底石は岩盤から切り離れた自然礫をそのまま使用している。一方、2号墳に後出する3号墳の外護列石は基底石というべき大石材の使用はないものの、2号墳外護列石2段目以上の構造とよく似る。

若狭地方の後期群集墳における墳丘外護列石の採用例は少なく、大飯神社2号墳、阿弥陀寺4号墳などに見られるのみである(赤澤2003・本報告同章第9節第1項)。その形態は、石室開口部から直線的に左右に列石が展開し、谷側、あるいは斜面の低い側において弧状に背後に至る平面形を持ち、小ぶりの石材を横位に1、2段積みすることで構成する。墳丘外護列石採用墳は山間部の斜面地に立地し、標高が低い側の墳丘裾部のみ列石が認められることから墳丘土の流失、墳丘崩落を防ぐための構造物として構築されたことが窺えるが、浄土寺古墳群では退化傾向を示しながらも2号墳から3号墳へと引き継がれることに対して、大飯神社古墳群では2号墳と近い時期に近接して造られた他の数基の古墳に列石は採用されず、阿弥陀寺古墳群では最も後出する4号墳のみに採用されているなど、7世紀前半まで継続する群集墳内で7世紀以後に造営された全ての古墳に列石が採用される状況は認められない。あるいは全く外護列石を墳丘に伴わない群集墳も存在する。当地域の群集墳における墳丘外護列石の採用には古墳埋葬者の優位性や古墳地形条件などが複雑に関わっているものと考えられる。浄土寺古墳群、阿弥陀寺古墳群という敦賀半島西岸先端に近接して所在する7世紀以後に造営された古墳に墳丘外護列石が採用された背景には両古墳群造営主体の密接な関係が想定される。とは言いながらも、若狭地方において数少ない墳丘外護列石を有する古墳の中で、浄土寺2号墳に見られる極めて特異な構造を持つ外護列石を伴うものは見られず、浄土寺2号墳の外護列石の採用にあたっては若狭以外の他地域からの外的な影響が反映されている可能性が高い。浄土寺古墳群と同様に横穴式石室に石棚を架設し、古墳造営時期も近い穴地藏1号墳、白塚古墳、鳩原2号墳では、白塚古墳に検討の余地を残しながらも(川村1992)、墳丘外護列石を伴わないことから当地への石棚の波及との関連性は不明である。

#### 第5項 敦賀半島周辺に分布する石棚の系譜と機能

敦賀半島周辺で横穴式石室に石棚が架設された古墳は敦賀市穴地藏1号墳、白塚古墳、鳩原2号墳、そして浄土寺2号墳、3号墳の5基である。穴地藏1号墳、白塚古墳、鳩原2号墳については既に発掘調査が行なわれ、石室構造や出土遺物が明らかとなっている(川村1992、川村1997、川村2001)。

既報告を交えて敦賀半島周辺に分布するこれらの石棚を概観すると、① 石棚は基本的には玄室後方部

の側壁基底石に載せるように設置され、石屋形のように側壁が外に開かずそのまま石棚上に側壁が積まれること、② 石棚は玄室奥壁には決して組み込まれないこと、③ 1石ないしは2石の板石状石材を平滑に整え、石棚として架設すること、④ 石棚を架設することで玄室平面空間の1/2以上が石棚で占められること、⑤ 石室高の大小に関わらず石棚設置レベルは床面から1m以内に収まることを最大公約数的な共通項として挙げることができる。また、部分的な共通性を探れば、① 石室玄門部に明確な立柱石を持つ浄土寺古墳群、白塚古墳、あるいは右側壁に立柱石状の基底石を持つ穴地蔵1号墳では立柱石上端と石棚設置面とが一致すること、② 穴地蔵1号墳、白塚古墳、鳩原2号墳では側壁の石棚架設部分では石棚上に石棚下側壁基底石と同等の法量の石材を1段に積むことが挙げられる。

石棚の敦賀半島周辺への波及については、近年いくつかの視点が提示されている。

蔵富士寛氏は石棚の発生から各地への拡散までを3つの段階に分け、6世紀前半段階の岩橋千塚古墳群を中心とした石棚の出現および亀岡盆地、吉野川上流域、九州北部への展開、6世紀後半段階の北近畿を含めた近畿周辺部への展開、6世紀後葉から7世紀以後の段階の瀬戸内沿岸、あるいは敦賀半島周辺への拡散があったことを整理し、3期の段階には在地化した石室に石棚が採用されていることなどを指摘した(蔵富士2004、美浜町教育委員会2005)。蔵富士氏は敦賀半島周辺への石棚の波及については、丹後地域、京丹後市新戸古墳、高浪古墳、あるいは湖西地域、高島市齊頼塚古墳など、前段階の周辺地域に拡散した石棚、石屋形との関係から検討する必要性を説く。

一方、中村修氏は石室内における床面から石棚までの高さを検討することで鳩原2号墳の石棚が「低い石棚」であるものとし、和歌山県から岡山県にかけての瀬戸内海沿岸地域に「低い石棚」が分布することから、紀伊→大和(三里古墳)→吉備および敦賀半島周辺(鳩原2号墳)へと波及し、敦賀半島周辺における石棚の拡散契機を鳩原2号墳に求め、紀氏、平群氏が関与したことを論じる(中村2004、中村2005)。

山中章氏は7世紀における丹後、丹波地域の海部の再編成を検討し、前段階、6世紀後半に若狭地方の西に位置するこの両地域に石棚が拡散した流れの中で、若狭地方中心部を挟んだ東部、敦賀半島においても何らかの政治的意図のもと石棚が拡散したことを暗示した(美浜町教育委員会2006)。

中司照世氏は7世紀の社会動向から見て、韓半島出兵に関わった海浜集団、海人の交流から敦賀半島に石棚がもたらされたことを予察し、その背景に阿曇氏の存在を考慮した(美浜町教育委員会2005)。

このように敦賀半島周辺域への石棚の波及背景を考える上で、いくつかの重要な視点が提示されているが、今回の調査を踏まえて考えれば、第2項で既述したとおり石棚を外して単純に石室構造を見ても、石棚を有する5基の古墳の中で6世紀後葉に在地化した石室構造の流れにある穴地蔵1号墳が最も先行するものと考えられ、浄土寺2号墳、白塚古墳のような石室に石棚を架設することを目的とした規格的な石室構造とは言いがたいことから、穴地蔵1号墳に関しては決して十分ではない情報をもとに在地の石室造営集団が在地の横穴式石室に石棚を取り込んだものと考えられる。6世紀後半から7世紀前半において穴地蔵古墳群被葬者が敦賀半島および敦賀平野の中で果たした役割を検討していくことが重要であるものと考えられる。現段階では、7世紀前半に敦賀半島周辺に求められた政治的、社会的要請の中で地域の再編成が進んだことを石棚が示しているものと考えている。

敦賀半島周辺に分布する石棚の機能については、これまであまり触れられてはいない。蔵富士寛氏は敦賀半島周辺に分布する石棚について、石棚の架設範囲が玄室平面空間の大半を占め、また石室上下空間の内、上部空間のほとんどが閉塞されてしまうことから石棚上面に棺を置く機能は考えにくいことを指摘した(美浜町教育委員会2005)。

中村修氏は鳩原2号墳を「低い石棚」、穴地蔵1号墳他3古墳を「高くも低くもない棚」として、低い石棚は石棚の上に棺を置き、高くも低くもない石棚については石棚の上を棚、下を棺の覆いとして使用し

た「祭祀棚」と位置付けた（中村 2004、中村 2005）。

中村氏の低い石棚、祭祀棚などの定義はさておき、浄土寺 2 号墳、3 号墳、白塚古墳においては玄門立柱石上端と石棚架設面のレベルが一致し、石棚下の奥壁、側壁構造が規格的な石材を使用し、明らかに石棚上部の石積みとは区別されることから、石室構築段階には既に石棚下面の使用が明確に意識されたものと考えられる。特に浄土寺 2 号墳、3 号墳の場合は蔵富士氏の指摘どおり石棚上面の空間使用はかなり限定的にならざるを得ない。また、白塚古墳では石棚下、床面から初葬段階に伴うとされる須恵器杯 H 蓋、耳環が出土しており、追葬段階に石棚の前面に石台を設置し、石棚上面を棺台として使用したことが知られている（川村 1992）。敦賀半島周辺に分布する石棚については少なくとも石棚架設段階には石棚を覆いとして、下の空間を棺として使用した状況が窺える。石棚上面を使用した痕跡は、当初から想定されていない事例として石台の追加が白塚古墳に見られるのみである。浄土寺 3 号墳では石室羨道部床面から須恵器杯 G が出土しているが、少なくとも浄土寺古墳群においては追葬に際しても石棚上面の使用はなかったものと思われる。

#### 第 6 項 浄土寺古墳群の被葬者集団と古墳群の位置付け

6 世紀から 7 世紀前半に海浜部の浜堤、海岸段丘に展開する土器製塩遺跡とその背後の尾根筋、谷筋に造営される小群集墳との密接な対応関係は、敦賀半島のみならず、若狭湾沿岸部に広く見られる事象であり、この小群集墳被葬者像を考える上で示唆的である。浄土寺古墳群では 2 号墳墳丘背後裾部から出土した製塩土器が古墳被葬者集団の性格を端的に物語っており、土器製塩に従事した集団が直接的に想起される。古墳群の所在から見れば、土器製塩遺跡と目される眼下の竹波遺跡にその経営母体が求められるが、土器製塩遺跡としての竹波遺跡の調査事例はなく、遺跡の時期、内容が不明である。浄土寺古墳群と竹波遺跡との直接的な対応関係の把握は今後の課題である。

敦賀半島周辺を含めた若狭地方において、古墳石室内に製塩土器を埋葬する事例としては敦賀市衣掛山 3 号墳、15 号墳、沓丸山古墳が（川村 1988、川村 1992）、古墳群内に製塩土器が持ち込まれる事例としては大飯神社古墳群が知られる（赤澤 2003）。海浜部において小規模な古墳造営を行う土器製塩集団に対して直接的な掌握権を有し、周辺小地域を含めた小平野単位の地域支配を行った小首長層が製塩土器を保有する衣掛山古墳群、大飯神社古墳群、あるいは興道寺古墳群（興道寺遺跡）被葬者集団に求められ、土器製塩に対して主体的立場を果たしたという指摘は既にされている（赤澤 2003、美浜町教育委員会 2005 など）。敦賀半島周辺においても沓丸山古墳から浄土寺古墳群に至る 6 世紀後葉から 7 世紀前葉の海浜部小群集墳の被葬者集団が直接的に土器製塩に従事したことは古墳群周辺に所在する土器製塩遺跡の存在を考えれば、異論はないところであろう。

浄土寺古墳群内の小支尾根上平坦地（4 トレンチ）から出土した破碎土師器甕に着目すると、この甕は 7 世紀前葉に若狭湾岸、あるいは由良川流域に点的に広がり、7 世紀後半以後、若狭地方、丹後地方、丹波地方に広く展開する有段口縁を持つものであり、研究者において「段々口縁甕」「段状口縁甕」と呼称される土器である。この甕は若狭湾岸において土器製塩と密接に関わる甕であることが田代弘氏によって既に口頭で示唆されているが（美浜町教育委員会 2006）、若狭地方では小浜市岡津遺跡、美浜町松原遺跡などの 7 世紀前半に盛行する土器製塩遺跡や、おおい町神田 10 号墳、山の神 1 号墳、滝見 10 号墳など海浜部所在の古墳群石室内に副葬されるなど（石部 1966）、浜瀬Ⅱ B 式製塩土器の大型化が顕著となる 7 世紀前葉、中葉の段階において土器製塩に関連する諸遺跡から出土する傾向がある。この土師器甕の出土も併せて考えれば、浄土寺古墳群被葬者層の海浜性集団としての一側面を示しているものと思われる。

浄土寺古墳群被葬者集団については以前、海浜集団、海部としての位置付けが試みられた（美浜町教育



写真17 浄土寺古墳群調査後

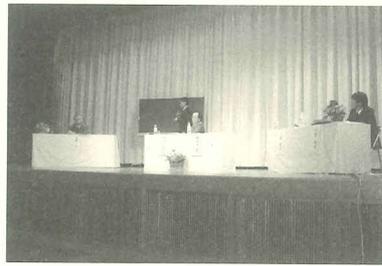


写真18 シンポジウムの様子



写真19 現地説明会の様子

委員会 2005)。前項で触れたように敦賀半島周辺における6世紀後葉の石室構造の定型化、7世紀前半における石柵の波及など、若狭湾岸の中でも明確な地域性が表出する。前者は、本章第2節で山口が概述したように6世紀後葉から末葉の段階に若狭地方の小地域ごとにその各地域で特徴的な横穴式石室が構築された動向と合致し、若狭湾岸で普遍的に見られた現象と言える。また後者、7世紀前半の敦賀半島周辺域への石柵の波及については土師器有段口縁甕の若狭湾岸各地への点的な波及と連動する動きと考えられる。

近年、山中章氏は各地の海浜性小国を取り上げて律令社会の編成に向けた部民制、屯倉の成立過程について精力的な研究を進められている。敦賀半島周辺においては前者が例えば海部などの部民編成、後者が屯倉の成立を暗示する可能性も考えられよう。このことについては別稿で改めて論じたい。

#### 第7項 浄土寺古墳群の今後の活用

浄土寺2号墳、3号墳は調査後、墳丘上に粗砂を敷いた後、調査排土で埋め戻しを行い、また石室については石室上部、石柵が観察できるよう、石室下部を土嚢により充填することで保護措置を取った。なお、3号墳石室羨道部については調査によって両側壁ともに谷側に傾いていることが判明したことから全て土嚢により充填した。

浄土寺3号墳調査段階には、平成16年11月27日に発掘調査現地説明会を、翌日28日には美浜町歴史シンポジウム「浄土寺古墳群を考える」を開催し、また調査以後、地元の丹生小学校、美浜中学校丹生分校が社会科、総合学習の時間などの授業で実際に現地を訪れ、調査後に作成したパンフレットを片手に古墳を見学するなど、遺跡が有効に活用されつつある。今後、広く遺跡が普及啓発されることを期待したい。

浄土寺古墳群は敦賀半島周辺のみならず福井県内で唯一、1古墳群内の複数基の古墳に石柵が架設された希少な遺跡である。今後、町指定あるいは県指定史跡として指定を受け、遺跡を末永く保存できるよう、関係機関、関係者のさらなる御理解、御協力をお願いしたい。

#### 〔引用・参考文献〕

- 赤澤徳明編『滝見古墳群・大飯神社古墳群・山田古墳群・山田中世墓群』 2003 福井県教育庁埋蔵文化財センター
- 網谷克彦「穴地藏古墳横穴式石室石材試論」『気比史学』結成25周年記念誌 2005 気比史学会
- 石部正志編『若狭大飯 一福井県大飯郡大飯町考古学調査報告一』 1966 大飯町
- 小浜市『小浜市史』通史編上巻 1992
- 川村俊彦編『衣掛山古墳群』 1988 敦賀市教育委員会
- 川村俊彦編『穴地藏古墳群 松原遺跡』 1990 敦賀市教育委員会
- 川村俊彦編『西浦古墳群』 1992 敦賀市教育委員会
- 川村俊彦「鳩原1、2号墳」『発掘された北陸の古墳報告会』資料集 1997 まつおか古代フェスティバル実行委員会
- 川村俊彦編「第三章 発掘調査」『穴地藏古墳 福井県指定史跡保存修理事業報告書』 2001 敦賀市教育委員会
- 川村俊彦「事例報告2 穴地藏古墳の調査とその活用」『浄土寺古墳群を考える』シンポジウム資料集 2004 美浜町教育委員会
- 蔵富士寛「事例報告3 石柵を有する横穴式石室墳」『浄土寺古墳群を考える』シンポジウム資料集 2004 美浜町教育委員会

杉本泰俊「第三章 社寺にみる金工品・石造物 五 その他の塔 1 丹生 浄土寺跡 無縫塔」

『わかさ美浜町誌』第三巻 拝む・描く 2005 美浜町誌編纂委員会編

中村修「低い石棚の考察」『立命館大学考古学論集』IV 2005 立命館大学考古学論集刊行会

中村修「低い石棚の考察」『古代史の海』第36号 2004 「古代史の海」の会

畠中清隆「116 浄土寺古墳群」『福井県史』資料編13 1986 福井県

北陸中世考古学研究会編「越前・若狭の石仏・石塔」『第13回北陸中世考古学研究会資料集 中世北陸の石塔・石仏』 2000

本間宗次郎(諦観)『古観』 1955

松井政信・古川登「三方郡美浜町浄土寺遺跡出土の遺物について(その1)」『福井考古学会会誌』創刊号 1983

福井考古学会

美浜町教育委員会編『美浜町歴史シンポジウム記録集3 浄土寺古墳群を考える 敦賀半島周辺の石棚と海の民』 2005

山口充「美浜町内出土の後期弥生式土器と土師器」『福井考古学会会誌』第2号 1984 福井考古学会

報告 番号	次敷/Tr	遺構・層位	種 別	器 種	法量 (cm)				残存部位	製作技法・調整・施文・文様	色調・焼成	備 考
					口径	器高	底径	その他				
1	1号墳	石室	須恵器	椀	14.3	2.9	6.4		完形	底部外面へラ切り後未調整 口縁にひずみ生じる	青灰色・良好	昭和52年出土
2	1号墳	石室	須恵器	甌			(14.3)	体部径:10.6	口縁部欠損	体部外面刺突文 頸部外面刺突文・放射線文 底部外面回転へラ削り	暗灰色・良好	昭和52年出土
3	1号墳	石室	鉄製品	鉄鎌				全長:14.4 鎌身:9.2 最大幅:2.5	完形			昭和52年出土
4	1・2号墳		鉄製品	鉄鎌				残存長:5.0	破片			昭和52年出土
5	1・2号墳		鉄製品	鉄鎌				残存長:3.1	破片			昭和52年出土
6	1・2号墳		鉄製品	鉄鎌				残存長:4.3	破片			昭和52年出土
7	1号墳	石室	鉄製品	刀子				残存長:17.0	先端部欠損			昭和52年出土
8	1号墳	石室	鉄製品	刀子				残存長:10.5	刀身の一部			昭和52年出土
9	1・2号墳		鉄製品	刀子				残存長:4.3	破片			昭和52年出土
10	1号墳	石室	玉	甕玉				長さ:1.85 径:1.1 重さ:2.0g	一部欠損			昭和52年出土
11	1号墳	石室	玉	管玉				長さ:2.6 径:0.95 重さ:6.0g	完形			昭和52年出土
1	2号墳	石室羨道部	須恵器	杯G蓋	8.8	3.2		受け部径:10.5	完形	天井部回転へラ削り	青灰色・良好	昭和52年出土
2	2号墳	石室羨道部	須恵器	杯G蓋	8.7	3.0		受け部径:10.4	完形	天井部回転へラ削り	灰色・良好	昭和52年出土
3	2号墳	排土	須恵器	杯G蓋		(2.7)			天井部1/3	天井部回転へラ削り	青灰色・良好	昭和52年出土
4	2号墳	排土	須恵器	杯G蓋	(10.2)	(1.3)			口縁部1/4	口縁部内外面回転ナデ	暗灰色・良好	昭和52年出土
5	2号墳	閉塞石下	須恵器	杯G	9.3	3.9	6.5		完形	底部外面へラ切り後未調整	暗灰色・良好	昭和52年出土
6	2号墳	排土	須恵器	杯G		(2.6)	6.5		体部~ 底部1/2	底部外面へラ切り	青灰色・良好	昭和52年出土
7	2号墳	排土	須恵器	杯G	(10.2)	(3.2)			口縁部~ 体部1/5	底部外面へラ切り後未調整	暗灰色・良好	昭和52年出土
8	2号墳	墳丘背後	須恵器	杯G蓋		(2.5)			天井部1/3	天井部回転へラ削り	暗灰色・良好	
9	2号墳	墳丘背後	土師器	甕	10.5	10.3			底部一部 欠損	体部外面縦ハケ 内面斜め上方への削り	明褐色・良好	
10	2号墳	墳丘背後	製塩土器		11.0	9.8			ほぼ完形	輪積み痕 直径3~10mmの礫多く含む	明褐色・良好	
11	2号墳	墳丘背後	製塩土器		10.5	10.9			ほぼ完形	口縁部内外面指頭圧痕 直径1~5mmの礫多く含む	褐色・良好	
1	3号墳	石室羨道部	須恵器	杯G	10.2	3.3	6.8		完形	底部外面回転へラ切り未調整 直径1mmの雲母片多く含む	灰白色・良好	
2	3号墳	石室羨道部	須恵器	杯G	9.9	3.6	6.6		完形	底部外面回転へラ切り未調整 直径1.5mmの雲母片多く含む	灰色・良好	
3	3号墳	西側墳丘上	須恵器	杯G		(2.8)	(5.3)		口縁部欠損	底部外面回転へラ切り未調整	灰白色・良好	
4	3号墳	石室開口部	須恵器	杯G蓋	(12.5)	(2.7)			口縁部~ 天井部1/2	口縁部内外面回転ナデ 全体にひずみ生じる	青灰色・良好	
5	3号墳	石室開口部	須恵器	杯G	(10.4)	(3.3)			口縁部~ 体部1/4	口縁部~体部内外面回転ナデ	青灰色・良好	
6	3号墳	石室開口部	須恵器	杯G蓋	11.4	2.9			完形	天井部回転へラ削り 外面2/3に自然粘付着	灰白色・良好	
7	3号墳	石室開口部	須恵器	杯G	11.0	4.0	6.5		体部一部 欠損	底部外面回転へラ切り未調整 直径1mmの雲母片多く含む	灰白色・良好	
8	3号墳	石室開口部	須恵器	杯B蓋	15.4	2.8			口縁部一部 欠損	天井部回転へラ削り	灰白色・良好	
9	3号墳	石室開口部	須恵器	杯A	14.3	3.5	8.0		ほぼ完形	底部内面不定方向ナデ 直径1mmの雲母片多く含む	青灰色・良好	
10	3号墳	石室開口部	須恵器	長頸壺					体部1/4	体部下へラ削り	青灰色・良好	
11	3号墳	石室開口部	土師器	杯	9.9	(2.7)	(3.5)		底部一部 欠損	体部~底部外面へラ磨き	明褐色・ やや不良	
12	3号墳	墳丘背後	土師器	杯	12.2	3.3	(4.0)		口縁部・底 部一部欠損	体部~底部外面へラ磨き	褐色・良好	
1	4Tr	地山直上	土師器	甕	(18.4)				口縁部・ 体部一部	口縁部内面有段	暗褐色・良好	

表14 浄土寺古墳群出土報告遺物一覧表

## 第5章 今市遺跡

### 第1節 遺跡の概要

今市遺跡（福井県遺跡番号 30032）は北緯 35 度 37 分 44 秒、東経 135 度 58 分 52 秒付近、福井県三方郡美浜町佐田小字今市他に位置する。遺跡は敦賀半島西岸基部付近に広く分布する海岸段丘上、金瀬川左岸河口部付近に所在し、金瀬川対岸に下田遺跡が、国道 27 号線を挟んだ南東側には後述する毛ノ鼻遺跡が所在するなど、この海岸段丘上には原始、古代遺跡の密な分布が認められる。

今市遺跡における発掘調査事例はないが、律令期の須恵器、土師器、製塩土器片が美浜町教育委員会による町内遺跡分布調査において採集されており、古代集落あるいは土器製塩遺跡の存在が窺えるが、森川昌和氏らにより採集縄文遺物が報告されているように（森川・網谷 1986）、縄文後期遺跡としても古くから知られている。報告によれば、標高 3m 前後に遺物包含層が存在し、昭和 40 年代に若狭考古学会が縄文後期末の深鉢、浅鉢を 10 点ほど採集している。

なお、森川氏らにより報告されている今市遺跡とは美浜町佐田、金瀬川河口付近の両岸の海岸段丘上に展開する縄文時代から古代まで続く下田遺跡と今市遺跡を指す。従前、この両遺跡が今市遺跡として周知され、研究者らに認識されていたが、平成 12（2000）年の『福井県遺跡地図』改訂に伴い、金瀬川右岸側



第 142 図 今市遺跡調査位置図（縮尺 1/5,000）

に展開する遺跡については小字地名を採用して下田遺跡と遺跡名称が変更されている。繰り返しになるが、現在周知されている下田遺跡、今市遺跡を合わせて従前の今市遺跡を指す。

## 第2節 調査の経緯、経過および方法

調査地の地番は福井県三方郡美浜町佐田 59 号 14 番地。調査地は遺跡中心部のやや西寄りに位置する。今市遺跡の現状は、国道 27 号線沿いに一部建物が立つものの基本的には田畑からなり、遺跡の遺存状況は良好であると思われる。ただし、近年、田畑の休耕が目立つなど、将来的な遺跡の荒廃化が危惧されたことから、遺跡の一部において内容確認調査を実施した。

今市遺跡では、金瀬川右岸河口部の下田遺跡とともに海岸段丘面に広く遺構、遺物が分布していることが予測されたことから、今回の調査では調査地の基本層序を確認することを主な目的とした。海岸段丘面には幾多にも及ぶ土砂堆積があったものと考えられ、また海岸段丘崖断面から縄文土器が採集されていることが報告されているなど、縄文時代以後、遺跡で採集される遺物である古代の時期まで生活面が積層していることが考えられた。このことから、今回の調査では縄文時代の遺構、遺物の確認に留まらず、古代集落あるいは土器製塩遺跡としての様相確認も副次的な目的として休耕地に 2 箇所のトレンチを設定した。トレンチの規模は、1 トレンチ東西 11.6m、幅 4.5m～5.0m、2 トレンチ東西 10.55m、幅 4.3m～4.7m、計 91 m<sup>2</sup>である。

調査は平成 15 年 9 月 1 日から平成 15 年 9 月 30 日まで実施。以下に調査日誌を抄録する。

9 月 1 日 調査機材搬入、調査区設定、表土掘削。9 月 2 日 上層面において人力精査に着手。土坑・小穴を検出。9 月 8 日 調査図面作成に着手。9 月 9 日 遺構掘削に着手。1 トレンチ検出土坑が土墳墓であることを確認。9 月 10 日 西島伸彦氏（小浜市教育委員会）ら来跡。9 月 11 日 植野浩三氏（奈良大学文学部文化財学科）ら来跡。9 月 12 日 下層へ掘り下げ、人力精査。2 トレンチにて集石遺構検出。9 月 16 日 下層面において人力精査を進める。9 月 17 日 写真撮影。金田久璋氏（福井県文化財保護審議会）来跡。9 月 24 日 全体写真撮影。9 月 26 日 服部修一氏（町文化財保護委員会）来跡。9 月 29 日 調査図面作成終了。9 月 30 日 トレンチ埋め戻し、調査機材搬出。

調査区の掘り下げは重機を使用して耕土、堆積土を除去し、遺構検出面においては人力による精査を実施した。上層において遺構が確認された場合、遺構部分を残して適時、下層へと調査を展開した。調査区平面図・土層断面図は 1/20 の縮尺で作成。写真撮影は 35 mmモノクロフィルム、35 mmリバーサルフィルムを使用し、調査の各段階で撮影した。

## 第3節 基本層序

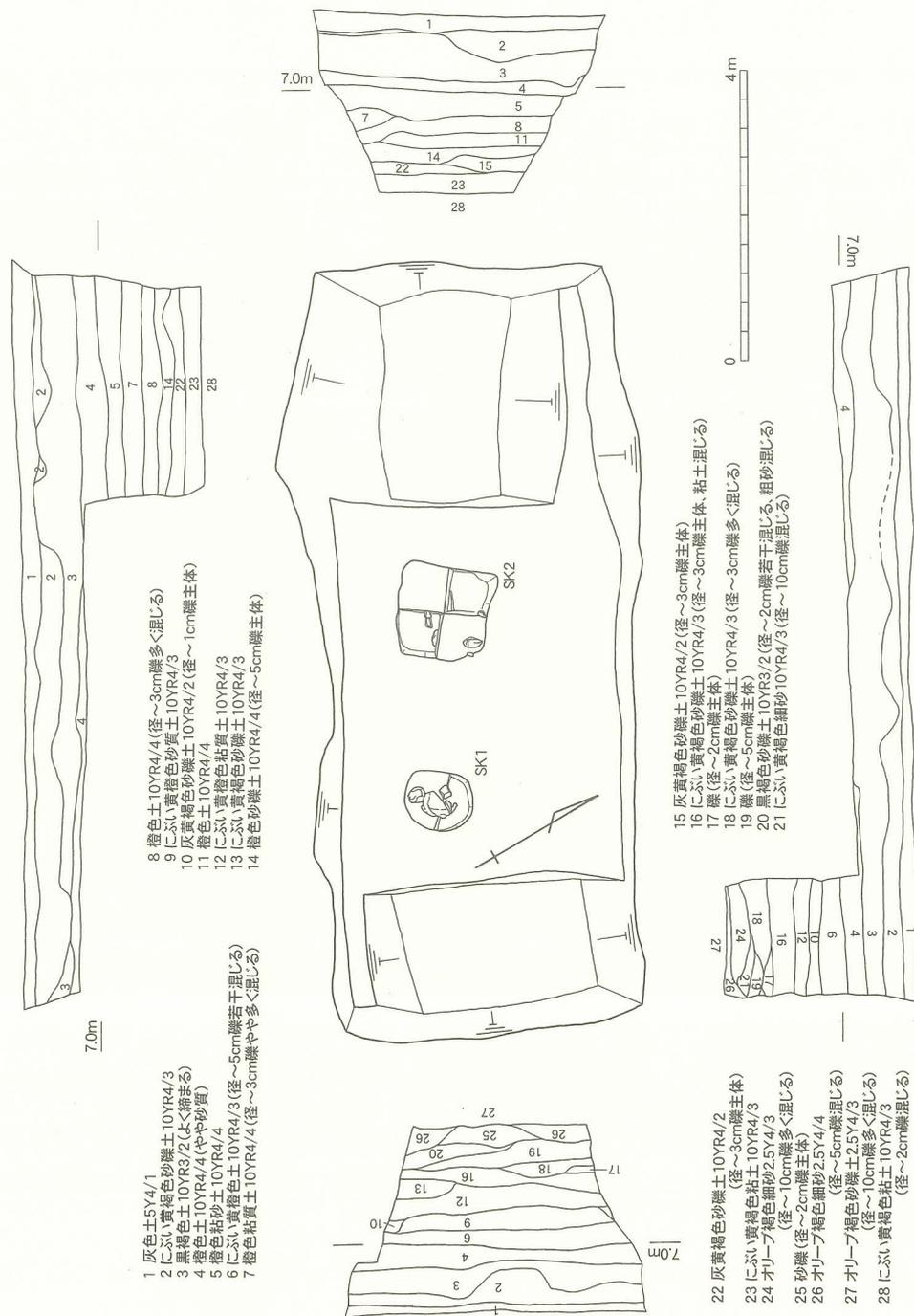
地表面の標高は 8.0m～8.2m。1 トレンチは上層から灰色土の耕土、こぶい黄褐色砂礫土の床土（層厚 0.3m～0.6m）、縄文中期の土器片 1 点、土師器甕胴部片 1 点、土師皿細片 4 点が混じる堆積土の黒褐色土（層厚 0.5m～0.7m）を経て、標高 7.3m前後で橙色土層（層厚 0.2m～0.4m）上面に至る。さらに下層には堆積土、橙色系の砂礫土、粘土、粗砂などが比較的レベルに堆積する。2 トレンチでは上層から灰色土の耕土、砂礫の床土（層厚 0.4m～0.6m）、攪乱層となる砂礫（層厚 0.5m～1.1m）を経て、標高 7.0m前後で暗褐色砂礫土層（層厚 0.4m～0.6m）上面に至る。さらに下層には褐色、暗褐色系の砂礫土、粗砂などが堆積し、標高 6.0m前後において炭・灰が混じる暗褐色粘土層上面へと至る。

## 第4節 遺構・遺物

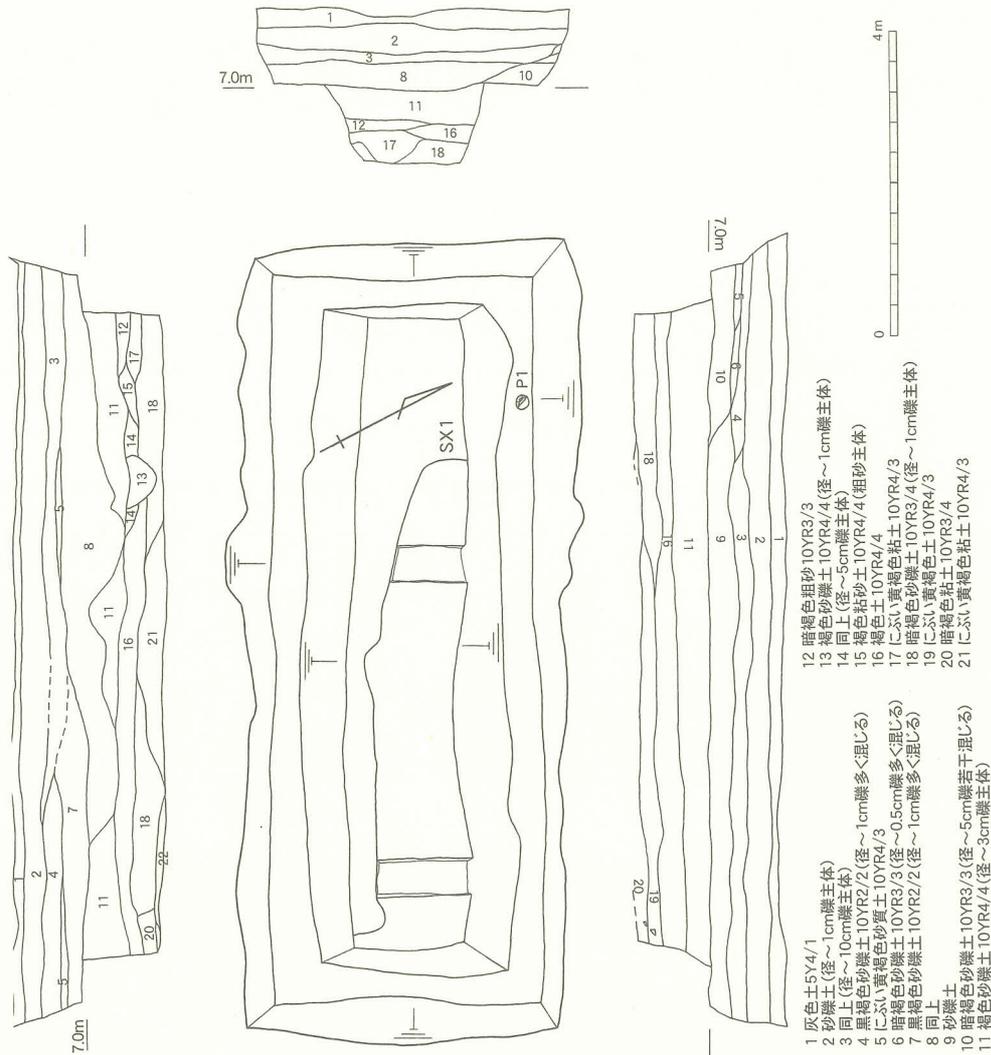
1 トレンチでは標高 7.3m 前後、橙色土上面において土墳墓 2 基が、2 トレンチでは標高 7.0m 前後の暗褐色砂礫土上面で小穴 1 基が、標高 6.0m 前後の暗褐色粘土上面において性格不明の集石遺構 1 基が検出されている。

### 土墳墓

土墳墓 1 (SK 1) は平面形態が円形を呈し、南北 0.97m、東西 0.83m、検出面からの深さ 0.38m を測る。掘り方の断面形状は箱型。掘り方埋土に暗褐色土、棺腐蝕部分の埋土ににぶい黄褐色土を持つ。棺部分の上位に 0.1m~0.4m の自然礫数点が分布し、底面付近から頭蓋骨、左膝蓋骨、及び右膝蓋骨の一部



第143図 今市遺跡1 トレンチ平面図・土層断面図 (縮尺 1/100)



第144図 今市遺跡2 トレンチ平面図・土層断面図 (縮尺1/100)

が水平に並んだ状態で出土した。頭蓋骨は上位の礫に押し潰された状態を示しており、棺の上に据えられていた礫が棺材の腐食によって下方に落ち込み、頭部を重圧で押し下げたものと思われる。土師皿細片1点が出土。木製桶型を用いた坐棺であったものと推測される。

土壇墓2 (SK2) は平面形態が隅丸方形を呈し、南東—北西 1.30m、北東—南西 1.32m、検出面からの深さ 0.24mを測る。掘り方の断面形状は箱型。一辺約 0.8mの隅丸方形の平面形態を持つ棺跡を検出した。掘り方埋土に暗褐色土、棺部分の埋土ににぶい黄褐色土、灰黄褐色土を持つ。棺部分から人骨(頭蓋骨、上腕骨、肋骨、脛骨など)が出土。南に頭部を向けて膝を抱える仰臥屈葬の状態であったものと考えられる。

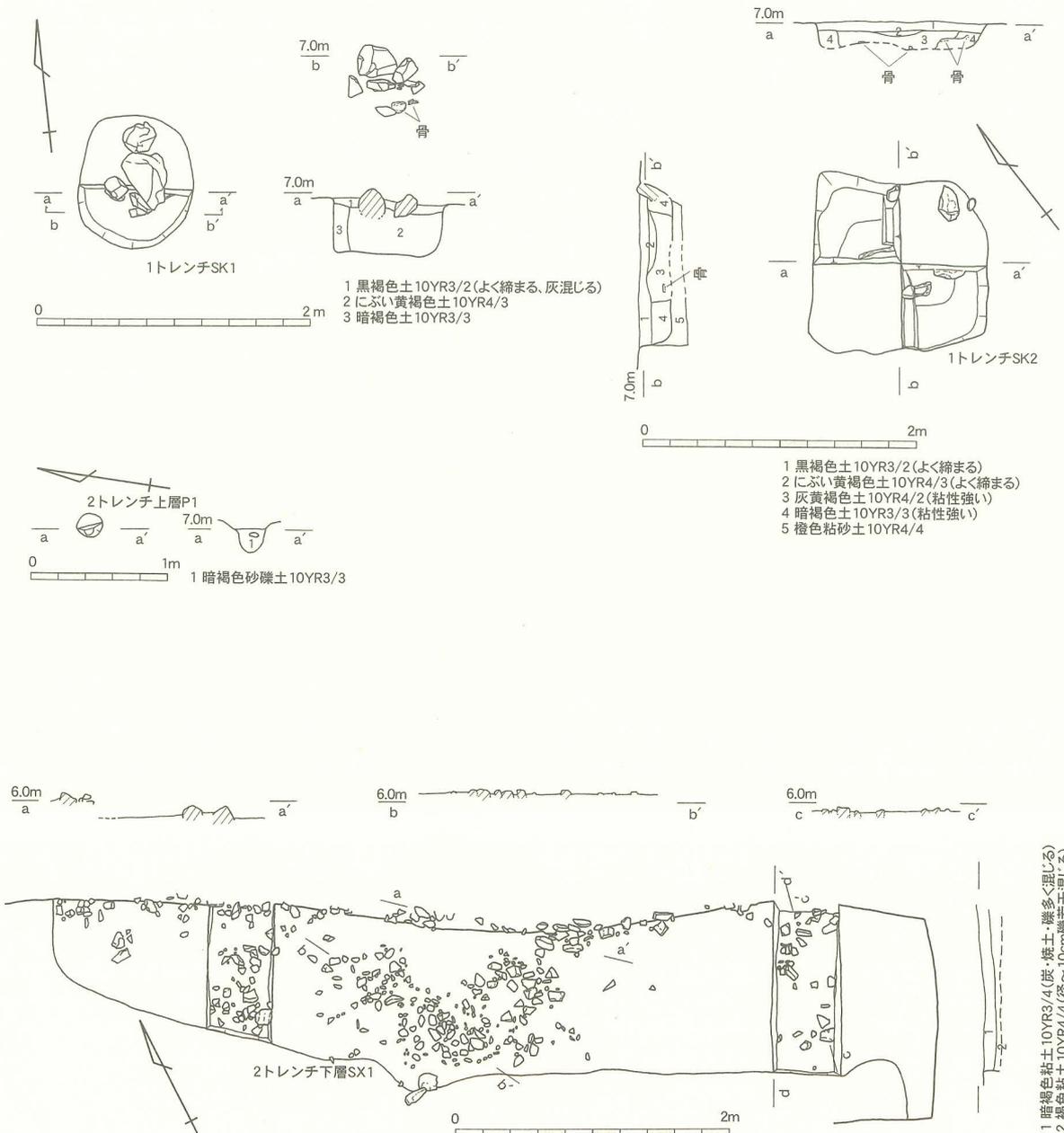
棺材の一部と思われる木片、鉄釘先端部細片2点が出土。方形木棺の使用が考えられる。

### 小穴

小穴1 (P1) は平面形態が円形を呈し、径0.2m、検出面からの深さ0.23mを測る。断面形状は弧状となる。暗褐色砂礫土を埋土に持つ。出土遺物はない。

### 集石遺構

集石遺構1 (SX1) は平面形態が不定形を呈し、長辺6.50m、短辺1.48m、検出面からの深さ0.17m以上を測る。断面形状は浅い平坦面を造る。褐色系粘土を埋土に持ち、炭、焼土とともに0.1mまでの大きさの自然礫が密に堆積する。遺構検出面において標高6.1mに礫の上面を揃える石敷き状の施設を確認した。平面形態が方形を呈し、南北・東西検出長1.6mを測る。礫の上面のレベル差から3回以上の礫の敷き直しが考えられる。遺物は出土していない。



第145図 今市遺跡遺構平面図・土層断面図 (縮尺1/50)

## 第5節 小結

これまで知られていた縄文時代、古代に伴う遺構、遺物は確認することができなかったが、近世に伴うと思われる土壇墓2基を検出した。2基の土壇墓平面形態の差異は使用棺材に起因するが、両者が時期差を示すものか、埋葬者の生前の立場、あるいは性別を示すものなのかは不明である。

近世墓の検出は、調査地周辺がいわゆる両墓制における埋め墓(サンマイ)の地であることを示唆する。地元の古老からの聞き取りにより、調査地北方の段丘北縁辺部において墓石と思われるものが不時発見されているとのことであるが、調査墓との関連ははっきりしない。詣り墓(ラントウバ)の対象として石塔、石仏の存在は近郊の寺院周辺に求めるのが妥当である。

若狭地方では浜瀬遺跡において、短刀1点、小皿3点、鉄鏟2点などを副葬し、人骨が仰臥伸展の状態を確認された近世墓1基が発掘調査されているが(石部他1966)、今回の調査で民俗研究の新たな基礎資料を提示できたものと思われる。

また、下層面において検出された集石遺構は近世以前に遡る遺構である。その性格について、出土遺物がないことから判然としないが、火を用いた痕跡が確認されており、被熱状況を考慮すれば炉跡と考えられる。ただし、いわゆる古代土器製塩に伴う石敷炉と扱うには根拠が脆弱である。海岸部に面する調査地の立地を考慮すれば江戸期以前、中近世製塩の一遺構としての可能性を考慮しておく必要もある。遺構の性格については留保し、類例を待ちたい。

### [引用・参考文献]

- 網谷克彦・森川昌和「44 今市遺跡」『福井県史』資料編13 考古 1986 福井県  
石部正志他「3 古代製塩遺跡の調査 (1)浜瀬遺跡」『若狭大飯』 1966 大飯町

## 第6章 毛ノ鼻遺跡

### 第1節 遺跡の概要

毛ノ鼻遺跡（福井県遺跡番号 30034）は北緯 35 度 37 分 35 秒、東経 135 度 58 分 58 秒付近、福井県三方郡美浜町佐田小字毛ノ鼻他に位置する。第 5 章で触れたように遺跡は敦賀半島西岸基部付近に広く分布する海岸段丘上の南寄りに所在し、遺跡から国道 27 号線を挟んだ北西側には縄文時代、古墳時代の複合遺跡と考えられている今市遺跡が所在する。西側、芳春寺山（標高 145.5m）から派生する支尾根上には弥生時代の石器が採集されている芳春寺山遺跡、あるいは中世経塚の芳春寺山経塚が所在している。

毛ノ鼻遺跡は表採遺物から弥生時代から中世まで続く複合遺跡と考えられているが、調査事例はない。弥生中期と思われる磨製石鏃 1 点の出土が報告されるに留まる（山口 1984）。

調査地は遺跡中心部のやや北寄りに位置するが、地形的には海岸段丘西縁部にあたり、調査地付近から西に向けては段丘面が緩やかに傾斜を始める地形変換点にあたる。

### 第2節 調査の経緯、経過および方法

調査地の地番は福井県三方郡美浜町山上 1-28-1。今回の調査は既存の造成地での個人住宅新築工事を契機とする。事業者（施主、工事請負業者）と美浜町教育委員会との間で埋蔵文化財保護に係る協議を行い、事前に試掘調査を実施することで遺跡の様相確認を行うこととなった。

調査は平成 15 年 6 月 9 日から 11 日まで実施。以下に調査日誌を抄録する。

6 月 9 日 調査地への水準点移設、造成土掘削、地山面での人力精査。6 月 10 日 地山面での人力精査、写真撮影、調査図面作成。6 月 11 日 調査図面作成、トレンチ埋め戻し。



第 146 図 毛ノ鼻遺跡調査位置図（縮尺 1/5,000）

調査は土砂掘削に伴う土壌軟弱化、不等沈下により新築される住宅に対する影響をなくするため、建物基礎施工部分の西側、住宅新築後に駐車場として使用する既存の造成地部分に北西-南東長約21m、幅2m強、面積44.8 m<sup>2</sup>の調査区(トレンチ)1箇所を設定した。

調査区の掘り下げは重機を使用して造成土を除去し、地山面においては人力による精査を実施した。調査区平面図・土層断面図は1/20の縮尺で作成した。写真撮影は35mmモノクロフィルム、35mmリバーサルフィルムを使用し、調査の各段階で撮影した。

### 第3節 基本層序

地表面の標高は13.5m~13.8m。上層から造成土である砂礫土(層厚約0.6m)、旧耕土である黒褐色砂質土(層厚約0.2m)、暗オリーブ褐色砂質土(層厚0.05~0.3m)を経て、地山層(段丘表層)となるオリーブ褐色土(層厚0.4m以上)上層へと至る。地山面の標高は12.4m~13.0m。北西に向けて微かに傾斜するが、トレンチ北西端付近でさらに標高を下げ、緩やかに傾斜する。

### 第4節 遺構・遺物

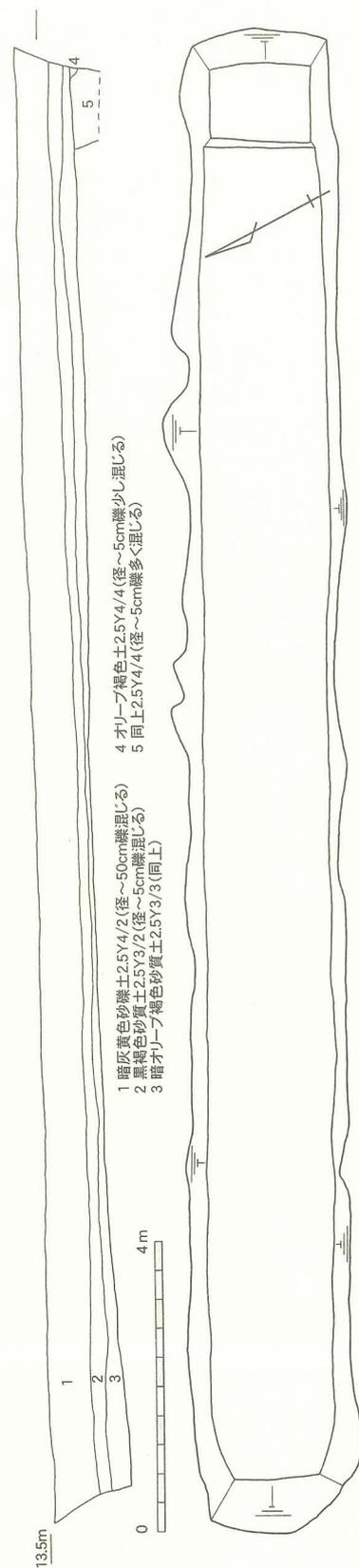
調査では地山面のオリーブ褐色土上面において多くの小穴を確認したが、かつて桑畑として土地利用された時期に伴う根痕である。遺構、遺物ともに確認されていない。

### 第5節 小結

調査地周辺は段丘西縁であり、遺構、遺物が希薄であることから遺跡西縁に相当することも考えられる。遺跡の西側、芳春寺山支尾根上に所在する芳春寺山遺跡の存在を考えれば弥生時代後期段階の遺跡の中心は調査地から北西側に分布しているものと考えられる。

[引用・参考文献]

山口充「美浜町内出土の後期弥生式土器と土師器」  
『福井考古学会会誌』第2号 1984 福井考古学会



第147図 毛ノ鼻遺跡トレンチ  
平面図・土層断面図(縮尺1/100)